
魔法先生ネギま! ~ 白雪の軌跡 ~

いつでもどこでも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ ～白雪の軌跡～

【Nコード】

N5576W

【作者名】

いつでもどこでも

【あらすじ】

雪の降るクリスマス・イブの日
1人の少女はその生涯を閉じた

だが、それは終わりではなかった
神と悪魔から力を貰い
少女は第二の人生を謳歌する
魔法先生ネギま！～白雪の軌跡～始めましょう

プロローグ（前書き）

今書いている小説に行き詰まったので投稿しました。

不定期更新ですし、駄文ですが見てください。

頑張って完結させるんで宜しく願います m (. .) m

ブローグ

12月24日。クリスマス・イブ。キリストの誕生日。聖なる祝祭。その日に私は、今にも死にそうな状態だった。

思えば私は生まれつき体が弱かった。

軽くぶつかっただけで骨は折れる、

風邪や肺炎などはしょっちゅうこじらせる。

小学生の高学年になるころは鼻血や吐血も繰り返す。

小学生と言ったが、勿論学校なんか行った事がない。

そして、中学生頃の歳になった時、

原因不明の病気にかかった。

全国・・・いや、世界中の医師に診せても治療は出来なかった。

なんせ、前例が全く無い、との事らしい。

そして、感染症だと困ると言う事で、

私は真つ白い部屋に隔離された。

唯一の救いが、外の世界が見れる大きな窓があったくらいかな。

それに、両親もよくお見舞いに来てくれた。

2人はそれぞれ世界を代表する大会社の重役なポストを担っていたのに、

週に一回は必ずお見舞いに来てくれた。

本当に申し訳ない気持ちと感謝の気持ちで一杯だった。

だけど、それも3年の年月が過ぎた頃、

私の病状は一気に悪化した。

一日に十何回も吐血を繰り返し、

身体中は激痛に苛まれて、

鎮痛剤も効かないほどヒドかった。
その度に両親は「命の覚悟をしてください」と電話で聞かされたみたいだった。

そしてこれも症状の1つなのか、
私の髪は色素が抜けて真っ白になった。
日本人特有の黒髪がお気に入りだったのになあ。

だけど最近になって体の痛みは嘘みたいにナリを潜めた。
先生が言うには「もう生きるために必要な機能は要らなくなったんでしよう」との事。
それが意味するは即ち——死だ。

そして私の命の灯火は今まさに消えようとしていた。

「雪・・・雪っ・・・!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お母さんは私の手を握りしめ、
お父さんは何も言わないけど、その目から涙が流れていた。
勿論2人は防護服を着用している。

「雪・・・ごめんね、丈夫な身体に産んであげられなくて・・・」

「お母・・・さん、私の方こそ・・・ごめんなさい、
丈夫な子供に生まれなくて・・・2人に・・・迷惑をかけて・・・」

「迷惑なんかじゃない、お前が生きていたお陰で私も母さんも、とても救われたんだ」

「お父．．さん．．」

はは、お世辞でも嬉しい言葉だな、それに、痛覚以外の感覚が残っていたのは幸いだっとな。お陰で最期の最期にお父さんとお母さんの顔が見れて、ずっと言えなかった言葉が言える。

「お母さん．．お父さん．．最期に．．1つだけ、言わせてください」

「雪つ．．最期なんて言っちゃ駄目!」

「うっん、いいの．．自分の最期くらい．．分かっているから」

次第に私の目蓋が重くなり、意識が遠退いていく．．
どうやらもう時間が無いみたいだ。
でも、これだけの時間があれば最期の言葉を言うには十分過ぎる。

「お母さん、お父さん．．私を産んでくれて．．
ありがとうございます．．ごじます．．っ」

ああダメだ、涙が止まらないよ。

私は体にある全ての力を振り絞ってお別れの言葉を言って、愛する両親を見つめながら意識を失った。

雪の降るクリスマス・イブの日、

私、柏木 雪は死んだ。

「あれ？ここは・・・」

と思ったけど、まだ私の意識は健在だった。

いや、ここが死後の世界なのかな？

なんか真っ白い空間が広がっているし・・・

「おお！・・・ようやく・・・ハア、ハア・・・見つけたぞ」

すると、急いで来たのか、

息も絶え絶えで白くて長い髭を生やしたおじいさんが、

私の目の前に走って来た。

「あの．．大丈夫ですか？」

取り敢えず心配だったので声をかける。

「ハア．．ハア．．、大丈夫じゃ．．でも、少し水を飲まさせてくれ」

おじいさんはコップ一杯の水を飲む。

あれ？おじいさんは何所からお水を出したんだろう．．．

「全く．．普段から運動せぬから、こんなだらし無くなるんだ」

そんな事を考えていると、

私達の頭上から、眼帯を付けた厳つい雰囲気のおじいさんが降りて来た。

しかもかなりの筋肉質．．．

ちょっと怖いです．．．

「普段から事務仕事を押し付けているのは何所のどいつじゃったか

な？」

対する髭のおじいさんは眼帯のおじいさんを半目で睨みつける。
これが世に言うジト目と言う奴なのでしょうか？

「あの・・・お話しの途中ですみませんが、ここは何所ですか？」

取り敢えず事態の説明を求めるために2人から話を聞かなくちゃ。

「おお、そうじゃったな。すまないの」

「すまんすまん。失念しておったわ」

うん、2人の感じを簡単に言葉で現すと、

白い髭のおじいさんは優しい感じの、孫大好き系。

眼帯のおじいさんは少し怖くて、頑固系。

今のところ髭のおじいさんの方が私は好きだな。

その2人のおじいさんは床に手をつい・・・って、え？

「「本当に申し訳なかった!!!」」

いきなり土下座をしてきました。

「あの、ちよつと落ちていくください！
え？私なんかしましたっけ？」

もちろん私は２人に土下座をさせるような事は一切していません。
 というかこの２人とは初対面です。
 全く意味が分かりません。

「そうか……この子は分からのじゃったな……」

「ならば最初から説明せねばならんの」

2人は姿勢を正してコホンっと、1つ咳き込む。

「まずは自己紹介せねばならんの、
儂の名はサタン。まあ、悪魔達の王じゃ」

「では僕も、僕はオーデイン。神達の王だ」

え？悪魔？神？

髭のおじいさんがサタンで、
眼帯のおじいさんオーティーン？

「ええええええええええええええええええええええええ！？」

私は大声で叫んだ。

だってサタンって、オーデインって．．．
え？なにこの超大物メンバーは！？

「まあまあ、いきなりで難しいかもしれんが、
取り敢えず落ち着くんじゃ、な？」

髭のおじいさん．．サタンおじいさんが肩を叩いて落ち着かせてくれた。

それとフカフカのソファーとジュースをくれた。

サタンおじいさん．．優しいよお．．．

「まずはお主にこの世の摂理を教えよう」

そう言う、オーデインおじいさんは黒板を取り出した。

この空間って何でも出せるんだね．．．

「まずは我々の説明だが、儂等“神”と呼ばれる存在はこの世全ての生命を生み出し、生き物のバランスを調節する。

次に悪魔の説明だが、悪魔達は終わりを迎えた命を回収する。

これも生き物のバランスを調節するためだ、

ここまででは分かったか？」

「要は、神は始まり。」

悪魔は終わりの使者と言った感じじゃな」

「は、はい」

オーデインおじいさんの説明に、サタンおじいさんが捕捉してくれてとても分かりやすかった。
ちなみにサタンおじいさんは、説明の合間にちよくちよくとお菓子
をくれた。

「だが、ここで重大な事が起こった」

「重大な．．事？」

「うむ、先程言ったがこの世界は微妙なバランスで成り立っている。
それは生命の数であり、寿命であり。幸せも例外ではない」

「プラスでも駄目じゃし、マイナスも駄目と言う事じゃ」

「じゃが最近、人々の幸せに偏りが出てきたのだ。
はつきり言つと、人々が不幸になってきたのだ。

このままでは世界が崩壊する危険が出てきたので、
我々は天秤の安定を図るため、

【運命システム】を使う事に決めた」

「運命システム．．．？」

「そうだ、神は命を生み出すだけで、どう生きるのかは決めない。

運命なんて物は生き物を縛る鎖だからな。

だが、その運命を決める事が出来るのが、この運命システムなのだ」

オーデインおじいさんの手にはあったのは普通の紙。
どうやらアレが運命システムと言う物らしいです。

「本来これを使う事は天魔界条約で固く禁止されている。
だがコレを使って人々の余分の不幸を1人の人間に背負わせ、殺す
事で、

幸せの天秤を平行に戻すことに決めたのだ。
その不幸を一身に背負ったのが・・・」

「私、と言う事ですか・・・」

これedyouやく納得しました。

つまり私は世界のために生贄にされたと言う事ですか。

「本当に申し訳なかった。世界のためとはいえ、
君にこんな非道い人生を歩ませてしまつて・・・」

「お主にはなんと詫びればいいのか・・・
償えるなら償わせてくれ。
なんなら儂等の命でも構わん」

2人はさつきと同じように土下座した。

償わせるといっても、そういうの好きじゃないんですね。
うーん、どうすれば・・・そうだ！

「じゃあ、3、4個お願いしていいですか？」

「うむ、全能神の名にかけて叶えよう」

「まず1つ目、お母さんとお父さんに子供を授けてください。
2つ目、お母さん達を可能な限り幸せにしてください。
3つ目、二度と私のような人間を創らないでください。
これで以上です」

「待つ・・・待つんじゃ！

君はそれでいいのか！？」

君が望めば全能神の座も、

魔王の座にも就けるのじゃぞ！？」

サタンおじいさんは私の願いを聞いて慌てた。
そんなに变なお願いだったのでしょうか？

「2人とも勘違いしているみたいですけど、

私はそんな全能神やら魔王の座なんて欲しくもありませんし、
2人の命で償わせる事もしません。

確かに私の人生は最悪でした。

死にたいと思つた事なんて一度や二度ではありません。

でも、私は幸せでした。

両親は私に沢山の愛情を注いでくれましたし、
病院の先生も必死に私を治そうと頑張ってくれました。
学校に行けなかったのが唯一の心残りでしたが、
私は私の人生に満足しています。

だから私は私のための願いではなく、
私のために尽力してくれた人達を幸せにしたいんです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

私の言葉を聞いた2人は口をあんぐりと開けて惚けていた。
全能神のオーデインと魔王のサタンがこんな表情をするなんて、
結構凄くありません？

私のいい思い出になりました。

「・・・・・・・・分かった。お主の願いは叶えよう」

「でも本当にそれでいいのか？
君が願えば第二の人生も謳歌出来るのに」・・・・」

「うーん、じゃあ転生は出来ますか？
マンガやアニメの世界の登場キャラクターとして」

思い出すのは入院したばかりに見てたSS。
確か転生モノの作品も結構あった。

「うむ、それぐらい訳ないぞ」

「して、どの世界に行くのかの？」

もちろんそれも決まっている。

学校の生徒として通い、尚且つファンタジーが入り乱れる世界。
それは……………

「魔法先生ネギま！の世界です！！」

マンガは3巻しか見てないけど、
あそこなら私も大丈夫な筈。

「了解した。で、能力はどうする？
本来は制限をかけるのだが、
お主なら何個でも大丈夫だぞ」

そっか・・・あの世界はバトルもあるんだよね。
確かネギ先生とエヴァちゃんが戦っていたし・・・
ちなみに私はエヴァちゃんが大好きです。
うーん、どうしようかな・・・
あまり相手を傷付けたくないしなあ。

「ふむ、ならば結界魔法はどうだ？」

守りには最適だし、心優しいお主にはピッタリだぞ」

「そうですね、私にピッタリです。

ありがとう、オーディーンおじいちゃん」

「おじつ・・・むう・・・」

「ご、ごめんなさい！

もしかしてイヤでした？」

「い、いや・・・もう一度呼んでくれぬか？」

「?・・・オーディーンおじいちゃん？」

どうしたんでしょう？

何故か“おじいちゃん”の言葉に物凄く反応しているんですが・・・

「そ、そうかそうか！おじいちゃんか！！

嬉しいぞ、まるで孫娘が出来たみたいだ！！

ガッハッハッハッハ！！！！」

オーディーンおじいちゃんは私を高く上げてクルクルと回り出し
ました。

前言撤回です。オーディーンおじいちゃんは頑固系ではなく、
孫大好き系だったみたいです。

「よし！こうなったら大盤振る舞いだ！！
魔力量はネギの6倍に設定しよう。
それにこの世界の魔法だけじゃつまらん！！
儂の魔法も雪に教えよう！！
勿論、結界魔法だけだな。
良かったな雪、これで世界最強の魔法使いだぞ！！
ガッハッハッハッハ！！！！
この世の春が来たああ！！！！」

なんか途轍もない事になって来ました・・・
確かオーディーンって神話だと、
魔法の達人だと書いてあったような・・・
チート真っしぐらですね。

「オーディーン、それぐらいにするのじゃ。
雪だって困っておるだろう」

好い加減目が回りそうな時、
サタンおじいちゃんが止めてくれました。

「む、すまなかったな雪。
目とか回っておらんか？」

「な、なんとか大丈夫です。
ありがとう、サタンおじいちゃん」

「ふおっふおっふお。よいよい、気にするでない」

そう言うと、サタンおじいちゃん是我的頭を優しく撫でてくれました。

気持ち良いです」

「よし、儂からも細やかな贈り物じゃ。儂も結界魔法をプレゼントしよう。

それとほれ、向こうの世界のお金じゃ。

無駄遣いするでないぞ?」

そう言つてサタンおじいちゃんから貰つた額は兆を超えてました。何に使えばいいのでしょうか・・・

「取り敢えず結界魔法の使い方は頭に入れておるから大丈夫じゃろう」

「忘れ物はないか?荷物は持ったか?おしぼりやハンカチは?」

オーディーンおじいちゃん。

遠足に行くんじゃないんだから・・・

「色々ありがとうございました」

「なに、これくらい何とも無いわ。
ではな雪。楽しんで生きるのじゃよ」

「イジメられたら言うんだぞ！
儂のグングニルで突き殺してやるからな！！」

オーデインおじいちゃんは光り輝く槍を振り回している。
うん、本当に殺りそうだな。
イジメられないように注意しないと、
主に加害者の子のために・・・

「分かりました。
サタンおじいちゃん、
オーデインおじいちゃん。
行って来ます」

次第に私の意識は眩い光に吞まれて行き、
私は意識を失った。

ブログ（後書き）

いかがでしたか？

感想とかくれると嬉しいです（＾－＾）／

主人公説明（前書き）

1
1 / 2
0

【聖結界・城】

【魔結界・靈喰】を加筆

主人公説明

名前：柏木 雪

性別：女性

構成

世界を守るために、人々の不幸を一身に背負わされた少女。

死後の世界で神と魔王に力を貰い、ネギま！の世界に転生した。

ネギま！はマンガで3巻しか読んでおらず、原作知識は殆ど無い。

何故3巻しか読んでいないのかというと、

病状が悪化して読むどころでは無くなったから。

ファンタジーは好きだけど、戦闘は好きじゃないと言う事で、結界

魔法を使う。

だが、雪の魔法は“防御”ではなく“結界”であり、

その違いを、雪はまだ知らない。

性格

基本はとても優しく、どんな人にも分け隔てなく接する。

何よりも友達や友情を大切に想い、

その想いに異性も同性も関係なくドキッとさせられる。

「怒らない人ほど、怒ると怖い」は、雪のためにあるような言葉で、

友達が傷付けられた時の雪の怒りは途轍もない。

容姿

体のラインはとても細く、

病気のせいで髪の色素は抜け、

生涯の殆どを病室で過ごしたため、

白髪で色白である。

ちなみに、髪の毛の長さは腰まで届くロングである。

能力

魔力量：ネギ・スプリングフィールドの6倍

気：0

戦闘スタイル：極度の魔法使いタイプ

属性：精霊よりも遥かに格上の神と魔王の加護を得ているので、全ての属性は余裕で使える。

魔法：雪は攻撃魔法が全く使えない

その代わり防御魔法は世界最強クラス
結界魔法にいたっては核爆弾すら防ぐ

魔法一覧

風障壁

作中では10tトラックすら防ぐ硬さだが、
雪にかかればナパーム弾やトマホークミサイルする防げきる。

氷楯

相手の攻撃魔法を跳ね返す。

雪の場合は自分の魔力を上乗せして跳ね返すので、
相手からしたら、溜まったもんじゃない。

聖結界

雪の真骨頂。

全能神オーディーンから授かった魔法の総称。

防御の他にも治癒や支援する効果を持つ結界がある。

聖結界一覧

【聖結界・城】―11/20 加筆

オーソドックスな防御結界。

聖結界の中では一番初歩で最下級。

だがその強固さは最強クラス。

純粋な力押しだと、エヴァのエクスキューショナーソードを以ってしても破れる確率は五分。

だが、転移などを断絶することはできず、結界内に転移するか、障壁突破などの魔法を使った方が早い。

それでも多大な魔力と時間と労力を使うが・・・

魔結界

雪の真骨頂。

魔王サタンから授かった魔法の総称。

防御の他にも妨害などの効果を持つ結界がある。

魔結界一覧

【魔結界・霊喰】―11/20 加筆

結界内にいる全ての精霊を喰らう。

魔結界の中では中位クラスの結界。

この結界の中では如何なる精霊も結界に喰われる。

精霊によって効果を発揮している事象は全て無効果される。

ありていに言えば、呪文は全て無効果される。

だが、既に効果が完了しているもの、例えば吸血鬼の呪いや、完全に石化された呪いには精霊がないので（作者のご都合）解呪できない。

その場合は、聖結界のほうに解呪の結界があるのだが、それは結界内にいる時だけなので、永続的な解呪ではない。

とまあ、こんな感じです。
随時、加筆していきます。

ついに来ました、ネギま！の世界（前書き）

取り敢えず完成したので投稿します。

このテンションがどこまで続くのかな？

ついに来ました、ネギま！の世界

雪side

「ん．．．着いたのかな？」

目を開けると、私は林の中にいた。

しかも何故か白いワンピースを着ている。

うゝん、ここが麻帆良学園なのかな？

確か麻帆良学園にも、こういう雑木林があつた．．．はず。

だけど、それよりも気になるのが．．．

「私の．．．足だ．．．」

私は今、立っているのだ．．．

自分の足で、自分の力で。

いつからなのか、体は動く事が出来ず、

歩く事すら諦めた私は今こうして立っている。

私の中にある言い知れない感情が、

胸の中から沸々と沸き上がってくる。

「私．．．歩ける．．．歩けるんだ！！」

こうなつたらもう、自分で自分を止められない。

私はゆっくりと歩き出し、次第にスピードを上げて走り出した。

「はあ、はあ、はあ．．あたっ！」

ただど感覚はまだ戻らないのか、

私は木の根っこに躓いて盛大の転けた。

「あたた．．ふふっ．．ふふふ．．」

痛い。痛いのに笑いが込み上げてくる。

いつもだったら大怪我、最悪死んでもおかしくないのに、私の体はいたって健在だった。

鼻から伝わるジンジンとした痛さが、私の中のナニかを満たしてくれる。

言っておくけど、私は決してMではない。

「あ、あれは．．」

私は空を見上げて見ると、

空は明るい満月の光によって照らされていた。

そして、その光に映し出された巨大なシルエツト、

それは・・・

「世界樹・・・」

そう、麻帆良学園の代名詞とも言える巨大な樹、それを見てようやく私はネギま！の世界に来たんだと実感した。

「・・・よし、あそこまで行ってみよう」

取り敢えずこの雑木林を抜けなくちゃいけないし、足の感覚を取り戻さないと。

私は世界樹に向かって走り出したんだけど・・・

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・もう、疲れちゃった」

走って10秒も経たない内に疲れた。

どうやら私の体は相当へなちょこらしい、

まあ、生前殆んどベッドで過ごしたから仕方ないか。

「でも・・・諦めない・・・!」

息をするのが苦しい。肺がはち切れそう。

足がもう動きたくないって言っている。
それでも私は諦めずに走り続けた。

苦しい。辛い。

なのにとても気持ち良い。

額から流れる汗が、身を叩きつける風が、
私をととても満たしてくれる。

「はあ．．はあ．．やつと、着いた．．」

一体いつまで走っていたんだろう？

10分かな？はたまた1時間かな？

時間を忘れて夢中に走りながらも、

私は世界樹に辿り着いた。

世界樹はマンガで見た時よりもずっと大きく、
月明かりに照らせれてとても神秘的だった。

「でも．．ちよつと、休憩．．」

目的地に着いた瞬間にドッと疲れが押し寄せた。
さすがにもう限界だよ。

「すう．．はあ．．すう．．はあ．．」

酸素が肺に沁み渡る。

それと同時に私のナニカが満たされる。

「そうか．．．私は．．．」

そっか．．．そうなんだ．．．

さっきから私の中にあるナニカがようやく分かった。

「私は．．．生きているんだ．．．」

転んだ時の痛みも、走った時の苦しさも、

そのどれもが生前とは全く違う感覚。

あの異常な痛みではなく、日常としての痛み。

それが私の“生きている”という感覚を満たしている。

「生きている．．．私は、生きているんだ．．．っ」

その言葉と一緒に涙が流れてきた。

あれ？どうしよう．．．

涙が止まらない、止まらないよ．．．

悲しくないのに、なんで、なんで．．．

「お、おい、そこのお前．．．だ、大丈夫か．．．？」

「ひつく．．．っん．．．ふえ．．．？」

すると、私を呼ぶ声が聞こえた。

振り返ってみると、そこにいた人物は私のよく知る人物だった。
それは．．．

「ま、迷子なのか？それともお腹が減ったのか？」

私の大好きなキャラクター。

金髪幼女こと、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。
通称エヴァちゃんと、そのパートナー、絡繰 茶々丸さんだった。

エヴァンジェリンside

「ふふふ．．．いい夜だ．．．今宵は満月か．．．」

私は窓に腰をかけてワインを傾ける。

ふふふ、本当にいい夜だ。

今は忌々しい呪いに封印されてるとはいえ、
満月の時だけは力が昂ぶる。

これで呪いがなければ．．．と言っても、無い物ねだりしてしまう
がないな。

私は満月を肴にしながら再びワインを傾けようとした時．．．

「な．．．っ！？、なんだこの魔力は！？」

突如膨大な魔力を感じ取った。

何なんだこの馬鹿げた魔力量は！？

じじい．．いや、あのサウザンドマスターをも軽く凌駕しているぞ！！

「——マスター。学園長からお電話です」

「分かった。すぐつなげ」

じじいもすぐに感じ取ったのか、私に電話をかけてきた。
本来なら居留守や出ても拒否するのだが、
今回だけは出てやろう。

「エヴァ！今の反応、お主も感じ取ったのじゃろ」

どうやら、じじいも相当慌てているみたいだな。

あの狸じじいがここまで慌てるなんて滅多に見られない。
その点だけは侵入者に感謝するか。

「ああ、私も感じ取ったぞ。今回は相当の大物だな」

「呑気に話しとる場合か！これは学園始まって以来の重大な危機じゃ！！」

儂等もすぐに部隊を編成させるからエヴァも向かってくれ！！」

おいおい、満月で少し力が戻っているだけで、

私は今魔力を封印されているんだぞ。

戦いでは魔力量の差など幾らでも埋められるが、さすがに今回だけは私もキツイ。

「じじい。貴様、私を殺すつもりか？」

私は電話越しに殺気を叩きつける。

「い、いや、言葉が悪かった。

お主にやって欲しいのは偵察じゃ。

相手の特徴を探ってくれ。

いざという時には退いてくれても構わん」

「偵察・・・か。

この私を偵察なんかを使うのか・・・

まあいいだろう、だが潰せるようなら潰してもかまわんだろ？」

「ああ、じゃが出来るだけ生け捕りにしてくれ。

相手の目的も知りたいしの」

「ふん、気が向いたらな」

そう言って私は電話を切った。

「——茶々丸。すぐに用意しろ。侵入者を潰すぞ」

「イエス。マスター」

私は従者の茶々丸を連れ、夜の麻帆良に飛び立った。
ふふふ、無粋な侵入者め。

私の宵越しの肴を邪魔しておって・・・

この麻帆良に來た事を後悔させてやる。

「——精々私を楽しませてくれよ。なあ、侵入者？」

~~~~~

だが侵入者は案外すんなりと見つかった。  
どうやら林の中を走っているみたいだな。  
魔力も隠さずにだだ漏れに流して、  
ただの馬鹿なのか？

それとも余裕のつもりか？

ふん、まあいい。早く出てこい、貴様の面をおがんでやる。

「マスター。どうやら出て来たみたいです」

「・・・ああ、そうみたいだな」

侵入者が林から出て来た。

だが、林の中から出て来た人物は・・・

「こっ、子供だと・・・！？」

白いワンピースを着て、腰まで届く白い髪、まるで雪を思わせるような白い肌をした、年が中学生くらいの少女だった。

だが全力で走ってきたのか、着いた瞬間に肩で息をしていた。その姿はとても愛らしく、微笑ましい・・・じゃない！！

「お、おい茶々丸！！」

あいつが今回の侵入者だよな？」

「はい、膨大な魔力は彼女から観測されてます」

そ、そうか．．．うん、そうだな．．．。  
私が間違える筈ないよな．．．

それにしても不思議な奴だな。

膨大な魔力量を保有しているくせに周囲を全く警戒せず、  
どこをどう見てもただの素人ではないか。

そいつはイキナリ泣き出して．．．って、おい！！

「ちゃ、茶々丸！！

ああ、あいつ泣き出したぞ！！」

「そ、そうみたいです．．．」

ど、どうすればいいのだ！？

何故泣き出したんだ！？

茶々丸も突然の事で慌てているし、  
も、もしかして１人で心細いのか？

「取り敢えず降りてみるぞ。茶々丸」

「イ、イエス、マスター」

私達は地面に降り立って、  
ゆっくりと、驚かさないように近づく。

そして私達は少女のすぐ近くに来た。  
決して威圧しないように、  
優しく、優しく話しかけるんだぞ、私。

「お、おい、そこのお前．．．だ、大丈夫か．．．？」

よし、ファーストコンタクトは完璧だ。さすが私！！

「ひつく．．．っん．．．ふえ．．．？」

ぐはっ！！

な、なんという可愛さだ。

しかも「ふえ．．．？」って、これは反則ではないか！！  
抱きしめたい．．．抱きしめてあげたいぞおお！！

い、いや落ち着け私．．

まずは冷静になるんだ．．．

深く深呼吸して、ついでに素数も数えろ。  
数えたな？数えたな？よし次だ。

「ま、迷子なのか？それともお腹が減ったのか？」

何故こいつが泣いているのか考えているんだ。

まず第一の可能性。

こんな夜遅くに女の子が1人で歩いている。  
考えれるのは迷子だ。

世界樹に向かって来たのも目印になるものがあると思っていたのか  
もしれない。

第二の可能性。

改めて近くで見ると、こいつの体はとても細いし弱々しい。  
もしかしたらお腹が減っているのかもしれない。

ふふ、我ながら見事な名推理。

幸い側には料理が美味しい茶々丸がいるし、  
迷子だとしても私達がいる。

見よ！この完璧な布陣！！

「ぐすん．．．違うの．．．違うの．．．」

私の名推理がはずれた．．．だと！？  
奴はまた泣き出してしまった。

「おお、落ち着くんだ！！」

まずは落ち着いて、それから話してくれ．．．な？」

「ぐすつ．．．分かり、ひつく．．．ましたあ．．．」

ぐっ、やはり可愛い．．．

この保護欲をかき立てるような感じがなんとも．．．

い、いや落ち着け。

取り敢えずこれでようやく話が聞ける。

見た感じ敵では無いように感じるが、

さて、一体どうしようか・・・

雪side

エヴァちゃんは私が泣き止むまで待っててくれました。

ちょ、ちよつと恥ずかしかったですう・・・／／

顔が赤くなっているのが自分でも分かります／／／

でもなんでエヴァちゃんまで顔を赤くしているんだろう？

「あゝ、ごほん、ではまず最初に聞くが、お前は一体何者だ？」

エヴァちゃんは1つ咳払いして、私の事を聞いてくる。

うゝん、ここはどう言ったら良いんだろう・・・

よし、まずは・・・

「私の名前は柏木 雪です。初めまして」

自分の名前を言って、ペコっとお辞儀する。

「む、これはご丁寧にどうも。

私の名はエヴァンジェリン・A・Kマクダウェル。

で、隣にるのが絡繰 茶々丸——って、違あああう!—!」

どうやら違ったみたいです。

最初っから分かっていたけど・・・

「私が聞きたいのは、どうやってこの学園に入ってきたのか、にっいてだ!」

って言っても何て言えばいいのかな?

「転生してやって来ました (キラッ) なんて人生の黒歴史になり  
そんな事は言いたくないし、

かと言って嘘を言う訳にはいかないし、どうすれば・・・

「うゝん、気付いたらここに居た・・・訳でもないし、  
なんて言えばいいのかな・・・?」

「なんだ? 要領を得ない答えだな・・・」

「うう・・・ごめんなさい・・・」

私は少し申し訳ない気持ちで項垂れる。

なんかこういう騙すような行為は嫌いです。

「うっ、分かったからそんな捨てられた仔犬のような目で見ないで

くれ。

「取り敢えずじじいに電話してみるから待っててくれ」

そう言つと、茶々丸さんからケータイを受け取つて、エヴァちゃんは“じじい”という人に電話をかけた。

「——ああ、私だじじい。侵入者の件だな・・・  
済んだ。」

——いや、倒してはいない。  
何と言えればいいのか・・・  
取り敢えず部隊をすぐに解散させる。

——ああ、そうだ。私が連れて行く。  
そうだな・・・タカミチは同伴させてもいいだろう。  
他の奴等は全て帰せ。  
いいか？変な事を考えるなよ？  
もし私の言葉を違えた場合・・・

——ふん、ではな」

そう言つてエヴァちゃんは電話を切つた。

「あの・・・もしかして侵入者つて、私の事・・・ですよ？」

そういえば麻帆良学園って侵入者を探知するような結果があったはず。

私って一応侵入者・・・なんだよね？

皆んなに迷惑かけちゃったな・・・

「ご、ごめんなさい！

皆んなに迷惑かけちゃって・・・」

「い、いや気にするな・・・

ほら、早くじじいの所に行くぞ。

私に着いてこい」

エヴァちゃんはすぐに後ろを向いて歩いて行っちゃった。

その後ろでは茶々丸さんがエヴァちゃんに微笑ましい表情をしていた。

ん？何でなんだろう？

「あ、待ってくださいエヴァちゃん」

取り敢えずエヴァちゃんに着いていかないと。

「ちゃん、って言うなああ！！」

エヴァ side

取り敢えず私はこいつが泣き止むまで待った。  
しばらくして泣き止んだようだが、

目が赤くなっており、

恥ずかしさなのか、顔も少し赤くなっている。

私もそれを見て顔が赤くなっているのが分かる。

イカンイカン！このままでは話しが脱線してしまう。

「あゝ、ごほん、ではまず最初に聞くが、お前は一体何者だ？」

まずはこいつの正体を、  
目的を探る事が先だ。

「私の名前は柏木 雪です。初めまして」

そう言つて、奴・・・雪はペコッと可愛らしくお辞儀した。  
ほお、なかなか礼儀正しいではないか。

「む、これはご丁寧にどうも。

私の名はエヴァンジェリン・A・Kマクダウエル。

で、隣にるのが絡繰 茶々丸——って、違あああう！——！」

なにこいつは自己紹介しているんだ！？  
いや、確かにこいつの名前を聞いたのはいいが、

私の知りたい事はもつと別のものだ！

「私が聞きたいのは、どうやってこの学園に入ってきたのか、についてだ！」

「うーん、気付いたらここに居た・・・訳でもないし、なんて言えばいいのかな・・・？」

だが雪から帰ってきた答えは、  
さっきの自己紹介よりも遥かに価値のない答えだった。

「なんだ？要領を得ない答えだな・・・」

「うう・・・ごめんなさい・・・」

何故だ・・・

雪から犬の耳と尻尾が見えるぞ・・・  
しかも両方シユンとして垂れている。

何故か私まで申し訳ない気持ちになってくる。

「うっ、分かったからそんな捨てられた仔犬のような目で見ないでくれ。」

取り敢えずじじいに電話してみるから待っていてくれ」

私は茶々丸からケータイを受け取り、  
じじいに電話をかける。

「——おお、エヴァか」

「ああ、私だじじい。侵入者の件だがな．．．  
済んだ。」

「ふお？、もしかして倒したのか？」

「いや、倒してはいない。  
何と言えればいいのか．．．  
取り敢えず部隊をすぐに解散させる。」

「ん？どういう事じゃ？  
まあいい、部隊はすぐ解散させる。  
侵入者はお主が連れてくるんじゃない？」

「ああ、そうだ。私が連れて行く。  
そうだな．．．タカミチは同伴させてもいいだろう。  
他の奴等は全て帰せ。  
いいか？変な事を考えるなよ？  
もし私の言葉を違えた場合．．．」

私はまたも電話越しに殺気を叩きつける。  
自分のためならいざ知らず、  
他人のためにこんな事をするとは．．．  
ふっ、一体どうしたんだと言うのだ、私は。

「わ、分かった、待っておるぞ」

「ふん、ではな」

ここまでしとけば、あの狸じじいも余計な事は考えないだろう。

「あの．．もしかして侵入者って、私の事．．．ですよね？」

私とじじいの会話でなにかを感じ取ったのか、雪はバツが悪そうな顔をする。

「ご、ごめんなさい！

皆んなに迷惑かけちゃって．．．」

雪の体からまた犬の耳と尻尾が現れた。

これが俗に言う、犬っ娘という奴なのか？

やはり．．．可愛いな．．．

「い、いや気になるな．．．

ほら、早くじじいの所に行くぞ。

私に着いてこい」

私は赤くなっている顔を悟られないように踵を返し、学園に向かって歩き出す。

茶々丸が何故か微笑ましい表情を向けていた。

あとでネジを回してやる・・・

「あ、待ってくださいエヴァちゃん」

その後ろを雪は小動物みたいにテコテコと着いて来た。それよりも・・・

「ちゃん、って言うなああ!!」

私は600歳を超えているんだぞ!!  
ちゃん、と呼ぶな!!!

## ついに来ました、ネギま！の世界（後書き）

やっぱりエヴァちゃんは可愛いです。

私が1番好きなキャラクターです。

この物語のメインヒロイン？はエヴァちゃんかな？

次回はあのハチャメチャなキャラが登場！？

はたしてそのハチャメチャなキャラとは誰なのか？

次回をお楽しみに（＾－＾）／

感想まってまゝすゝ（＾o＾）／

麻帆良に入学しました！（前書き）

なんとか一話仕上げました  
まさか一週間以上かかるとは・・・  
もう少し早いペースで更新したいです。

麻帆良に入学しました！

雪side

エヴァちゃんに連れられて、私は麻帆良学園女子中等部にいます。どうやらエヴァちゃんが言っていた“じじい”という人は、この麻帆良学園の学園長らしいです。

そういえば学園長の後頭部って何であんなに長いのかな？

あの後頭部には謎の生物が棲んでいて、それが学園長の本体だったりして……

「ドキッ！驚愕の事実！！学園長は宇宙人だった！？」なんてね。

まあ、冗談はこれ位にして。

何で女子中等部に学園長室があるんだろ？

もしかして学園長は変態さんなのかな？

私の中で学園長の株価が急速に下落している、ついこの頃です。

「おい、ちゃんと着いてこいよ。迷子になっても知らんぞ」

「あ、はい。ごめんなさい」

そんな事を考え込んでいるとエヴァちゃんに怒られちゃいました。でも改めて見るとやっぱり凄いなあ……

教室の風景……等間隔に並んでる机と椅子……使い込んでいるのか、綺麗に消えずチョークの粉が薄っすらと残っている黒板……

これが……これが学校。私が夢にまでみた学校の風景……

「ふふ．．．ふふふ．．．」

その風景に私がいて、そして沢山のお友達と楽しくお喋りして、みんなで一緒に授業を受ける．．．

そんな光景を想像したら何だか笑いが込み上げてきちゃった。

「む？どうしたんだ？イキナリ笑いだして」

「あ、えと．．．なんだかとっても新鮮で、つい．．．」

「新鮮？確かに麻帆良は世界レベルで大きい学園だが、大きさ以外は普通の学校と変わらんだろう」

「うっん、違うの。私って一度も学校に行った事がないんだ」

「なに？それはどういう——」「マスター。到着しました」む、そうか．．．」

エヴァちゃんが喋ったと同時に目的地に着いた。

エヴァちゃんは渋々といった様子で会話を止めて扉の前に向き直った。

扉は他の部屋と違ってとても重々しく、【学園長室】と書かれた札がかけられていた。

す．．．少し緊張してきました．．．

「まずはじじいと会ってこれからの事を決める。なに、悪いように

はせんよ。

それと、さっきの言葉には後で必ず答えてもらうぞ」

エヴァちゃんはそれだけ言うと、学園長室に入って行った。

しかもノックもせずに「連れてきたぞ、じじい」の一言だけ。

もしこれを言葉で表すとしたら、ズカズカといった言葉が1番正しいと思う。

それに続いて茶々丸さんがペコっと一礼してから入る。

うん、私もそれが1番正しいと思うな。

私も茶々丸さんにならって「失礼します」と一言、そしてお辞儀してから入る。

その中に居たのは・・・

「成る程のう・・・君が件の侵入者・・・というか迷子じゃな」

あまりにも人間離れた外見・・・いや、後頭部を持つおじいさんと・・・

「これは凄いね・・・魔力量はナギさん以上だね・・・」

メガネをかけた渋いおじさん、明日菜ちゃんの想い人の高畑先生だった。

side out

雪が部屋に入ったあと、学園長に「まずは座りなさい」と促されて雪はソファに座った。

その向かいにテーブルを挟んで学園長とタカミチ。

そして学園長専用と思われる1人用のイスにエヴァが座り、側には茶々丸が控えている。

図で表すと

高畑 学園町

□ □ □ □ □ □    エヴァ

茶々丸

雪

な感じた。

何故かエヴァがエラそうに座っているが、まあエヴァだから仕方ないか。

「さてと、まずは自己紹介からじゃな。」

私の名は近衛 近右衛門。この麻帆良学園の学園長をしておる」

「僕の名前はタカミチ・T・高畑。よろしくね」

「わ、私の名前は柏木 雪です。は、初めまして」

2人に続いて雪も自己紹介するが、緊張しているのか少し吃りなが

らの自己紹介となった。

その雪の姿に1人の吸血鬼は微笑ましい視線を、1人のロボットは最新技術を駆使して録画していた事を他の人は知らない。

もちろん画質はブルーレイ。その映像はロボットの記憶領域に永久保存された。

「自己紹介も終わった事じゃし、早速話しに入るぞ。

単刀直入に聞くが、君の目的は何かの？

どうやって麻帆良に入ったのじゃ？」

近右衛門は雪に優しく語りかけるが、その言葉とは真逆に近右衛門は魔力を開放して雪にぶつける。

それを見たタカミチは少し焦り、エヴァ達は傍観を決め込む。  
だが当の本人はというと・・・

「えと・・・転せ・・・じゃなかった。その、なんて言えば良いのかな・・・」

近右衛門の魔力を全く気にせず質問に頭を悩ませていた。

いや、気にしてないではなく、厳密に言つと気付いてない、と言つた方が正しい。

幾ら神と魔王からチート級的能力を貰っても雪はただの一般人、気付けというのが無理な相談である。

それを分かった近右衛門は魔力を収め、タカミチはポケットから手を抜く。

エヴァに到つては近右衛門の物だろうか、日本酒を飲み始めている

始末。

それを見た近右衛門は「ふお！？ 儂のお気に入りが．．．」と言っているがエヴァは気にせずに日本酒を飲む。

タカミチは近右衛門が仕事にお酒を飲んでいたのを知り、（学園長の給料、カット出来ないかな？）なんて思っている。

はつきり言つてこの空間は力オスの極みである。

と、その空間の中に．．．

「——雪。困っているようだな」

「——ここからは儂等に任せとくれ」

突如2人の声がしたと思ったら、空間に2つの亀裂が入った。

1つ目は天井から穴が空き、眩い光を背にして眼帯を着けた老人。神々の王オーディーンと、

2つ目の亀裂は床に走り、そこから全てを焼き尽くすような火柱と共に白いローブと長い髭を蓄えた老人。悪魔の王サタンが現れた。

「なっ！？ なんなんじゃお主達は！？」

「——っ！！」

その2人の登場に近右衛門は懷に忍ばせていた自分の杖に手をかけ、タカミチはポケットに手をつ込み即座に臨戦体制をとる。

（ああ、死んだな．．これは間違いなく死んだな．．）

それとは逆に、エヴァは2人から漏れ出している力を一瞬で見抜き抵抗する事を諦めた。

雪は事態に全くついてこれず、頭の上に？を2〜3個浮かべている。

「いきなり出てきて済まぬの。儂等は雪の後見人のような者じゃ」

「別に争うつもりは無いから落ち着いてくれ」

おじいちゃんズは皆んなに交戦の意味はないと伝え、近右衛門とタカミチは武器を下ろす。

その後にサタンが「座ってもいいかな？」と尋ね、近右衛門が頷くと、おじいちゃんズは雪の隣に座った。

「おじいちゃん達、どうしたの？」

「雪が心配だったから見ていたんだよ。

そしたら案の定困っていたみたいだったから儂等が出向いたんだ。なに、ここから先はおじいちゃん達に任せろ」

オーデインは雪の頭をゴシゴシと少し強目に撫でる。

雪はその強さに頭を揺られながらも顔を綻ばせた。

タカミチや近右衛門、更にはエヴァ達までその光景にポカンと口を開けていた。

「騒がしくて済まないの。先ずは自己紹介から。  
儂の名はサタン。で、もう1人がオーデインじゃ。  
名前で分かる通り、儂等は魔王と全能神じゃ」

「なっ！？サタンとオーデインだと！？  
悪魔達を統べる王と神々の王が何故ここに居る！？」

流石に相手の力を一瞬で見抜いたエヴァも、まさか相手が魔王と全能神と思わなかったのか驚きの声をあげる。  
近右衛門は既に頭がフリーズし、タカミチは（意外とサタンって優しいんだね。ちょっと驚いたよ）なんて事を考えていた。

「まあ、驚くのも無理は無いが落ち着いとくれ。  
その事も含めて、雪の事も、儂等の事も全てお話ししよう」

サタンは混乱している皆を宥め席に着かせる。  
皆んなも落ち着きサタンの言った通りに席に着く。

「ありがとう。それではお主達の聞きたい事、知りたい事は何かの？  
答えられる範囲でなら嘘偽りなくお答えしよう」

「分かり申した。では最初に、そこにいる雪君は一体何者なのじゃ？  
その膨大な魔力量、明らかに異常すぎる」

「雪の事かの？雪は．．と、雪。君の事を伝えたいのじゃが、い  
いかの？」

「うん。いいよ、おじいちゃん」

「分かった。まず雪の事じゃが、雪は――」

それからサタンは雪の事を話した。

雪がこことは異なる次元に存在する異次元の住人であること。

その世界で世界中の人々の不幸を一身に背負わされたこと。

雪の降るクリスマス・イブの日にその一生を終えたこと。

そしてサタンとオーデインから力を貰ってこの世界に来たこと。

その全てを皆んなに話した。

『．．．．．』

それを聞いた皆は声が出なかった。

雪の歩んできた人生はあまりにも悲惨だった。

身体中を激痛に苛まれ、毎日が死の恐怖に怯える日々。

そして余りにも早すぎる死。

世界を救うためとはいえ、雪は人柱にされたのだ。

「何故．．何故なんだ．．」

すると、エヴァは絞り出す様に呟いた。

「何故なんだっ!!」

何故お前は笑っていられるんだ!!

辛いのか!? 悲しくないのか!?

なんで．．．なんでお前は．．．っ」

エヴァは目に涙を浮かべて叫んだ。

それが同情なのか、それとも彼女の優しさなのか、

エヴァはまるで自分の事のように叫び、雪に詰め寄った。

「優しいんだね。エヴァちゃんは。

でも私は大丈夫。確かに、辛い、悲しいって言えば嘘になる。

だけど私は私の人生に満足してるの。

お母さんとお父さんは私を沢山愛してくれて、おじいちゃん達は私を大切に思ってくれて、

そしてエヴァちゃんは私のために泣いてくれている。

それが私の幸せ。辛さも悲しさも全部押し流してくれる私の幸せなの。それで十分なの」

雪はエヴァを抱き寄せ、エヴァの頭を撫でる。

その光景はどこまでも優しく、どこまでも綺麗だった。

「ふ、ふん! 別に泣いてなどおらんわ!

ただ眠たくてアクビを噛み殺しているだけだ!」

恥ずかしさで顔を赤くしているのを見られたくないのか、  
エヴァは雪からソップを向く。

「ああ．．素直じゃないマスター．．．録画録画．．．」

「こらボケロボ！お前はなに撮つとるとるんだ！！」

「あはは。エヴァちゃん可愛い」

「雪！お前もなに言っている！  
それとちゃんを付けるな！！」

今までの重い空気は何所へやら．．．  
ガアアアつと吠えて茶々丸に掴みかかる。

「全く．．騒がしいのう．．．」

「ほっほっほ。じゃが、それもまた良いものじゃ。  
どれ、近右衛門殿。一杯どうじゃ？」

「おお！まさかサタン殿に酌をして貰うとはの．．．」

それを見ていた他の人達は酒を飲んでいた。  
サタンは近右衛門のお猪口に酒をつぐ。

「むお！？なんと云う旨さじゃ！？」

「これほど濃厚な味わいなのに水を飲むように喉の奥に流れ込む」

「オーデインが神界から取ってきた神酒じゃよ。  
儂もこの味が大変気に入ってるのじゃ」

「これは儂の一生の思い出になるのう・・・  
おっと、サタン殿もどうぞ」

「おう、済まないの」

サタンと近右衛門は互いに酒を飲み交わし酒の味に舌鼓を打った。

「はっはっは。向こうは楽しそうだな。

どら、タカミチとやら。儂らも飲むとするか！」

「い、いや・・・僕は遠慮しますよ・・・」

「なんだあ！儂の酒が飲めないってか！！」

対するタカミチとオーデインペアはまるで会社の上司と部下のようなやり取りをしている。

「もしかしてもう酔っています!?!」

「男なら細かい事は気にするな！」

それとチビチビ飲むよりも一気に飲め！ラツパ飲みだ！」

「うぽっ！？」

オーデインはタカミチの口に酒瓶をまるごと突っ込んだ。  
いわゆるラツパ飲みと言うやつだ。

タカミチは（明日は二日酔い決定だね・・・）なんて事を思いながら酒に飲まれていった。

それからはエヴァと雪も加わり軽い宴会状態になった。

もちろん雪は未成年なのでジュースを飲んでいる。

オーデイン曰く、ユグドラシルに実った黄金の林檎を使った果汁  
100%ジュースらしい。

そうして人類史上最も豪華な宴会は幕を閉じた。

~~~~~

「おほんっ。話しがかなり脱線してしまったの・・・
好い加減話しに戻るとしよう」

宴会が終わった後、近右衛門が話を切り出す。
その瞬間皆んなも顔付きを真剣なものに変える。
ちなみにタカミチは酔い潰れて寝てしまった。

「君の事はよく分かっているが、改めさせて聞かせて貰う。
柏木 雪君。君はこれからどうするのじゃ？」

この学園で、この世界で。君は一体なにをする？」

「私は――」

近右衛門の問いに雪は視線を逸らさずに・・・

「生きる事です。この世界で私は精一杯生きてみたいです」

キツパリと、ハッキリと、生きたいと答えた。

「あいわかった！それでは柏木 雪君。君を麻帆良学園 女子中等
部 2－Aに編入しよう。

改めてこの世界へようこそ。第二の人生を楽しんでくれ」

「はい！ありがとうございます！」

雪は近右衛門の言葉に嬉しそうに顔を綻ばせた。

こうして柏木 雪は麻帆良学園に正式に入学する事になった。

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

と、思いきや雪はなにか気まずそうな顔をした。

「ん？どうしたんだ？」

「私．．授業に着いてけない．．．」

「．．．．．は？」

大変な事だと思ったエヴァは予想よりも対した事ない雪の言葉に？
を浮かべた。

「だって私、学校一度も行った事が無いんだもん。
体が大丈夫だった時に少し勉強したぐらいで．．．
中学の授業に着いていけないよおお．．．」

だが当の本人にとってはかなり深刻な問題らしい。
雪は某ネコ型ロボットに泣きつくメガネの少年のようにエヴァに泣
きついた。

「ほっほっほ。安心するんじゃない雪。
その程度の問題は杞憂に終わる」

ところがどっこい。ここには魔王と全能神がいる。

案の定サタンは解決策があるらしく、からからと笑う。

「ほ、本当？おじいちゃん？」

「こんな事もあるのかと魔界のある人物に頼んどったのじゃ。雪の家庭教師をして欲しいとな。では早速呼ぶでしょう」

サタンが言った瞬間、床に五芒星の魔方陣が広がった。

五芒星は次第に輝きを増し、やがて魔方陣は綺麗な音をたてて割れた。

魔方陣が割れた瞬間、閃光が走りみんなは目を瞑ったがすぐに光は収まった。

みんなが目を開けた時、そこには1人の人物が立っていた。その人物は・・・

「王。お呼びして頂き光栄至極で御座います」

長くもなく、短くもない黒髪。

180cmと割と高い身長。

20代前半と思われる若く、そして凜とした顔立ち。

一目見ただけでわかる最上級の燕尾服。

左目に銀のモノクル装着して。

完璧で全く淀みの無い礼。

まさに執事という言葉そのまま現したような男性だった。

「済まないの。急な頼みを引き受けてくれて」

「いえ、とんでも御座いません。

貴方様に初めてお願い事をされたのです。

それを断れば私一生の恥。地獄の業火に身を投じています」

「そう言ってくれると助かるわい。

して、今回お主に頼んだのはこの子の事じゃ」

「成る程．．このお方が．．」

男性は雪に向き直りゆつくりと歩き出した。

そして雪の目の前まで歩くと膝を着いて臣下の礼をとった。

「お初にお目にかかります。

この度雪お嬢様の教育係をさせて頂きますマラクスと申します。

至らぬ点は多々御座いますが、全身全霊で貴女様にお仕えする所存で御座います。

どうか宜しくお願い致します」

「え、えと．．宜しく申し上げます．．」

その余りにも常識外の挨拶に雪は少し戸惑っていた。

「マラクス．．あのマラクスか!？」

ソロモン王が従えた魔神の石柱にして30個軍団を率いる大いなる

伯爵。

【博識伯】の異名を持ち悪魔の中で最も賢いと言われている、あのマラクスか!？」

「はい。その通りで御座います。

貴女様もかなりの博学なご様子ですね。

エヴァンジェリン様」

エヴァはマラクスの正体を見抜いて驚きの声を上げる。

それに対してマラクスはエヴァの見識に賞賛の言葉を述べながら完璧なお辞儀をする。

「このマラク스에雪の家庭教師を務めてもらう。

それと身の回りの世話も手伝ってくれる。

期間は一ヶ月程じゃが、必ず雪の助けになってくれるじやろう。

儂が最も信頼する悪魔じゃからな」

「勿体無きお言葉で御座います。

それと短い間ではありますが宜しくお願い致します。雪お嬢様」

「わ、私の方こそよろしく。マラクスさん」

雪とマラクスは改めてお互いに挨拶を交わし握手をした。だが雪はまだ少しだけこちなかった。

「ふむ、一ヶ月か・・・」

今は夏休みじゃから丁度いいのう。

雪君の勉強が終わったら2ーAに転入させるとしようかの。
そうじゃ、エヴァ。お主の所に雪君を住ませてはどうかの？」

「ああ、別にいいぞ」

「！．．．珍しいのう。」

お主がここまで他人に心を許すとは．．．」

近右衛門は何気なく言った言葉にエヴァが快諾した事に驚いた。
それと同時にここまでエヴァの心を許した雪にも驚いていた。

「な．．っ！？ち、違う！

雪の力に興味が湧いたただだから住まわせるんだ！

もしかしたらこの呪いを解く手掛かりがあるかもしれないからな！

その後の事は適当に寮に住ませろ」

エヴァはそんな事を言っているが顔を真っ赤にさせていては照れ隠しだと誰でも分かる。

「エヴァちゃんは本当は私と一緒に住むのは嫌なの？私って邪魔なの？」

．．．前言撤回。分からない人物がいた。

雪は目をウルウルさせながらエヴァを見つめる。

どうやら雪は人の言った言葉を真に受けてしまつらしい。
エヴァの良心に見えない罪悪感という名の矢が次々と刺さる。
刺さりまくって剣山のようになつてしまった。

「ちちち、違ふんだ!!」

さっきの冗談であつて、決してお前と一緒に住むのが嫌な訳じゃない!
い!

寧ろ一緒に住みたいくらいだ!」

「本当・・・?。嘘・・・つかない?」

「ああ! 勿論だとも!

一緒にお風呂に入りたいし、ベッドで一緒に寝たいくらいだ。
だから泣かないでくれ・・・な?」

「うん。エヴァちゃん・・・大好き・・・!」

エヴァの言葉に表情が180°。変わつて満開の笑顔でエヴァに抱き
ついた。

エヴァも満更でもないのか、顔を真つ赤にしながら雪の抱擁を受け
止める。

「ああ・・・顔を真つ赤にさせているマスター・・・
なんて可愛らしいのでしょう・・・録画録画・・・」

「こらあああ! なに撮つとるんだポケロボオオオ!!」

茶々丸の行動に吠えるエヴァだが雪の抱擁によって抜け出せなかった。

こうして雪の第二の人生の初日はドタバタしながら過ぎていった。

柏木 雪 麻帆良学園女子中等部2-Aに転入

麻帆良に入学しました！（後書き）

とりあえず初日は終わりです。

しばらくはオリジナルの話になりますがこれからも見てってください。

今回登場した執事のマラクスは黒執事のセバスチャンって言えば分かりますかね？

エヴァちゃんはエヴァちゃんだよ！（前書き）

ようやく．．ようやく一話出来ました．．．

難産しました．．．

どうぞ見ていってください．．．

エヴァちゃんはエヴァちゃんだよ！

雪side

「ん．．ここは．．」

そつだ。あの後私はエヴァちゃんの家でお世話になる事になったんだ。

家に着いた後はエヴァちゃんと茶々丸さん、そして家庭教師のマラクスさんと少しだけお喋りして、そして寝たんだった。

「．．．．．」

このシチュエーション。私の中で分からないナニかがこみ上げてきます。

まるで沢山の先人達が繰り返してきたような、強迫観念みたいなナニか．．．

私もそれに習って万感の想いを込めて言います．．．

「．．．知らない天井だ」

よし！転生した時の通過儀礼は無事終了です。

これでようやく私も転生者になれた気がしました。

「さてと、これでもうやり残した物はないし．．．
んんん．．．よく寝た．．．．．！」

私はベッドから上半身だけ起こしてグツと体を伸ばす。

今思えばこんなによく寝たのは生まれて初めてじゃないのかな？

前世では身体中に激痛が走って寝ては起きて、寝ては起きての繰り返しだったし。

あ、そう言えば咳をただけで骨が折れた事もあったな．．．
そう思ったら私の前世って、もしかして壮絶な人生だったのかな？

「．．．悩んでも仕方ないや。今は今の人生を楽しまないと」

前の人生を振り返って少し気分が沈んだけど、悩んでも悔いても仕方ない。

起こった事を考えてもどうしようもありません。だってもう起こった事なんだから。

それよりも今を、これからを考える事が一番大切なんだ。

私、こういうポジティブな考えをするのが得意なんだから。

大事なのは“これまで”より“これから”．．．って、どこかの偉い人が言っていたような気がする。

「あ、もう朝なんだ．．．好い加減起きない．．．と？」

ベッドから出ようとした時に私の腰を誰かが掴んでいるのに気付いた。

私はそつと・ベッドに居るもう一人の人物を起こさないようにゆつくりと布団をめくつた。

すると、そこにいた人は・
・
・

「すう・すう・すう・すう・むにやむにや」

穏やかな寝息を立ててスヤスヤと眠るエヴァちゃんでした。

「か・カワイイです・・！」

なんだろう
・
・
・

小動物のように体をコロンと丸めて、見た目相応のあどけなさ。見てる私まで幸せになるような無邪気な寝顔。とても可愛いです！いや、かぁいいです！お持ち帰りです！

「えい」

ぶ
に
・
・
・

ああ！なんて柔らかいほつぺたなんだろう！

この病みつきになるような感触．．．たまらない！

「．．．えい．．．．．．えいえい．．．」

ぶに．．．．．ぶにぶに．．．

どうしよう．．．

だんだん止められなくなってきた。

私が突つつく度にエヴァちゃんのほつぺたは面白いように形を変える。

それに連動してエヴァちゃんの寝息も面白いものになる。

「うが~~~~．．．やめりよ~~~~．．．．．」

は！つい夢中になっちゃいました。

面白いからってこんな事して．．．反省です。

「でもどうしようかな．．．起きようにも起きれないや．．．」

エヴァちゃんの手は私の腰から一向に離す気がしない。

無理に引き離したらエヴァちゃんが起きちゃうかもしれない、それはやだなあ．．．

それにエヴァちゃんの手は私の腰から私の服をギュッと握り締めて

きた。

必死に私の服を掴むエヴァちゃんの姿はとても幼く、とても脆く感じた。

「．．よし！それならもう一回寝ちゃお！」

こんな不安そうな表情で服を掴むエヴァちゃんの手を離す選択肢なんかない。

私はもう一度ベッドに横になってエヴァちゃん包むように抱く。
身長のせいもあって、エヴァちゃんの頭は私の胸にあたる感じになった。

「あ．．エヴァちゃん．．あつたかい．．」

私の胸から．．腰から．．体全体からエヴァちゃんの体温が伝わる。
人ってこんなにも温かいんだ．．初めて知ったよ．．

それに誰かと一緒に寝るのも初めてかもしれない。

一度起きたにもかかわらず、私はエヴァちゃんの温もり感じながら目を閉じた。

side out

エヴァを抱きながら幸せそうに寝ている雪。

雪の腰に手を回して安心そうな寝息をたてるエヴァ。

ベッドで抱き合っている2人のその姿はともとても温かく、幸せ

で、見る者全てが安らぐ光景だった。

それはもはや一枚の絵画である。

モナリザだろうが、最後の審判だろうが、名だたる名画を何枚つんでも遠く及ばない程の。

おそらく教会とかで飾れば聖母画として崇められるだろう。

2人の姿は一種の不可侵さを思わせるような神秘さだった。

「ああ．．．なんという羨ましい光景なのでしょう．．．」

だがそんな事を知ってか知らずか．．．いや、多分前者の方だろう．．．

エヴァの従者、絡繰　茶々丸は2人を熱い視線で見つめる。

あまりに熱すぎて、視線はもはや視姦になっている。

「何をしているので御座いますか？茶々丸様」

と、そこへ雪の家庭教師のマラク스가やってきた。

従者である茶々丸にも様を付けるのは流石と言っべきであろう。

「いえ、私はただ視姦をしているだけです」

マラクスの問いに茶々丸は堂々と答える。

てか視姦って言っちゃったよ。この人．．．

そんな堂々と言うものではないだろうに．．．

「そうだ、マラクスさんも手伝ってください。これ、カメラです」

どこから出したのか・茶々丸はカメラを取り出してマラクスに手渡す。

ちなみにこのカメラは、雪はまだ会っていないが麻帆良の超天才、超 鈴音お手製の高性能カメラ。

折角の技術がこんな形で使われるとは超 鈴音も思ってもいないだろう・・・

「・・・朝ごはん、作りたいのですが・・・」

だが、いくら悪魔であるマラクスでも犯罪の片棒を担ぐ事はしたくないのか、茶々丸の提案を渋る。

彼は悪魔である前に執事なのである。

「後で作れば大丈夫です」

だけどマラクスの言葉はたった一言の元に却下された。

繰り返し言うが、茶々丸は視姦と言う常識かつ世間的に完つ全アウトの事をしている。

それなのに何故ここまで自信満々な表情で言い切れるのか是非聞いてみたい。

「・・・かしこまりました」

それに折れてしまったマラクスは仕方なくカメラを受け取った。
マラクスは茶々丸が満足するまでずっとシャッターを押し続けていたという・・・

エヴァ side

「う、ん・・・なんだ・・・この温かさは・・・」

朝起きた瞬間、いつもと違う感覚を感じた私は目を開けた。
私の目の前にいたのは・・・

「すう・・・すう・・・んっ・・・」

穏やかな寝息をたてて、私を優しく抱きしめて寝る雪だった。
雪の手は私の肩を優しく抱き、私の頭は雪の胸に抱き寄せられていた。

私の肩から・・・頭から・・・雪の体温が伝わり、とても心地よく・・・
じゃない!!

（なっ、ななな、なんで私は雪に抱きしめられて寝ているのだ!?!）

お、おおおお、落ち着くんだ私!!

ゆっくりと深呼吸して冷静に、冷静になって落ち着くんだ・・・イヤ無理だ!!

と言つか、なんで私まで雪の腰に手を回しているのだ!?

2人で抱き合っているその姿・・・

これではまるで私と雪が、ここ、ここに、恋人――

「~~~~~つつつ／／／」

そう思った瞬間に私の顔は火が噴いたかのように熱くなった。

違う・・・違うんだ・・・私は断じて、その・・・女と女が愛し合うような趣向は持っておらん。

持っておらんのだが・・・

「・・・いい・・・ものだ・・・」

人の温もりなど久しく感じていなかった。

こうして人の温もりを感じるのも悪くはない。

「――ビクッ!!」

そう思ったと同時に、何故私が人の温もりを久しく感じるのか分かった。

今は失われた技法を使って人を遥かに超えた存在。
他者の生き血を吸い、自らの糧とするソレはもはや化物と呼ぶに相
応しい。

人は理解の及ばぬ存在を排斥する。

当然私も例に漏れる事なく人々から排斥された。

成長することのないこの体では一つ所に留まることは出来ない。

私が吸血鬼と判れば皆は私を討ち滅ぼそうとしてきた。昨日まで優
しく接してきた隣人であつてもだ。

だから私は人々との関わりを絶った。

温もりを捨て、血と死と悪意が支配する世界を選んだ。

だが、その捨てた筈の温もりを私は今感じている。

この温もりが壊れる事が．．雪に拒絶されるのが怖い。
私が吸血鬼だと知ったら雪はどうすのだろう．．．
もちろん私を化物と言って拒絶するに違いない。
これまでもそうだったのだ、これからもそうに決まっている。
ならば吸血鬼であることを黙っているか？
いや、駄目だ。どんなに巧く隠しても確実にバレる。
なにより学園の“正義の魔法使い”が黙っていないだろう。

ギュッ

私が化物だとバレた時を想像した瞬間、朱に染まっていた顔が一気に青ざめた。

必然的に雪を抱き締める力も強くなる。

「んゝゝゝ．．あれ？エヴァちゃん？．．おはようゝ」

それに反応したのか、雪は間延びした声を出しながら目を覚ました。
それと同時に私の頭を撫でてきた．．．

「あ、ああ．．おはよう．．．」

いつもだったら恥ずかしさで顔を真っ赤に染め上げているが、今はそんな余裕はない。

私は雪の言葉に力なく返事する。

「——おはよう御座います。」

雪お嬢様、エヴァンジェリン様。朝食の準備ができております。下に降りて召し上がれますか？それともお運び致しますか？」

と、そこへ、雪の家庭教師のマラク스가やってきた。いつ見てもこいつの作法は完璧だな。動作に全く淀みが無い。

「ありがとうございます。朝食は下で食べます。行こ？エヴァちゃん」

雪は私に屈託の無い笑顔を向けてくる。そういえばマラクスは悪魔だったのだな。それなのに雪は何も気にせず普通に接して・・・もしかしたら私が吸血鬼^{化物}だと知っても雪は・・・

「ああ・・・行くとするか・・・」

雪は・・・私を拒絶しないでくれるだろうか・・・？

私を受け入れてくれるだろうか．．．？
なあ雪．．．私を嫌わなideくれるか？

雪 side

「うわぁ．．．スゴイ．．．!」

マラクスさんに朝ごはんの準備が出来たと呼ばれて一階に降りてみたんだけど目の前に置いてあった料理はスゴかった。
焼きたてなのか、パンからはバターのいい匂いが香って、目玉焼きは私の大好きなトロトロ半熟。
スープはキレイな黄金色をして、コンソメのいい香りがパンの匂いと合わさって食欲が刺激される。

「これマラクスさんがつくったの？」

「いえ、私だけでは御座いません。
茶々丸様にも手伝っていただきました」

「そんな．．．私はただマラクスさんの指示に従っただけです」

「ううん。そんな事ないよ! 2人ともスゴイ!
こんなに美味しそいなご飯をつくって本当にスゴイよ!」

私は2人の料理の上手さにピョンピョン飛び跳ねて喜ぶ。
だって本当にスゴいんだもん!!

「あ．．ありがとうございます」

「お褒め頂き光栄で御座います」

そう言つてマラクスさんと茶々丸さんはイスに座らず、私とエヴァちゃんはイスに座つて．．あれ？

「なんでマラクスさんと茶々丸さんはイスに座らないの？」

イスはちゃんと4脚あるのになんで2人は座らないんだろう？
それに、よく見たらご飯は2人分しかない。

「私にとって飲食はフェイクなので必要ありません」

「私も飲食はできますが必ずしなければいけない事ではありません
ので．．．」

2人は、さも当然といった感じでそんな事を言い出した。

「だめっ！！」

もちろん私がそんな事を許すはずがない。
私は大声をだして2人の言葉を否定する。

「2人とも食べる事が出来るならちゃんと食べなきゃだめっ!!
私とエヴァちゃんだけがご飯を食べて、マラクスさんと茶々丸さん
は見てるだけなんて・・・
そんな寂しい事認めないんだから!!」

「しかし・・・私が皆様と同じ食卓を囲む訳には・・・」

マラクスさんはまだそんなつまらない事を言っている。
イケナイ・・・イケナイよ・・・

「マラクスさん・・・私・・・怒るよ・・・?」

私は笑顔で・・・それはもう満面の笑みでマラクスさんに語りかける。
もちろん、まだ怒っていないよ?
ほら、笑顔笑顔♪

「っ!!・・・か、かしこまりました!
二分で調理して参ります!!」

マラクスさんは慌てながら台所に向かっちゃった。
一体どうしちゃったんだろう?

あまり急がなくていいんだよ？

「この雪の笑顔を見たマラクスは後にこう語った」

『——雪お嬢様を怒らせてはならない．．
憤怒の魔王を見る事になる——』と．．．

~~~~~

「——それじゃあ皆さんで、いただきます！」

マラクスさんがすぐにご飯を用意して、私達は挨拶を言った。  
ちなみにマラクスさんは約束通り二分で2人分のご飯を作っちゃった。

やっぱりマラクスさんはスゴいなあ．．．

「はむはむ．．．んううう美味い！ううう！  
マラクスさん！このパンとっても美味しいよ！！」

「恐縮で御座います。ですがこれ程いい食材があって始めての味で御座います。」

茶々丸様。この食材達はどこで仕入れているのですか？」

「食材は駅前の商店街で全て買っています。  
あと、八百屋は土曜日の朝9時に、

精肉店は日曜日の朝11時からタイムセールをやっています。  
お買い得です」

「ふむふむ．．八百屋は土曜の朝9時．．精肉店は日曜の朝11時にタイムセール．．と。  
貴重な情報ありがとうございます」

マラクスさんは茶々丸さんの言葉を次々とメモしてく。  
これが某弓兵や某正義の味方が言われてた“主夫”って言うやつなのかな？

「そうだ、等価交換．．と言う訳ではないんですが、私に料理の御指南をお願いできますか？  
マラクスさんの技術は目を見張るものがあります」

「そう言って頂けるのは光栄で御座います。  
私の拙い技術で宜しければご伝授させていただきます」

マラクスさんと茶々丸さんったらもう仲良くなっちゃってる。  
皆さんでご飯を食べる事がこんなにも楽しい事だったなんて．．  
前の人生じゃ、ご飯を食べる事すら出来なくて、ずっと点滴で体に栄養を送っていたから、こうやって皆さんで楽しくご飯を食べる事が出来るなんて前の人生じゃ味わえなかったよ。

「．．．．．」

ダメダメ！

ネガティブ思考禁止！！

前の人生は忘れちゃダメだけど、ネガティブになるのもダメなんだから。

ポジティブに．．ポジティブに考えるんだ私。

「2人のご飯とっても美味しいね。エヴァちゃん」

このネガティブ思考を振り払うためにエヴァちゃんに話しかけてみる。

「．．．．．」

だけどエヴァちゃんは私の言葉に答えずどこか上の空。ご飯もあまり手を付けてない。

そういえば、さっきからあまり喋っていなかったし、どうしたのかな？

それに私の顔をずっと見て．．．

私の顔に何かついてるのかな？

「エヴァちゃん？．．．おい、エヴァちゃん？」

「んあ？ああ．．．どうしたんだ？」

「どうしたんだ？。じゃないよ。  
さっきからずっと上の空。」ご飯もあまり手を付けないで・  
どこか体調悪いの？」

「いや、どこも不調はない。心配するな」

エヴァちゃんはそれだけ言うと、また何か考え込んだ。  
今は何を聞いてもエヴァちゃんは答えてくれそうにないから私は食事を続けた。  
一体どうしちゃったんだろ？

エヴァ side

朝食の時間が終わり、マラクスと茶々丸は後片付けの最中だ。  
雪は美味しいと言っていたが私には全く味が分からなかった。  
雪はロボットである茶々丸にもご飯を食べるように言ったのだ。

『——そんな寂しい事認めないんだから！——』

と言っとな。

全く・・とんだお節介で・・・  
超が付くほどのお人好しだな・・・

（だが・・・悪くはないな・・・・・）

でもそれが雪の良いところだ。  
その誰をも気にかける優しさ．．人によってはその優しさを利用する者もいるだろう。  
だが、分け隔てなく接するその純粹無垢な優しさが私は好きだ。私の心を温めてくれる。

（．．雪なら．．きつと．．）

雪なら．．きつと雪なら、私が吸血鬼<sup>化物</sup>だと知っても．．

「なあ雪．．お前に．．その、話したい事があるんだ」

私は意を決して雪に自分の正体を話す。  
吸血鬼である事を．．化物である事を。  
人から忌み嫌われた呪われた生物である事を。

「ん？なあに？」

「実はな．．私の正体は．．吸けつ——」

『——この化物めっつ！——！』

「つ・・・!?」

私の正体を話そうとした瞬間、過去の記憶がフラッシュバックしてきた。

憎悪がこもった怨さの声。

恐れが宿つた嫌惡の眼。

幾度と私に向けられてきた刃物のような感情。

その記憶が私の頭の中を駆け巡ってきた。

「この呪われた存在めっ！！」

「あんな化物が私の隣に潜んでいたなんて、なんと恐ろしい！」

「——人の生き血を啜るとは、おぞましい奴——」

「皆んな武器を取れ！あの化物を打ち滅ぼすんだ！！」

[illegible]

「.....」

その記憶を思い出して私は自分の服を握り締めた。  
怖い……

もし雪にあんな表情を向けられたら私はどうすればいいのだ？  
どうする．．．

やはり私の正体を話さない方が．．．

（．．．いや、なに弱気になっている！  
雪に私の正体を話すんだ！！）

私の中にいるもう一人の私が、自分の心に喝を入れて意思を奮い立たせる。

そうだ、もしこのまま私の正体を黙っても、それがバレタ時に雪を傷付ける事になる。

雪に拒絶されるのは辛い、雪を悲しませるのはもつと辛い。

私は内から湧き出てくる恐怖心を無理矢理押さえつける。

「私は．．私は、本当は吸血鬼なんだっ！！」

言った．．言ってしまった．．．

賽は投げられた。もう引き返す事は出来ない．．．

怖い、怖い、怖い、怖い、怖いっ！

心臓がバクバクと動悸する。嫌な汗が流れてくる。

雪は．．雪は私をなんと云うのだろう．．．

「．．．うん？．．うん、そうなんだ．．．  
話したい事ってそれだけ？」

・・・・・・・・・・・・・・は？

それだけ？って・・私が必死の思いで言ったのに、それだけ？って  
・・  
私の身を裂かれるような告白は、なんとも軽く呑気な声で返されて  
しまった・・

「ちよっ・・ちよっと待て！  
吸血鬼だぞ！？私は吸血鬼なんだぞ！？  
吸血鬼ぐらい雪も知っているだろう！！」

「もちろん知ってるよ。  
何言ってるのエヴァちゃん？」

・・・・・・・・おかしい。  
ここまで自然に返されると私のほづが間違っている気がしてくる・・  
.  
私をずっと縛ってきた呪縛が歯牙にもかけられないなんて・・

「知ってるなら．．っ

知っているのなら何故いつも通りに笑っている！？  
吸血鬼だぞ！？怖くないのか！？」

いつもと違う反応に焦ったのか．．

それとも“悪”であろうとする意地なのか．．

私は私でもよく分からない感情に叫んだ。

「怖い？なんでエヴァちゃんを怖がらなくちゃいけないの？  
エヴァちゃんは全然怖くないよ」

「そんな筈ない！だって．．  
だって私は．．化も——」

「エヴァちゃん！」

突然、雪が私の言葉を遮って抱きついてきた。

雪は私を優しく．．そして泣きそうな表情で私を抱きしめてくれた。

「エヴァちゃんは怖くない．．

エヴァちゃんは化物なんかじゃないよ．．

そんな事言っちゃいけないよ．．っ」

「でもっ．．でも私は人の生き血を吸う生き物だし．．  
何より私は人を殺したのだぞ．．！」

そうだ．．．私は人を殺したのだ。  
吸血鬼になってから数百人．．いや、もっと殺したかもしれん。  
全ては賞金稼ぎの連中だったが、少なくとも私をこの呪われた存在  
にした奴は憎しみを以って殺した。

「私は．．私の手は血で染まりきっている．．．  
そんな私でも、お前は怖くないのか？恐ろしくないのか？」

「——エヴァちゃんはエヴァちゃんだよ」

それを聞いても雪は私を離さない。  
寧ろ抱きしめる力を強くする。

「．．．ほら聞こえる？  
私の心臓、トクントクンっていつている．．．  
エヴァちゃんは感じる？私の心臓の音．．．」

『．．．．トクン．．．トクン．．．トクン．．．トクン．．．』

感じる．．．

確かに雪の心臓の鼓動を感じる。

決して大きい鼓動ではない。だが私の体の芯まで響きわたる。

「ああ、感じるぞ．．．

私の胸から、雪の小さい鼓動が．．．」

「うん．．．私も感じるよ．．．

エヴァちゃんの心臓がトクントクンっていつているのを感じるよ．．

とても小さくて．．とても温かい鼓動が．．．」

雪の鼓動を感じる度に私の中にあるナニかが音をたてて崩れ去る。  
まるで私を囲う檻の格子が一本一本砕けているみたいだ。

「私の右胸がエヴァちゃんの鼓動を．．エヴァちゃんの右胸が私の鼓動を感じている．．．

人間とか人間じゃないとか私には難しい事はよく分からないけど．．

．  
こうしてお互いに抱きあって．．胸の鼓動を感じて．．体温を感じれる．．．

それだけでいいんじゃないかな？

私の鼓動を感じているエヴァちゃんは化物なんかじゃないよ。

こんなにも優しく、こんなにも温かいエヴァちゃんが化物な訳ないじゃない。

私は

——私はエヴァちゃんを受け入れるよ」

「あ……………」

その言葉を聞いた瞬間、なにかが決壊した。

これが…これが私の捨てた…

そして私が願っていた人の温もり…

ようやく…ようやく私は誰かに受け入れられた…

人々から忌み嫌われた私を、雪は受け入れてくれた…

「本当に…私を受け入れてくれるのか？

嫌わないでくれるのか…？」

「うん、私はエヴァちゃんの全部を受け入れるよ。」

だから．．泣きたいときは泣いていいんだよ．．」

「うっ．．．うわあああああああん！！

辛かったっ．．寂しかった．．っ

そして怖かった．．っ

雪に拒絶されると思うと．．怖くて怖くて仕方なかった．．っ」

まるでダムが決壊したかのように私は泣きまくった。

今まで溜まってきた色々なものが私の目から流れてくる．．

「うん．．うん．．

私はエヴァちゃんを拒絶しないよ．．

ずっと．．エヴァちゃんのそばにいるよ．．」

雪も涙を流しながら私を一層強く抱きしめてくれた。

雪の一言一言が私の心に染み渡る．．

雪の体温が私の中にある氷塊を溶かしてくれる．．

「ぐすっ．．．なあ雪．．人ってこんなにも温かいのだな．．」

「うん、そうだよ．．

人はとっても温かいんだよ．．」

それから暫らくの間、私が泣き止んでも雪は私を抱きしめてくれた。

この温もり．．例え何者であろうと、壊すのなら私が悉く粉碎してみせよう．．．

汚れを知らぬ純白の雪は私の手のひらで静かに守ろう．．．  
私は静かに、そして秘かに雪を守る決意を固めた。

~~~~~その頃~~~~~

「マスターと雪さんが抱きあっている．．

なんと素晴らしい光景でしょう．．

でも少し羨ましいです．．．

あ、録画録画．．」

「やはり雪お嬢様は素晴らしいお方で御座います。
なんと微笑ましい光景なのでしょう．．」

雪とエヴァが抱きあっている姿を録画しているロボットメイドと、
微笑ましい視線を送る悪魔執事が居たとか居ないとか．．

エヴァちゃんはエヴァちゃんだよ！（後書き）

皆さんに質問なんです、一応マラクスは一ヶ月経つと帰ります。そこで皆さんにマラクスをこのまま帰すか、留まるかアンケートをお願いします。

その結果次第ではストーリーに少し変化があります。

1、帰る

百合成分が濃厚になります。

百合の園が咲き誇ります。

でもメインはやっぱりエヴァンジェリン

2、留まる

百合にプラスして雪がノーマルな恋愛をします。

でも相手はマラクスではありません。

ノーマルな恋愛が成就するのかしないのか・・・

それは作者にもわかりません。

受け付け期間は10月イッパイまでです。

意見がなければ作者が勝手に決めます。

それで皆さんドシドシと、ドバツとお願いします。

待つてまゝす（＾Ｏ＾）ノ

誤字修正しました。

あとアンケートに関してですが補足です。

1番のすぐ帰る、ではマラクスが永遠に出てこないと思われる方がいらっしやると思いますが、

1番の、マラクスは帰ったとしても、永遠に出てこない訳ではあり

ません。

学園祭とか、その他諸々のオリジナルイベントでちよくちよく出てきます。

ただ、1と2の違いはマラクスが原作キャラとあまり関わらないくらいでしょうか．．．

2の場合はマラクスも原作キャラと色々と関わりを持ちます。ただ、恋愛はしませんけどね。

マラクスの扱いの違いはそんな所です。

それともう一つ。

1番と2番では百合百合するキャラ数が若干変化します。

2番の方はノーマルな恋愛が入るので、必然的に1番より百合百合する人数が1〜2人くらい減ります。

説名下手ですみません．．．

登校地獄ですか？解呪できますよ？（前書き）

な．．．長かった．．．．．

今まで書いてきた中で一番長かった．．．

それではどうぞ．．．。（がく

登校地獄ですか？解呪できますよ？

エヴァ side

「ん~~~~にゅ．．．．むにゃむにゃ．．．」

「ん．．．またか．．．．．」

雪がこの家に来てから馴染みの感触に私は目を覚ました。

雪がこの家に暮らす事が決まってから、雪と私は一緒にベッドで寝ている。

それからというのも、よく雪は私を抱きしめるような形で眠る。

最初の頃は恥ずかしさで顔を真っ赤にしていたが、一週間経った今ではあまり気にしなくなった。

もはやこれが朝の日課とかしている。

慣れとはおそろしいものだな．．．

と言っても、やはり少し恥ずかしいがな．．．

「さてと．．．もう少しだけ、この感触を味わうか．．．」

だが、私はこの感触が好きだ。

雪の肌の感触．．．雪の体温．．．

その全てが私は大好きだ。とても心が安らぐ。

私がもう無理だと思って捨てた温もりだ。

「んふふ．．．やはり雪は温かいな．．．．．」

私は雪の胸に顔をうずめて雪を感じる。
嬉しさで思わず顔が綻んでしまう。

ああ．．これが幸せというものなのだな．．．

「ん．．．．．んにゅ？．．あ、おはようエヴァちゃん．．．」

しばらくそうしていると雪が目を覚ました。

起きたばかりで、しょぼしょぼさせた目をこする姿はとても愛らしい小動物のようだ。

と言うか．．仔犬の耳と尻尾が見えるぞ．．．

「ああ．．おはよう。雪」

「ん~~~~．．．」

その犬耳と尻尾に抗う事ができず、私は雪の頭をなでなでする。

雪はとても嬉しそうにして満開の笑顔を咲かせた。

おお．．尻尾がパタパタと動いている．．．

気持ちいいのだな．．よしよし、もつとなでなでしてやろう．．．

「——雪お嬢様、エヴァンジェリン様。」

お楽しみのところ申し訳御座いませんが、起床の時間で御座います」

む、マラクスが来てしまったか．．．

この幸せの一時が終わってしまうのは実に残念だが仕方ないな．．
私は名残惜しさを我慢して雪の頭から手を離し、ベッドから降りる。

くっ．．雪の温かい感触が手に残っている．．．

「マラクス、お前はいつも時間ピッタリに動くのだな．．
少しは好い加減になってもいいんじゃないのか？」

私は幸せの一時を止めたマラクスに少しイヤミを込める。

だって仕方なからう．．雪のあの気持ち良さそうな表情．．見てる
こっちも心地よい。

あと5分．．あと5分は雪の頭をなでなでしたい．．っ！

「エヴァちゃん、そんなこと言っちゃダメだよ。
マラクスさんはしっかりお仕事してるんだから」

そんな事を言っていると雪に怒られてしまった。
だが全くと言っていいほど迫力がない。

寧ろとても可愛らしい．．．

「むう．．だ、だがな．．」

「ほらほら、早く下におりよ？」

「ご飯が冷めちゃうよ？」

「ま、待つてくれ雪。１人で歩けるから手を引つ張るな」

私が答えるよりも早く、雪は私の手を引つ張って階段を下りる。
全く雪はバタバタと慌ただしい．．

だが、悪くないな．．ああ．．本当に悪くない．．
これが“日常”というやつなのだろう．．

「——よし、今日も幸せの“日常”を始めよう．．」

私の呟きは誰に聞こえることなく朝日の光にとけて消えた。
さてさて．．今日の朝ごはんは何だろうな？

雪 side

「くんくん．．あ、この匂いは．．」

一階に下りた途端に懐かしい匂いを感じとった。

私はこの匂いを知っている．．

外国の食材には決していない独特な香り．．

私がまだちゃんとしたご飯を食べられた時に何度も味わったお馴染

みの料理・・・
それは・・・・・・・・

「——お味噌汁!!」

そう。日本の食卓に絶対に存在する日本料理・・・外国ではミソスー
プと呼ばれているお味噌汁。
それと白くてホカホカのお米とこんがり焼上げた鮭が並んでいた。

「わあ!今日のご飯は和食なんだ!」

懐かしい料理を見て思わず私は喜びで飛び跳ねた。
だって本当に懐かしいんだもん!
前の人生ではちゃんとしたご飯を食べたのは十数回くらいしかなかったし、エヴァちゃんの家は今まで洋食だけだったし、本当に懐かしい!

「・・・ふむ、和食をお出しすれば雪お嬢様が喜ぶと茶々丸様が仰っていましたか・・・
どうやらその通りみたいですわね。
流石で御座います、茶々丸様」

「やっぱりこれもマラクスさんが作ってくれたの?」

「いえ、残念ながら私は和食の知識は殆どありませんので．．
今回は茶々丸様が全てお作りになりました」

「本当！？茶々丸さん！？」

「は、はい。ここ最近は洋食しか作っていなかったので、和食を作れば雪さんが喜んでくれると思って．．．」

「うん！本当に嬉しい！

ありがとうございます！」

私は茶々丸さんの手を握りながら喜んだ。

うん？茶々丸さんの顔が真っ赤になっているけどどうしたんだろ？

「あ、ありがとう．．．ごきます．．．（なでなで

「えへへへへ」

茶々丸さんは少し戸惑いながらも私の頭を撫でてくれた。

ん．．．気持ちいよ．．．．．」

「——雪お嬢様。料理が並べ終わりました。

ささ、どうぞイスにお座りください」

「あ、はい」

「あ．．．．．」

マラクスさんに呼ばれて私はイスに座る。

茶々丸さんは寂しそうな声を出していた．．．

うん．．．なんか悪いことしちゃったかな．．．

．．．．．そうだ！

「．．．またあとでなでしてね」

「~~~~~つつ!？」

私は茶々丸さんの近くに帰って、茶々丸さんの手を私の頭の上に置いて、にぱあっと微笑む。

さっきよりも顔を真っ赤にしているけど茶々丸さんどうかしたのかな？

「は、はい．．．．．わかり．．．ました．．．あとでまた．．．」

「うん♪またあとで♪」

なんで顔を赤くしているのか分からないけど大丈夫そうだね。

私はイスに座りなおして数年ぶりに箸を握った。

うん、この箸を握る感じもとても懐かしいなあ．．．

「エヴァちゃん、茶々丸さん。2人とも早く早く」

私はまだ座っていない2人を手招きする。

お米・・味噌汁に焼き魚・・数年ぶりの和食・・楽しみだなあ・・

茶々丸side

「・・・・・」

私は先ほど雪さんの頭を撫でた手を見つめた。

雪さんが喜んでくれると思って和食を作ってみたなら、案の定雪さんはとても喜んでくれて私に笑顔を向けてくれました。

あの笑顔が世に言う“満開の笑顔が咲いた”というのでしょうか。

その笑顔をみたら何故か私の手は雪さんの頭を撫でてしまいました。最初は失礼な事をしてしまったと焦りましたが、雪さんは嫌な顔一つせず、寧ろ幸せそうな表情をしてくれた。

しばらくそうして雪さん頭を撫でていたらマラクスさんに呼ばれて雪さんは私の手から離れてしまいました。

その瞬間私の胸から変なノイズが発生して、私は私でもよく分からない気持ちに声を出してしまった。

私には感情と呼べるものは無い筈なのですが、あの時の気持ちは“寂しい”という感情なのでしょうか？私にはよく分かりません・・・

その声を聞いた雪さんはトテトテと可愛い音をたてて私の目の

前まで戻ってきて私の手を握って自分の頭に置いて――

『．．．またあとでなでなでしてね♪』

と、言って微笑んでくれました。

ああ．．．なんと可愛らしいのでしょうか．．．

さつきから私の胸にある駆動モーターが熱くなっています。この温度の上昇はなんでしょうか？どこか不具合があるかもしれません。あとで葉加瀬さんにメンテナンスをお願いしなければ．．．

そのあと雪さんはまたトテトテと可愛らしい音をたててイスに戻りました。

．．．．．あれ？

私の映像視野にある筈のないものが．．．．．

「あの．．．マスター．．．．」

「ん？なんだ？」

「バグでしょうか．．．雪さんから仔犬の耳と尻尾が生えているように見えるのですが．．．」

そう。さつきから雪さんの頭とお尻から仔犬の耳と尻尾が生えているのです。

しかもピコピコと可愛らしく動いています。

ロボットの私が幻覚を見るなんて．．

どうやら総メンテナンスが必要みたいです。

「いや、バグなんかじゃあないさ。

そうかそうか．．お前にも見えるようになったか．．」

「“も”という事は．．もしかしてマスターも．．」

「ああ、見えているぞ。雪と初めて会った日からな。

どうだ？．．パタパタと忙^{せわ}しく動いて．．とても可愛いだろう
？」

そう言っているとマスターは温かい．．それでいて、どこか誇らしげな表情で微笑む。

確かにパタパタと尻尾を振っている姿はとても可愛らしいです。
これに異を唱える人はこの世に存在しないでしょう。

「はい。マスターの言うとおりとても可愛いです。」

「ふふ、そうだろうそうだろう。とても可愛いだろう。」

おそらくあの耳と尻尾は雪に一定以上の感情を抱くと見えるようになるのだろうな。

雪に対する想いの一種のバロメーターと言ったところか」

「もつとも、その感情がなんの感情か分からんがな」と、付け加えてマスターは雪さんに視線を向ける。

マスターの言う一定以上の感情とは一体なんなのでしょう？

友情？いや、友情を悪く言つつもりはありませんが、そんな軽い感情ではありません。

ならば信頼？違う。さっきの友情より遠ざかってしまいました。

私のデータベースにある言葉で最も近い言葉は“親愛”という言葉でしょうか。

何れにしても“感情”がインプットされていない私ではその答えは分からないでしょう。

「——エヴァちゃん、茶々丸さん。2人とも早く早く」

そんな事を考えていると、まだイスに座っていない私とマスターを雪さんが手招きして呼んできました。雪さんをお待たせしてはいけません。

「マスター、早くいきましよう」

「ああ、そうだな」

私とマスターはすぐにイスに座る。

今までは食卓に着くことなど無く最初は戸惑っていましたが、今ではすっかり慣れ、逆にこうしていないと落ち着きません。

雪さんがこの家に来てから何もかもがガラリと変わりました。もちろん良い意味で。

マスターは本当に幸せそうな表情をして、私もこの何でもない日常がとても充実しています。おそらくこれが“幸せ”というもののなの

でしょう。

そのあとは皆んなで美味しくご飯を食べました。

マスターが「魚の骨が喉に．っ！」と、言つて慌てたり、

マラクスさんは「箸とは．どのように持つのですか？」と、【博識伯】とは思えないような事を言ったり、

雪さんは「ほかほかのお米．」と、見てるこっちも嬉しくなりそうな表情でご飯を食べて．．．

騒がしくも楽しい朝ごはんはこうして幕を閉じました。

エヴァ side

「あゝゝゝゝ．．暇だあゝゝゝゝ．．．．．」

朝ごはんが終わった後、私は何も置いていないテーブルに突っ伏した。

この時間帯はいつも暇だ。

茶々丸は食器など、後片付けをしているから今はこの場にいない。

雪とマラクスは中学の勉強に着いていけるように勉強の真っ最中だ。私は家事など真っ平御免だし、雪の勉強に混ざりたくもない。

15年間もこの学園に縛り付けられているのだ。今さら勉強しても同じ内容を聞くだけで苦痛にしかない。

かと言って他にやることもない。暇だあゝゝゝゝゝ．．．

「．．．．．」

私は仕方なしに雪たちの勉強風景を見てみる。

まあ、何もしないでテーブルに突っ伏すよりはマシだろう・・・

「——公倍数とは2つ以上の整数の共通する倍数の事を言います。例えば、2と3の場合は6、12、18・・・続きます。

それを踏まえて最小公倍数というのは公倍数の最小の事を指し——

」

「……………（かきかき）」

雪たちを見てみると、マラクスの授業を雪は真剣に受けて、一言も発せずノートに黙々と書いていく。

今は小学5年生程度の授業が・・・

うむ、真面目なのは良いことだ。頑張れ頑張れ。だが私は暇だ・・・

「——マスター、如何なさいましたか？」

すると、後片付けが終わったのか茶々丸が戻ってきた。

よし、これで少しは退屈が紛れる。

「茶々丸か・・・なに、やる事もなくて暇してるんだ・・・」

「暇・・・ですか・・・それならば読書などはいかがですか？
たしか、マスターが読んでない本も沢山あった筈です」

「んゝゝゝだ。が本は別荘に全部保管したしメンドくさ——まで、その手があつたか!!」

別荘と聞いた瞬間、とてもいい事を思いついた。そうだ、私には別荘があつたではないか! すっかり失念していた!!

「——さてと、ひとまずここで中断して一旦休憩をいれましょう」

「はい。んゝゝゝゝゝ!!」

どうやら雪たちも休憩に入つたみたいだな。丁度いいタイミングだ!

「雪! マラクス! 今から別荘にいくぞ!!」

私は2人の目の前に立ち、堂々と宣言した。

「べゝゝゝ別荘ゝゝゝ?」

「そうだ! いま私はとても暇だ! よって今から私たちは別荘に向かう! 雪もマラクスも一緒に来い!!」

「ゝゝゝここまで堂々と言われると逆に清々しく感じますねゝゝゝ」

マラクスがなんか言っているが関係ない！

私は暇で暇で死にそうなのだ！まあ不老不死だから本当に死にはせんがな．．．

「細かい事は後だ！とにかく別荘にいくぞ！！」

そして私は皆を引き連れて地下へと下りて行った。

ふふふ．．．別荘を見たらきつと雪は驚くだろうな．．．
とても楽しみだ．．．

雪side out

エヴァちゃんがいきなり「別荘にいくぞ！！」て言ったから地下に下りてみたけど、地下はお人形の山とよく分らない 謎のビンが転がってとても散らかっていた。

エヴァちゃん．．．ちょっとだらしないよ．．．

「さてと．．．久しぶりに別荘を使うな．．．
どこにしまったかな．．．」

——ポイ。ポイ。ポイ。．．．

そんな散らかり具合の状態でも気にせず、エヴァちゃんはお人形の山に手を伸ばして次々とお人形が宙に舞う。

．．．あんな無造作に扱っていたら、いつかお人形たちに呪われそう．．．．．

南無南無．．．．．

「——ヨオ、御主人。ズイブントクシブリジャーネーカ」

心の中で合掌していると、聞き慣れない声が聞こえた。

どうやらエヴァちゃんが手に持っているお人形が声の正体みたい。

「む？チャチャゼロか？

どうしてこんな所にいるのだ？」

「オイオイ．．御主人ガコノ地下二置イティツタンジャーネーカ。ズイブント長クホツタラカシニシヤガツテ。

ミロヨ、コンナニ埃ガツイチマツタジャーネーカ」

「そうかそうか、それは悪い事をしたな。それよりも今は別荘だ。いたい何所にしまったのだ？全然見つからんぞ．．．」

——ポイ．．．．．

「アーレ——．．．」

茶々丸さん似のお人形、チャチャゼロちゃんが文句を言うけど、エ

ヴァちゃんは言葉だけの謝罪を言って別荘探しに戻っちゃった。
そうになると必然的に他のお人形たちのように、チャチャゼロちゃん
もエヴァちゃんに投げ飛ばされて宙に舞う。

「・・・・・・・・・・（ぼす）」

チャチャゼロちゃんの軌道はまるで狙いすましたかのように私に向
かって飛んできて、私の胸にすっぽりと収まっちゃった。

「・・・・大丈夫？」

「オウ。ツタク御主人ノヤロー・・ッテ誰ダオメエハ・・・・？」

「私？私は柏木 雪。エヴァちゃんの家に住んでるの。よろしくね」

「フーン、ソウカ・・オメエガ馬鹿ゲタ魔力ノ持ち主力・・スゲ
エ魔力量ダナ・・・・
オレハ、チャチャゼロッテイウダ。ヨロシク頼ムゼ。
デ、モウ1人ノ奴ハ誰ダ？」

「わたくし私は雪お嬢様の家庭教師を務めさせていただいておりますマラク
スと申します。

以後、宜しくお願い致します。チャチャゼロ様」

私たちとチャチャゼロちゃんはお互いに自己紹介する。
うん。言葉は少し悪いけどチャチャゼロちゃんはとてもいい子だ。

「そつだ、埃ほろつてあげるね」

私はチャチャゼロちゃんに着いている埃をほろつ。

うわ．．．けっこうスゴイ量．．．

本当に長いあいだ放つたらかしにされてたんだ．．．

「はい。これでどう?。」

「オウ。結構キレイニナツタぜ。アリガトヨ」

「——— ついに見つけたぞ! 見る! これが私自慢の別荘だ!」

チャチャゼロちゃんの埃がはらい終わつたと同時にエヴァちゃんが別荘を見つけた。

だけど私の目の前に置いてあるのはガラスビンの中に塔がある、まるでボトルシップみたいな物。

うーん．．．どう見ても別荘には思えないな．．．

「ほお．．．ダイオラ魔法球ですか．．．

これは珍しいですね．．．」

「マラクスさん知ってるの?。」

「はい。内と外の時間が異なつて進むという、とても希少な魔法具

で御座います。

現存する数が大変少なく、またその殆んどが粗悪品か欠陥品。ここまで良質なダイオラマ魔法球は中々お目にかかれません」

「へえー・・・」

イマイチよく分からないけど、なんかスゴイ物だということは分かった。

「ほらほら、そんな所に突っ立っていないでこっちに來い。はやく別荘にいくぞ」

「あ、はい・・・」

エヴァちゃんに呼ばれてボトルシップの近くによる。

すると、私の足元が光ったと思ったら、私の視界はテレビのスイッチを切った画面みたいにプツンと途切れた。

side out

「・・・ん？ここは・・・」

突如発生した光に飲まれた雪はゆっくりと目を開けた。

雪は眼前に広がる光景に目を奪われた。

彼女の視界に映ったものは・・・

「わあ．．．すごい．．．．．」

周り全てを一望できる高い塔。

辺り一面に広がる綺麗な海。

暖かく心地よく吹きつける風。

雪は目の前に広がる圧巻の光景にただただ驚いていた。

「——どうだスゴイだろう？」

これが私自慢の別荘だ。少し物足りなさはあるがな．．」

その隣でエヴァは自信満々な表情をみせる。

どうやら雪が不満に思うなど考えていないのだろう。

まあ、雪のあの表情を見れば誰だってそう思うだろう。

「うん！とってもスゴイよ！！」

こんなにキレイな景色始めて見た！！」

案の定雪はエヴァの手を取ってとても喜んだ。

それを見たエヴァもとても嬉しそうな表情をしている。

「気に入ってもらえて何よりだ。

だがここに呼んだのは景色を見てもらう訳ではない。

ここに呼んだのは雪の魔法を見るためだ」

「私の．．．魔法．．．．？」

雪はエヴァの言った言葉に理解が追いつかず、頭に？を浮かべて首を傾げる。

「そうだ。雪はあの全能神のオーディーンと全ての悪魔達を統べるサタンから力を貰っているのだ。これは非常に興味深い。雪も気になるだろう？自分がどんな魔法を使えるのか」

「た、たしかに．．．」

雪はエヴァの補足を聞いてようやく意味が分かったのか、首をコクコクと揺らしながら頷く。

「そうと分かれば早速やるぞ。マラクス。お前も手伝ってくれ」

「かしこまりました」

雪の了承も聞いた事で、エヴァはやる気満々のオーラを出し、側にいたマラクスを呼ぶ。

「早速だがマラクス。お前は雪の使える魔法について何か知っているか？」

「全てではありませんが多少の事は存じております。なんでも雪お嬢様は攻撃魔法が一切使えないとの事」

「なに？攻撃魔法が一切使えないだと？」

エヴァはマラクスの言葉に眉をよせた。

それはそうだろう。攻撃魔法が得意でないのならまだ分かるが一切使えないなど聞いた事がない。

「はい。争いごとをお嫌う雪お嬢様の為に我が王とオーデイン様が攻撃魔法の才を一切上げず、何十年訓練しても魔法の射手すら使えないと。」

その代わり雪お嬢様の防御魔法と結界魔法の才はこの世界では最強。結界魔法に至っては我が王とオーデイン様の使う魔法が雪お嬢様にご伝授されております」

「結界．．ふふ、そうか、“防御魔法”ではなく“結界魔法”か．．

あの2人も存外にエグい事をするじゃないか」

エヴァはこの言葉遊びに気付いたのか、不敵な笑みを浮かべる。どうやら“防御”と“結界”の違いをエヴァは即座に見抜いたらしい。

さすが【闇の福音】の名は伊達じゃない。という事だろう。

「ですがこの事は雪お嬢様にはご内密に。
雪お嬢様には出来るだけ魔法の影の部分には触れさせたくないの
です」

「ああ、分かっているさ。私も悪戯に雪にそんな道を歩ませるつもりはない」

“魔法”とはただの“力”であり、そこに善悪の感情はない。
その事をよく知り、その道を歩いてきたエヴァだからこそ、雪には
その道を歩ませてくれない。

エヴァはマラクスの言葉に約束．．いや、誓いをたてた。

「感謝いたします。それではコレを．．
雪お嬢様の使う魔法媒体で御座います」

その言葉に安心して、マラクスはエヴァに2つの指輪を手渡す。
1つは上品でいて決して派手でもなく、質素でもない、内側に18
の文字を彫り込まれて金の指輪と、
もう1つは、燃えるような輝きを放ち、今も燃え盛っているような
深紅の紅玉と、その紅玉をあしらった、まるで吸い込まれそうな輝
きを放つ銀の指輪だった。

「っ!？．．マラクス．．この2つの指輪は．．」

エヴァはこの2つの指輪に内包されている力を感じ取り驚きの表情をみせる。

「はい。エヴァンジェリン様のお察しの通り。」

1つはオーディーン様の神宝【グングニル】と全く同じ材質から造られ、内側に18の原初のルーン文字を彫り込んだ指輪と、もう1つは魔界にて決して消える事のない地獄^{ゲヘナ}の業火によって打ち鍛えられた魔鉱石と、その地獄^{ゲヘナ}の業火を紅玉の形に押し込めた指輪で御座います」

「．．．こんなものが人間界の存在しているのか？」

これを他の奴等が見れば血で血を洗う惨劇が起きるぞ」

「仰る通りで．．．」

^{わたくし}私個人の見解では、この指輪1つで少なくとも国4つが転覆するかと．．．」

「．．．．．．．．．．．．．．．．」

エヴァはその余りにも規格外の至宝を見て、驚きを通り越してもはや呆れた表情しかできなかった。

「エヴァンジェリン様の懸念は分かりますが、この指輪にはとても強力な認識障害と隠蔽魔法が施されており、殆ど^{殆ど}の者はこの指輪をただの指輪か、少し上等な魔法媒体としか認識しません」

「そ、そうか．．．それなら安心だな」

「ね、2人ともなんの話してるの？」

2人がずっと話し込んでいるのに痺れを切らしたのか、雪がトテトテとエヴァ達の所に歩み寄る。

「雪．．。いや、なんでもない気にするな。

それよりもほら。魔法を使う為に必要な魔法媒体だ。大事にするんだぞ」

「わあ．．．すごくキレイ．．．。大事にするね」

エヴァは2つの指輪を雪の中指にはめると、雪は指輪を光に当ててそのキレイさに声を漏らした。

「よし、準備が出来た所で早速やってみるぞ。

つとその前に、雪。魔法の使い方は分かるか？」

「うん、使い方は頭の中に入ってるっておじいちゃんが言っていたから多分．．．」

「よし、それならまずはやってみるか。

頭の中で思い浮かんだのを適当に使ってみるんだ」

「はい」

雪は一度目を閉じて、エヴァに言われた通り頭の中で魔法を思い浮かべる。

「むむむ．．．．．【聖結界・城】．．．」

可愛らしい声で唸っていた雪だったが、しばらくしてると白い光がエヴァ達の周りを覆った。

その光は何人たりとも決して穢す事なく、また、侵す事の出来ない絶対不可侵の聖なる光だった。

「なんという結界だ．．．。全盛期の私の力を以ってしても傷付けられるか分かん．．．。」

これがあの全能神、オーディーンの魔法か．．．。
しかもそれ程の結界をなんの詠唱もなく展開するとは．．．。」

エヴァは雪の展開した結界を見てただただ啞然としていた。

ちなみにエヴァはまだ知らないが、この【聖結界・城】はこの世界の魔法でいう魔法サギタ・マギカの射手と同程度の初歩魔法であり、これより上位の結界魔法はまだまだある。

「えと．．．成功で．．．いいのかな？」

「はい。見事成功で御座います。雪お嬢様」

「ケケ。スゲージャネーカ。ココマデスゲー結界魔法は初メテ見タ
ぜ」

「この結界を破壊するために必要な火力兵器を検索．．．．．
ヒット。ドイツ陸軍採用。クルップ社製の80cm列車砲搭載の7
1 t 臼砲による26発一点同時発射で破壊可能」

他のメンバーも思い思いの言葉で雪に賞賛のを送る。

だが茶々丸の言葉だけは諸手を挙げて喜ぶ事が出来ないのは私だけ
じゃないと思う．．．

「——だが、これでは私の呪いを解く事は出来ないな．．．
まあマラクスの説明を聞いた時から薄々と分かつてはいたがな．．．

」

雪の結界魔法の衝撃から立ち直ったエヴァは自分にかけられた呪い
が解けないことを知ると、落胆の表情をみせた。

「呪い．．．ああ、登校地獄ですか？
その程度の呪いすぐに解呪できますよ？」

だがそれを聞いたマクスからは衝撃の言葉がまるで日常会話のよ
うにさらっと出てきた。

「なに！？それは本当か！？」

この忌々しい呪いが本当に解けるのか！？」

「はい。我が王の使う結界魔法の中に“精霊を喰らう”という結界魔法が御座います。

登校地獄の他にエヴァンジェリン様の力を封じている術式がありますが、呪いが精霊によって効力が発揮しているのなら、その結界を使えばすぐに呪いは解呪されます」

エヴァはマラクスに怒濤の勢いで詰め寄るが、マラクスは全く動じずに解呪の概要を伝える。

「そうと分かればすぐにやるぞ！

雪！頭の中に“精霊を喰らう”結界をイメージして結界魔法を使ってくれ！」

「う、うん、分かった。

うぬぬぬ……【魔結界・霊喰】」

エヴァに言われたまま、雪は頭の中でイメージを起こして結界魔法を展開した。

展開した結界魔法はさつき展開した聖結界とは違い黒い光が辺りを覆い、エヴァの体から鎖を巻きつけた2つの塊が飛び出し、声も発せず黒い光に飲まれて消えた。

その瞬間エヴァから「ガチャッ」と、なにかが開錠された音が響い

た。

「フフフ．．フハハハハハハハハッ！！

アッハッハッハハハハハハハハハハハハハッ！！！！

これだ！これだ！！この体から止めどなく力が溢れる感覚だ！！

随分と久し振りの感覚だ！！これがエヴァンジェリン・A・K・マ
クダウエルだ！！！！」

呪いが解けたエヴァは湯水のように溢れる力に歓喜して盛大に高笑
いをする。

その姿はとても無邪気で、まるで誕生日を迎えた子供のようにはし
やぎ回る。

「雪！感謝するぞ！

お前のお陰でこの忌々しい呪いが解けた！

ありがとう雪！」

「うん、どういたしまして♪」

そしてエヴァは屈託のない笑顔で雪の胸に飛び込み、雪もエヴァを
抱きしめながらクルクルと回った。

「ケケケ。 “アリガトウ” ダッテヨ。 アンナ素直ナ御主人ハ始めテ
見タゼ。

ソレニ、イツモアッタ刺々シサガナクナッテイヤガル。

アレジャ年相応ノ子供ト変ワラネーゼ。
妹ヨ。御主人二ナニガアツタンダ？」

「そうですね．．、雪さんがとても素晴らしいお人、としか言いようがありません」

「ナルホド、マアソウドロウナ。

アイツハ今マデ見テキタナカデ初メテノタイプダナ。
アソコマデ邪気ガナイ真ツサラナ人間ハ初メテダゼ」

その2人の姿を見て茶々丸とチャチャゼロは思い思いの言葉を言う。
そのあとは別荘の中を散策したり、チャチャゼロがマラクスに殺し合いを持ちかけたりと、慌ただしくも楽しい時間が過ぎた。

~~~~~一方その頃~~~~~

「学園長！闇の福音の呪いが解けたというのは本当なんですか！？」

学園長室では数十名の教員と生徒が集まっており、その中で黒人教諭が学園長に詰め寄っていた。

「まあまあ落ち着くのじゃガンドルフィーニ君。確かにエヴァにか  
けられていた登校地獄と学園結界は完全に解かれておる。

ふおっふおっふお。まさかとは思っておったが本当に解くとはの．．

」

「呑気に笑っている場合ですか!？」

これは麻帆良学園の重大な危機ですよ!？」

それにこの前感じた魔力の持ち主にはなんの処分を下さず、闇の福音の家に住まわせているそうじゃないですか!？」

闇の福音の呪いを解いたのもその侵入者ではないのですか!？」

黒人教諭・ Gandolf フィーニは学園長の呑気な態度により一層怒りを露わにして怒声を飛ばす。

「じゃが侵入者の方は儂とタカミチ君が直に会って話しをして悪い者ではないと判断したし、エヴァの呪いも3年経ったらサンザンドマスターが解くと言っておったから今更解呪しても問題ないじゃろう」

「危険です! 解呪を約束した年数なんて関係ありません!!」

解呪された闇の福音が野放しにされているのが問題なのです!!

生徒達に危険が及んだらどうするのですか!？」

それに、「悪い者ではない」と言っても闇の福音の家に住んでいる以上信用できません!

即刻部隊を編成させて討伐を――」

「Gandolf フィーニ君。それ以上言うとうとうなっても知らんぞ?」

Gandolf フィーニが侵入者の・雪の討伐を口走った瞬間、近右衛門から膨大な魔力が放出され、Gandolf フィーニに叩きつけられた。

「あの子は全ての不幸を背負わせて壮絶な人生を歩んできたのじゃ。

そしてようやくその呪われた人生から開放されて人並みの幸せを享受しようとしているのじゃ。

それを阻害する事は断じて許さん」

「――っ」

ガンドルフィーニもその気迫に押されて何もいう事ができず口を閉じる。

だがその目はまだ納得していなかった。

「・・・分かりました」

ガンドルフィーニはこれ以上の論議は無意味と悟ると、それだけ言っ  
て学園長室から出て行った。

それに続いて他の教員と生徒達も学園長室から退室した。

「ふう・・・全く頭の硬い・・・」

少しは物事を柔らかく捉える事は出来んのかの？」

1人となった学園室で近右衛門は1人愚痴を言う。

麻帆良学園にて不穏な空気が漂い、争いの火種が少し、また少しと芽吹きつつあった。

登校地獄ですか？解説できますよ？（後書き）

チャチャゼロのセリフが書きづらくて書きづらくて・・・

そうだ。マラク스가帰るか帰らないについてのアンケートはまだまだ応募しております。

詳しくは「エヴァちゃんはエヴァちゃんだよ！」の後書きを参照してください。

いまのところ1番の“帰る”が優勢です。

他の皆さんもドバツと応募してください。

もちろん普通の感想も大歓迎です。

それでは（＾ー＾）／

## マラクスの日（前書き）

さてと、今回はマラクスが主な話しです。

これでアンケートの方も多少動きがあるんじゃないでしょうか？

10月中に投稿できて安心しました。

## マラクスの日

マラクス side

どうも皆様。段々と肌寒くなっていく季節、いかがお過ごしでしょうか？

今回は僭越ながら、この私<sup>わたくし</sup>マラクスがお話しを務めさせて頂きます。不肖の身では御座いますが、何卒宜しくお願い致します。おっと、長話が過ぎましたね。

それでは早速いきましよう。御覧あれ。

7:00

「——ふむ．．これで完成です」

気持ちの良い朝日が差し込む時間。  
<sup>わたくし</sup>私は朝食の準備を終わらせた。

今回作った料理は味噌汁とほうれん草のおひたしで御座います。

以前に茶々丸様の和食を見て雪お嬢様が大変お喜びになりましたので是非、私も作<sup>わたくし</sup>って雪お嬢様に喜んでもらおうと思ったのです。

そして茶々丸様に師事し、今ではそこそこの和食なら作る事が出来ます。

ですが、これではまだ程遠い．．．  
精進あるのみです。

「もうこんな時間ですか．．  
お二人を起こしに——いや、あと5分は待ちましよう」

私はお二人を起こそうとしてうとして止めた。<sup>わたくし</sup>

最初はお二人が起床してすぐに向かったのですが、エヴァンジェリン様は寝起きの雪お嬢様を愛でるのがお好きらしく、色々といやみを言われてしまいました。

ですから約5分はエヴァンジェリン様に至福のお時間をご提供しなければ……

「つと……そう考えてる内に5分経ちましたね。  
起こしに参りましょう」

私は階段を上がり、お二人の部屋に向かったのですが……<sup>わたくし</sup>

「——ああ……何という光景でしょう……  
あの2人の姿を毎日見れる私は幸せ者です……」

二階に上がれば茶々丸様がお二人の姿を見てトリップしておりました……

……この時の茶々丸様はあまりお近づきになりたくないですね……

「ケケ、妹ヨ。立派二変態ヤツテルジャーネーカ」

チャチャゼ口様……変態に立派とは如何なものでしょうか……

茶々丸様は何時の間にか鼻血を流しておりますし．．．  
．．．ロボットなのに鼻血を流すとはこれ如何に．．．

「茶々丸様．．鼻血が出ております．．．」

「あ、マラクスさん。おふあよおはあやごますふございまふ。  
それと、ありがとうございます．．．（ふきふき）」

茶々丸様は挨拶もそこそこにお二人の方に視線を移す。  
わたくし私も茶々丸様の視線を辿ると．．．

「おお．．雪は本当に甘えん坊だな．．．  
ここか？ここが気持ちいいのか？」

「ああ、そこお．．気持ちいいよお．．．」

これはまた何と言うべきか．．文字だけ見ると少し危ないですね．．  
．．  
ですが、決してお二人は行為に及んでいる訳ではありませんよ。  
ただエヴァンジェリン様が雪お嬢様の頭や喉を撫でているだけです。

「あ．．ああ．．も、もう限界です！（プハッ）」

これはこれは．．．

茶々丸様が鼻血を噴いて倒れました．．．  
ここに放置しておくのはいけませんね．．  
すぐに一階に運びましょう。

「コン中デ一番ノ良識人ハテメーダナ。マ、頑張レヤ」

「．．ありがとうございます」

チャチャゼロ様の言葉に少し悲しくなりましたが、私は茶々丸様を  
一階に運び、再び二階に上がってお二人を呼びにいきました。

エヴァンジェリン様．．無言で睨むのはおやめ下さいませ．．．  
15分も私は待ったのですよ．．．

そして雪お嬢様、相変わらずの素晴らしい笑顔でございます。  
その笑顔だけで、このマラクスは今日も一日頑張ってゆけます。

11:00

今日も楽しい朝食の時間は終わりました。

雪お嬢様はほうれん草のおひたしを食べて美味しいと喜んでおられました  
が、エヴァンジェリン様には味噌汁の味が少し薄いとご指摘  
を受けてしまいました．．．

やはり和食は難しいですね．．それに奥が深い．．．  
これはまだまだ学ばなければいけない事が沢山ございますね．．．

さて、反省会はこちらまでにしておいて、いつもでしたらこの時間は  
雪お嬢様のお勉強の時間なのですが、今日は日曜日。

11時から精肉店のタイムセールが始まります。

今日の目玉商品は「国内産 鳥の胸肉100g 27円」です。

これはまた・破格のお値段でございます。

何より安心の国内産。これは是非とも購入せねば！

「それでは雪お嬢様。<sup>わたくし</sup>私は買い物に行つてまいります」

「いつてらっしゃい」

雪お嬢様はエヴァンジェリン様とゲームをしているらしく、手をヒラヒラさせて私<sup>わたくし</sup>を送り出す。

ちなみに茶々丸様は家のお掃除を、チャチャゼロ様は朝からお酒を飲んでいらつしゃいます。

朝からお酒とは、あまり感心できませんね・

「——くそ！何故だ！？何故私の攻撃が当たらない！？」

「当たらなければどうという事はないんだよエヴァちゃん。  
あ、これで終わりだね」

「ぬが〜！！また負けたあ〜〜！！」

どうやら雪お嬢様が勝利したみたいです。

流石でございます雪お嬢様。<sup>わたくし</sup>

私<sup>わたくし</sup>マラクスは感動しております・・・

「よし．．対戦ゲームはやめにしよう．．．  
次は協力プレイのゲームだ!!」

「怪物狩猟3rd?面白そうだね!」

お二人は別のゲームでまた楽しく遊んでおりました。  
仲が良いのは真に良い事でございます。  
わたくし  
私はお二人の楽しい声を背にして商店街へと向かいました。

~~~~~

「よし、無事にセール品を獲得しました」

やはりお買い物物は戦場ですね．．
ですが、雪お嬢様にお仕える身で敗北は許されません。
既にお客さんが沢山並んでいましたが何とかセール品を買う事はできました。

「昨日の八百屋のタイムセールで人参とジャガイモを買ったので．．
カレーでも作りますか．．．」

今晚の献立は決まっていますので明日ですね。
洋食は私の専門分野ですから腕が鳴ります。

「——やあ、マラクス君。
こんな所で会うなんて奇遇だね」

そんな事を考えていると、雪お嬢様の担任になる高畑様にお会いしました。

「これはこれは高畑様。お久しぶりで御座います。
高畑様もお買い物の途中でしたか？」

「いや、僕は学園の見回りさ。
一応、広域指導員としての仕事もあるからね」

広域指導員・確か学園の揉め事を鎮めるお仕事。
休日返上で働くとは高畑様は随分と仕事熱心な方で御座います。

「そうでしたか、高畑様も大変ですね」

「なに、それほど苦でもないよ。
それよりも雪君はどうだい？
上手くやっているかな？」

「はい。雪お嬢様はエヴァンジェリン様と毎日楽しく過ごされておりますし、お勉強の方も滞りなく。

この前に中学１年生の内容を終えたので、あと二週間もあれば御学友の方たちに追いつけます」

「それは凄いね。さすが博識伯と言ったところかな？」

「ご冗談を．．雪お嬢様の気持ちがあつての事でございます。
わたくし私はほんの少しだけお手伝いをしているだけです。」

本当に雪お嬢様の「学ぼう」という意思是素晴らしいものです。まるで水を吸い込むスポンジのようにどんどん覚えていきます。

「それは謙遜が過ぎるつてもものだよ。
ところで、話しが変わるんだけど．．。」

瞬間、高畑様の目が鋭く変わりました。
雪お嬢様達に關係ある事なのでしょうか。

「一週間ほど前にエヴァの封印を解いたのは本当なのかい？」

「登校地獄とその他ですか？」

はい、エヴァンジェリン様に掛けられてた呪いは解呪しました」

「やっぱりか．．。」

雪君がこの学園に侵入した件もある。

その事で他の魔法先生や魔法生徒が不信感を募らせているんだ。学園長が抑えてはいるけど、それを振り切る人たちが出てくるかもしれない。

くれぐれも注意しておいてほしい」

成る程．．悪の魔法使いと世間で言われているエヴァンジェリン様の封印が解けるのは面白くない、と言った訳ですか．．．

古今東西、度を越した価値観は一つの例外もなく害になります。

どうやら学園の魔法使い達は些か正義感が強すぎるみたいですね。

「雪君は素直で優しくとてもいい子だし、エヴァも根はとても優しい。

それを曇った正義の眼鏡をかけている人達が“悪”と決めつけるのが僕は我慢ならない．．．っ」

高畑様は心底悔しそうな表情をし、拳を強く握り締める。

そうですね．．わたくし私も雪お嬢様やエヴァンジェリン様が悪く思われるのは極めて遺憾です。

あの二人が“悪”だとしたら、この世に善人など存在しません。

「高畑様がそのように思ってくださいるとは．．
その優しさに感謝いたします」

「違うよ。僕はそんな出来た人間じゃない。

皆んなは僕を英雄って褒め称えるけど、マラクス君は英雄はどうや

って英雄になるのか知ってるかい？」

「．．これはまた随分と重い質問を．．．
善も悪も両方知らなければ答えられない問いですね。」

「．．大量殺戮を世界の過半数に認められれば。でしょうか．．」

「そう。沢山の人を殺し、それを認められれば人は英雄になれるんだよ。」

そして僕も沢山の人を殺した．．．
その中には雪君のような純粹無垢に笑う子供達も含まれている．．．
だから僕は．．もう二度とあんな事が起こらないように雪君を守りたい。

例えそれで僕が“悪”になろうともね」

これを他の魔法先生がきけば卒倒ものですね。
ですが高畑様は世の中の物事を偏る事なく非常によく捉えております。

このような方を“良識を持つ人”というのでしょうか。
この方が雪お嬢様の担任である事は真に喜ばしいばかりです。

「正義って．．難しいね．．．」

「そうですね．．博識伯の異名をとっているこの私ですら善と悪の明確な線引きは出来ません。
わたくし

何が善で、何が悪なのか、非常に難しい問いでございます」

「そうだね．．すごく難しい．．．
つと、随分と長く話し込んでしまったね。
後半は僕の愚痴になってしまっって申し訳ない」

「いえ、高畑様が素晴らしい方だと改めて認識しました。
貴方様を他において雪お嬢様の担任になる方はいません」

「はは、そうかい。それは嬉しいね。
それじゃあ僕は仕事に戻るとするよ。
少なくともこの仕事は“善”だからね」

言いたい事を言っつて気分が晴れたのか、高畑様の表情は幾分穏やかなものになって、お仕事に戻られました。

「高畑様も色々大変みたいですね。私も雪お嬢様の身に危険が及ばないよう注意しなければ．．．」

雪お嬢様は鼻眉目無しに見ても大変素晴らしいお方です。
あんなに真つさらな人は今まで見た事がありません。
悪魔の私わたくしが言うのも可笑しな話ですが、雪お嬢様はまるで天使のようなお方です。

ですが、雪お嬢様は人を疑う事を知りません。
それを優しさと言う人もいらつしゃいますが、その優しさや純粹さ利用する輩は必ず現れます。

私わたくしが居なくなつたとしても、エヴァンジェリン様わたくしが雪お嬢様を守つてくれるので大丈夫ですが、少なくとも今は、私わたくしが雪お嬢様をお守

りせねばなりません。

「少なくとも後二週間。雪お嬢様に害を成す輩は私が全身全霊を以って排除します」

私も高畑様と同じ決意を胸に刻み、雪お嬢様達の待つ家へ歩を進めました。

19:00

家に帰った私は、明日のために早速カレーの仕込みを開始しました。カレーは出来たてよりも、一晩おいた方が美味しくなります。出来たてのカレーは、とろみが少なくスープカレーに近い状態が多い。皆様もそういった経験は少なからずありませんでしたか？

「オー、美味ソウナ匂イジャーネーカ。作ッテンノハ、カレーカ？」

私がカレーの仕込みをしていると、チャチャゼ口様が現れて私の肩に乗ってきました。

チャチャゼ口様とはお酒を一緒に飲む事もある程仲良くなっています。

たまに殺し合いを持ちかけられたりする事もありますが...

「チャチャゼ口様、左様で御座います。

明日のために今から仕込んでおかないといけませんからね。
雪お嬢様とエヴァンジェリン様はご入浴ですか？」

「オウ、相変ワラズ仲ガ良イ二人ダゼ。

ツーカー仲良スギルンダヨ。百合ダ、百合ノ花ガ咲イテヤガル。
モウイツソノ事、籍デモ入レチマエ」

「——雪さんとマスターがお風呂．．

いけません2人とも．．そんなくはずほぐれつで．．
ああ．．ユートピアはここにありました．．（ブハッ」

「デ、妹ハ妄想ニ耽ツテ鼻血出シテイヤガルシヨ．．
ドウシテコウナッタ？」

チャチャゼ口様の背中からは哀愁感漂うオーラが出てきました。
わたくし私も同感で御座います。

主に茶々丸様ですが、茶々丸様の愛は少々オカシイといいますが．．
少し間違った方向に進んでおります。

普段はちゃんとしたお方なのですが．．残念です．．

「．．．．．はあ」

「．．．．．ハア」

わたくし私とチャチャゼ口様のため息が重なった瞬間でした．．

「——ふう〜〜．．．いいお湯だったねエヴァちゃん」

「だ〜な〜〜．．．」

とそこへ、お風呂から上がった雪お嬢様とエヴァンジェリン様が戻ってまいりました。

ふむ、今日の寝間着は浴衣みたいですね。

選んだのは茶々丸様ですか．．．風流で御座います。

「あれ？茶々丸さん、どうしてこんな所で寝てるの？風邪引いちゃうよ？」

雪お嬢様が茶々丸様に気付いたみたいです。

茶々丸様は．．．ダメですね。

今日はもう目を覚まさないでしょう．．．

「茶々丸様はお疲れになったので、本日はもうお休みなされました。
た。」

後で私^{わたし}がベッドに運びますので雪お嬢様はお気になさらず

「ソレニ妹ハ風邪ナンカ引キヤシネーヨ。
安心シトキナ雪」

「う〜〜．．．でも〜〜．．．そうだ！ちょっと待っててね」

雪お嬢様は暫らく考え込んでいると、いきなり二階に上がってしまいました。

そして少し待っていると、雪お嬢様は一枚の毛布を持って戻ってきました。

「せめて毛布だけは掛けさせてあげないと。
おやすみなさい茶々丸さん。また明日ね」

雪お嬢様は茶々丸様に優しく毛布を掛けてポンポンとたたき、温かい微笑みを向けました。

「――雪く、髪を梳かすから早くこい」

「はい、今いくよエヴァちゃん」

そしてエヴァンジェリン様に呼ばれて、雪お嬢様は二階へと向かっていきました。

「．．ヤッパ優シイナ、雪ハ．．」

「全く．．その通りで御座います．．」

本当に雪お嬢様はお優しい．．
ここまで素晴らしい方にお仕えする事ができて、わたくし私は幸せ者で御座

います・・・

「マラクス。イイ酒ガアルンダ、今夜チヨット付キ合エヤ」

「ええ、是非。ご一緒させていただきます」

魔神という最高位種である私には睡眠わたくしという行動は必要ありません。
お優しい雪お嬢様が知れば絶対にお怒りになりますが、今夜だけは
ご容赦お願いします。

「それではグラスを出しますね」

「オウ、頼ムゼ」

少しだけ・・・ほんの少しだけ、私もこの幸せわたくしの余韻に浸っていたい
のです・・・

00:00

「ん？この気配は・・・」

チャチャゼ口様とご一緒にお酒を飲んでいる途中、外から妙な気配
を感じ取りました。

「マラクス．．オメーモ気付イタカ？」

どうやらチャチャゼロ様も気付いたみたいです。
チャチャゼロ様から感じる雰囲気はいつもと違います。

「ええ、チャチャゼロ様。

どうやら敵が侵入してきたみたいです。
しかも相手は人外ですね」

さつきから感じる、人とは違う禍々しい気。
それも、少し違う気が集まっています。
敵は別々の種族が集まっている混成部隊のようですね。
数は．．ダメです、ここからでは分かりません。

「敵ノ目的ハ俺タチジャンサソーダガ、少シズツコツチニ近付イテ
イヤガル。

御主人ハ学園結界ノ効果ヲモウ受ケテネーカラ侵入者ノ情報ハコネ
ーシ、今ハ雪ト一緒ニ仲良ク寝テイル。

妹ハゴ覧ノ通りダウン中。テ、イウコトハダ．．」

「．．私達^{わたくし}が出るといことですね．．」

全く．．雪お嬢様達の睡眠を妨害するとは何と愚かな．．

ここに来る可能性がある以上、敵は殲滅しなければいけません。

「チャチャゼロ様はこの家の守備をお願いします。

別働隊がないとも限りませんからね。

私は外にいる不屈きな輩を駆逐してまいります」

私はポケットに入っている黒い革手袋を両手にはめる。

懐かしい感覚です。戦闘をするなんて何時振りでしょうか・・・

「オメー１人デ大丈夫力？

ナンナラ俺ガ代ワツテモイインダゼ？」

「お心遣いありがとうございます。

ですがご心配には及びません。

確かに私は戦闘に不向きです。

同じ魔神の中でも最下級の弱さでしょう。

でも侮ってもらっては困ります。

魔神は最高位種の一つです。例え最下級の私でも街一つは滅ぼす事ができます。

この程度の相手・・・造作ありません」

それに私には数百年ほど前に仕えてた方から賜った、この革手袋があります。

これを使えば中級魔神とも互角に渡り合えます。

「ソウカ・ナラ才前二任セルゼ。
絶対二無事デ・ナンテ言葉ハイラネーナ。
早く終ワラセテ酒飲ムゾ」

「かしこまりました」

茶々丸様ほどではありませんが、私も^{わたくし}2人が寝ている姿を見ると、
とても心が安らぎます。

あの幸せの一コマを壊すことは私が断じてさせません。
^{わたくし}私はチャチャゼ口様に一礼して侵入者の所に向かいました。

~~~~~

家を出て約十分。

侵入者はすぐに見つける事ができました。

人間を遥かに超える体躯、獰猛な顔、角が生えたソレは鬼と呼ぶの  
に申し分ありません。

それと翼が生えている・・確か烏族といった種族。

鬼は三十、烏族は十体といったところですか。

何故そんなに詳しく知っているのかと言うと、現在進行形で私と<sup>わたくし</sup>侵入者は対峙しているからです。

「なんだいアンチャン？なにそんな所で突っ立っていやがるんだ？」

おそらく大将格であろうと思われる鬼は私の事を観察するように見る。

今は魔力も気も抑えているので、私を対した脅威と見ていないのでしよう。

「ここから先には家があり、その住人はお休みになられております。

あの方達を起こしたくないので、申し訳ありませんが即刻引き返して下さい」

「そうだったのか、それは済まんかったな。  
だが、俺達は喚ばれた身なんぞね。

悪いが召喚士に逆らう事はできねえんだ。

それと目撃者は消せって言われている。

済まねえがアンチャンにも消えてもらっぜ」

まあ、それはそうですね・・・

私も喚ばれる側なのでそれは分かります。

大将格がそう言うと同時に、他の鬼が左右から攻め込む。  
ですが・・・

「・・・無駄ですよ」

攻め込んできた鬼たちは、見えないナニによって首を切断され、煙となって還っていった。

「アンチャン．．一体なにしたんだ．．．？」

大将格の鬼は即座に私わたくしから距離をおき私わたくしを射殺さんとはかりに睨みつける。

惜しいですね。あと二歩で仕留められたのですが．．

「戦いで己の手の内を見せるような愚行はいたしません。知りたいのならご自身の目で看破なさい」

「ははっ、それはそうだな。不躰なことと言って悪かった。アンチャンが何やったか、俺自身の目で見破らせてもらうぜ。野郎ども！弓を使え！アンチャンを近付けさせるなよ！！」

『——おう！！』

そして、敵から放たれる十数本の矢。  
良い判断ではございますが．．

「私わたくしには効きません」

またも見えないナニによって、飛来してきた矢は全て切り落とさ

れる。

「――後ろおお!!」

「――貰ったぜえええ!!」

その時に二体の烏族が私の背後に回って切りかかるうとしてきました。  
た。

成る程、弓での攻撃はフェイクでこっちが本命という訳ですか・・・  
悪くはありませんね。

「・・・ですが相手が悪すぎます」

「な・・・?」

「え・・・?」

おそらく切られた事すら分かっていないでしょう。

二体の烏族は胴体を真つ二つに切られ、煙となつて還つていった。  
その時、月の光によって一本の線が煌めいていた。

「成る程・・・糸か。アンチャンの使っている武器は糸なんだな」

「おや、バレてしまいましたか・・・」

そう。私<sup>わたくし</sup>が使<sup>つか</sup>っていたのは糸。  
それもただの糸ではありません。  
数百年ほど前に仕えてた【蜘蛛王】バアル様から賜<sup>たま</sup>った糸です。  
一本で恐ろしい程の強度を持ち、伸縮自在で持ち主の意のままに動  
く糸です。

「ったくメンドクせー得物だな。  
目で見える事は殆んどできねーし、気も感じられねえ。  
しかも攻撃するのも速いときた。  
仕方ねえな。ここは玉砕覚悟で突っ込むしかねえか」

そう言うと、相手は私<sup>わたくし</sup>の周りを取り囲むように移動する。

「精々、手加減をしてくれよアンチャン」

「それは了承しかねます」

「ケチなアンチャンやなあ。

まあいいわ、それなら・・・行くで？」

まるでダムが決壊したかのような勢いで相手は私<sup>わたくし</sup>に向かって殺到す  
る。

これを・・・この時を待っておりました。

「掛かりましたね。これで終わりです！」

押し寄せる鬼達の群れを、月光に煌めく銀閃が鎌鼬のように木々を切り、まるで死神の鎌みたいに鬼達の首を切り落とした。

「なっ．．．なんだと!？」

他の鬼達は還りましたが、大将格の鬼だけは首への一撃を免れたらしく、まだ残っていました。  
ですが傷が深いですね。もう長くないでしょう。

「貴方達と対峙した時から既に糸を張り巡らせていただきました。  
このような展開になった時に一網打尽にするために」

「．．全部アンチャンの手の平って事かよ。  
酒吞童子様の配下であるこの虎熊童子が情けねえぜ．．．」

「まさか鬼達を統べる酒吞童子の側近であり四天王の虎熊童子様だったとは．．．」

それならば私も名乗らねばなりませんね。  
わたくし私の名はマラクス。博識伯のマラクスでございます。  
お初にお目にかかります。虎熊童子様」

「!!!．．．おいおい．．．アンチャンは魔神だったのかよ．．．  
伝説クラスの悪魔じゃねえか．．．  
まさかこんな所で伝説に会えるなんてな、俺の方が光栄だぜ」

「そんなご大層な者ではありませんよ。  
わたくし私は魔神の中では一番弱いですから」

「へっ．．それで一番弱いかな．．．  
伝説の魔神は伝説に違わぬ強さだな．．．  
こいつあ皆んなに自慢できるぜ。  
あばよ、魔神のアンちゃん」

そう言つて虎熊童子様も煙となり還っていきました。  
これで全て終わりですね。

「ん？．．ここに近付いてくる気配がありますね．．．」

近付いてくる数は二つ。

学園側の警備員といったところでしょうか。  
些か仕事が遅いように思います。

「それにこの方達もまた．．．  
一人はさつき戦った烏族のハーフでしょうか？  
もう一人は．．これは懐かしい。  
同郷の方ですね。こちらもハーフですけど」

学園側は色々と突っ込み所のある人員登用をなさっているんですね。  
ここは逃げた方がいいでしょう。

見つければ厄介な事になりかねません。

「それでは警備員の方、私は失礼致します。  
良い夢を・・・」

そして私は、始めからここに居なかったかのように姿を消した。

後日談ですが、私が作ったカレーは大変ご好評いただきました。  
今度は何を作りましょうか・・・

## マラクス的一天（後書き）

アンケート募集中！！

期間は10月いっぱいです！！

詳しくは前々話の「エヴァちゃんはエヴァちゃんだよ！」の後書きを見て下さい。

はたしてマラクスは帰るのか、それとも帰らないのか、乞うご期待  
（　＾　＾　）ノ

転入。そして・・・（前書き）

ようやく完成しました・・・

雪がついに21Aに転入します。

この話でアンケートの結果が分かります。

まあ、感想欄を見ればすぐに分かるんですけどね。

アンケートに投票して下さった方々。本当にありがとうございます

た（´・`・´）ノ

それではどうぞ。

転入。そして・・・

雪side

ついに・・・ついにこの日がやってきた・・・

私がこの世界に転生してから一ヶ月・・・夏休みが終わりました。  
今日から・・・今日から学校が始まります！！

「学校」学校」

私が夢にまでみた・・・行きたくて行きたくてしょうがなかった学校・・・  
嬉しさで思わず変な鼻歌を歌っちゃう。

「雪　少しは落ち着いたらどうだ？  
朝早くからそんなテンションだと疲れるぞ」

「だってだって、ずっと楽しみにしていたし、嬉しくて仕方ないんだもん！」

さっきから胸のワクワクが止まらない！  
昨日もあまり眠れなかったし、早く学校に行きたい！！

「全く仕方がないやつだな雪は・・・」

登校時間まであと少しだからもうちょっと待っている」

「でも．．ううう．．でもおお．．．」

あともう少しなのは分かるんだけど、そのもう少しがスゴく長く感じる。

早く．．早く行きたいよおお．．．

「う．．そんな可愛いうなり声をあげないでくれ．．．  
私の心が保たない．．．

そんなに待ち遠しいなら、今のうちに制服でも着てみたらどうだ？  
ほら、雪の制服だ」

最初の部分は小さくて聞き取れなかったけど、エヴァちゃんは私に制服を渡す。

わあ．．マンガで見たよりも実際に見た方がカワイイ．．．

「うん、分かった！

それじゃあ今から着てくるね！」

私はエヴァちゃんから制服を受け取って、早速着替えた。  
似合うかなあ．．ちよつと楽しみ♪

## エヴァ side

私から制服を受け取った雪はとても嬉しそうな表情をして着替えにいった。

朝からずっとそわそわして．．．よっぽど学校が楽しみなようだな。さっきだって可愛いうなり声をあげて．．．まるで、お預けをくらった仔犬のような感じだった。

うむむ．．．とても可愛かった。

もう少して私の心が跡形もなく木っ端微塵になる所だった．．．危ない危ない．．．

「ああ．．．雪さん．．．雪さん．．．あんな事をされては私は大量出血で死んでしまいます」

茶々丸は既にノックアウトか．．．

鼻からドクドクと血を垂れ流している。

雪がこの家に来てから茶々丸はどうもオカシイ。

何というか．．．変態度が増したような気がする。

それにロボットなのに血を流しているし、葉加瀬や超にでもメンテナンスを頼んでみるか．．．

「——き．．．着替えたよお．．．」

む、どうやら着替えが終わったみたいだな。

どれどれ．．．雪の制服姿はどんな感じ——

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

振り返った瞬間、私は言葉を失った。

別に雪の制服姿が似合わない訳じゃない、かと言って素晴らしく似合うという訳でもない。

その姿は普通に何所にでもいる女子中学生だ。

だが問題はそんな所じゃない。問題は雪の仕草だ。

恥ずかしさなのか、少し顔を赤らめ、スカートの裾をギュツと握りしめ、足を内に寄せてモジモジとしている。その姿がまた何とも言えない・・・

いかんいかん。落ち着くのだ私。

雪と一緒に過ごしてから一ヶ月が過ぎたのだぞ。

こんな不意打ちの対処法は既に熟知している。

まずは深呼吸・・・その次に今日の晩御飯を考えるのだ・・・  
よしよし、だいぶ落ち着いてきたぞ。

「雪・・・一体どうしたというのだ？」

私は努めて平静を装い雪に聞く。

フツ・・・流石は私だ。

「だ、だって・・・この制服・・・ちよつとスカートが・・・み、みじか

い．．．」

最後は段々と窄すぼんだ声になって雪は言う。

そんなに短いか？確かに膝よりも上だが、普通のガキ共とそう変わらんだろう。

まあ、雪の普段の服装はワンピースだから仕方ないか．．．

「そんな事ないぞ。

今時の小娘どもなら普通の長さだ。

それに、雪の細くて白い、キレイな足が見えて良いじゃないか」

雪の体はとてもキレイだ。

一緒に風呂に入ったりもしてるから分かる。

体の線は細く、まるで淡雪を思わせるようだ。

それがまた保護欲を掻き立てる要因なのだな。

私の言葉を聞いた雪は、さっきよりも一層モジモジして．．．

「．．．．．えっち／＼」

グハツツ！！！

そんな．．．そんな可愛らしい羞恥で染まった目で私を．．．そしてその言葉．．．！

なんと愛らしい．．．そして、何というか破壊力か！？

イカン．．．これはイカンぞおお．．．！！

「マ．．マラクス．．水を．．水をくれ．．！！」

「かしこまりました」

私はマラクスが注いだ水を一気に飲みほして何とか事なきを得た。  
危なかった．．本当に危なかった．．．  
まさか一発で沈められるとは．．  
帰ってこれないと思ったぞ．．

「録画．．完了．．．」

もう私に、悔いは．．ありません．．．」

茶々丸は本当に満足した表情で逝ってしまった。

私もあと少し対処が遅れていれば同んなじになっていたのか．．恐ろしい．．．

それと、あとで私にもその録画した映像を渡すんだぞ茶々丸．．．

「ケケケ、朝ッパラカラ騒ガシイナ。

ツト、御主人。モウ時間ジャネーノ力？」

ん？時間だと？

まだもう少し時間が．．って思い出した。

雪は転入生だからいつもより早く登校せねばならなかったのだ。

「雪、もう時間だから行くぞ。

雪は転入生で、担当やら学年主任の話を聞かなければいけないんだ」

「うん．．でもスカートが．．．」

「大丈夫だ。他のみんなと全然変わらん。ほら、さっさと行くぞ」

「わわ、待ってよエヴァちゃん。

足がスースーしちゃうよ」

私は雪の手を引っ張って家を出た。

ふふ．．一体どうしたというのだ．．．？

私までワクワクしているぞ。

15年間も縛り続けられたアノ牢獄のような学校が。

これも、雪と一緒にいるのからなのかもしれないな．．．

いや、そうに違いない。

雪が側にいてくれれば私は何所にいても満足だ。

私はこの笑顔を雪に悟られないように学校へ向かって走り出した。

雪side

エヴァちゃんに引っ張られて、私は学校まで来ちゃった。

ほんの少しだけど登校してきている人達もいる。

エヴァちゃんの言った通りでスカートが短い．．やっぱりこれが普

通なのかなあ・・・

でも・・・やっぱり少しだけ恥ずかしいよあ・・・／／／

「——おい雪、職員室についたぞ。まずはタカミチにでも挨拶してこい」

少し考え込んだかな？

いつの間にか職員室についてしまった。

うう・・・スゴくドキドキしてきた・・・

「じゃあ私は先に教室に行ってるぞ。またな雪」

それだけ言うと、エヴァちゃんは教室の方に行っちゃった・・・  
どうしよう・・・私1人だけになっちゃったよあ・・・

「・・・ううん。弱気思考はダメ！

頑張れ！柏木 雪！！」

私は自分の弱気を追い出して両手でガッツポーズする。  
うんうん・・・何事も弱気、ネガティブはダメなんだから。

「ふう・・・し、失礼します」

職員室に入る作法はマラクスさんに教えてもらったからこれで大丈夫なはず。

私は一度深呼吸したあと、ドアをノックして職員室のドアを開けた。よし、頑張るんだぞ、私！

s i d e   o u t

「――し、失礼します」

雪は緊張の面持ち、といった感じですが職員室に入室した。

雪が入ってきた瞬間に数人の教師・いわゆる魔法先生が目付きを鋭くしたが、生まれてこのかた悪意や敵意といったものを感じて事がない雪には分かる筈もなかった。

「あ、あの・・・2―A担任の高畑先生はいらっしゃいますか？」

雪は少しの間　職員室を見渡したが　担任の高畑先生は見つからず  
近くにいた　眼鏡をかけた初老の男性教師に声をかけた。

「高畑先生かな？高畑先生はあと2〜3分もしたら来る筈だよ」

雪が声をかけたのは学年主任の新田先生。

一部の生徒からは『鬼の新田』と恐れられているが、それも生徒を思つての事。

生徒の事を大切に思う先生では学園トップクラスの先生である。

「ん？そういえば君は初めてみるね。

もしかして高畑先生が言っていた転入生かな？」

新田先生は、雪が転入生なのをすぐに言い当てた。

それだけでこの人がどれだけ生徒を大切に思っているのか窺い知れる。

このマンモス校である麻帆良学園の生徒の顔を覚えているのは新田先生くらいだろう。

「は、はい。今日から2ーAに転入する柏木 雪です。  
よろしく願います」

雪は自分の名前を言ったあと、頭をガバツと下げる。  
どうやらまだ緊張しているようだ。

そして、雪の言葉を聞いて一部の・・・特に黒人教師は目付きを一層  
厳しくした。

「やっぱりそうだったか。

おっと、私も自己紹介がまだだったね。

私は新田 玄人<sup>げんと</sup>。2年の学年主任をやっている。

柏木 雪くんだったね？これから宜しく」

「はい。よろしくお願いします」

新田先生は優しい笑みを向けて雪に語りかける。

どうやらその笑みで雪の緊張は ほぐれたみたいだ。  
雪の緊張を見抜き、なおかつ緊張をほぐすとは . .

流石は大ベテラン教師 新田先生。

「—— おや？雪くんじゃないか。  
ずいぶんと早かったね」

と そこへ、高畑先生が出勤してきた。

「あ、高畑先生おはようございます」

「高畑先生か、転入生の雪くんは既に来てますぞ」

雪は高畑先生に挨拶を言い、新田先生は少し窘めるような口調で言う。

「これは済みませんでした新田先生。  
生徒よりも先生が遅いとは . . 雪くんも済まなかったね」

「い、いえ、私が早く きすぎただけなんです！  
高畑先生は気にしないでください！」

高畑先生の謝罪に 雪は手をブンブンと振って慌てる。  
どうやら雪は謝られる事もあまり慣れていないみたいだ。

「そう言ってくれると助かるよ。  
さてと、それじゃあ新田先生、雪くん。  
早速だけど色々と言明しようか」

高畑先生は雪に説明するため 職員室を出るように促す。  
もつとも、早く説明したい訳ではなく、魔法先生達が雪に浴びせる  
視線に我慢できないためだ。  
心なしか、高畑先生の表情は苛立っているようにみえる。

「それもそうですな。  
では雪くん。行くでしょうか」

「はい」

高畑先生に続いて新田先生、雪と、職員室を出て行った。  
雪がドアを閉めるまで、魔法先生達は雪にたいする視線を止めるこ  
とはなかった・・・

~~~~~その後~~~~~

「まさか．．ずっと重い病気で学校に行くことができなかったとは．．

雪くんはとても苦労したんだね．．
う．．うおおおお．．．」

「あ、あのお．．新田先生？」

「決めた！決めたぞ雪くん！！

困ったことがあったら私に相談するんだ！
勉強面でも学校生活面でもどんな事でも相談に乗ってあげよう！！」

「は、はい．．ありがとうございます？」

学園の説明が終わったあと、大量の涙を流して雪の手を握る新田先生がいたとこないとか．．

雪side

学園の説明が終わって、私はようやく2ーAの教室を目の前にしている。

ドアを挟んでもみんなの楽しそうな声が聞こえる。

この向こうに．．このドアの向こうに私が夢見た光景がある．．

「それじゃあ僕が先に入って雪くんの事を軽く説明するから。それが終わったら合図するから入ってくるんだ」

そして高畑先生はドアを開ける——前にドアに挟んである黒板消しを取って教室に入っていた。
うう．．胸がスゴくバクバクするよお．．．

「それじゃあ雪くん。入ってきてくれ」

わ、呼ばれちゃった．．．
よ、よし．．行くぞ．．．

「は、はい」

私は一度深呼吸して教室へと入っていった。
頑張るんだ、私！

エヴァ side

私は雪が来るまで教室で待っていた。
ちなみに茶々丸は少し遅れてきた。
ふふ、私の封印が解けた事に数人の人間が驚いているな。
あれは桜咲 刹那と龍宮 真名か。

安心しろ。雪がこの学園に通う限り、私は暴れたりせんよ。
学校に行けなくなれば雪が悲しむからな。それだけは何としても
せん。

「はいはい皆んな席に着いて。HRを始めるよ」

む、どうやらタカミチが来たようだ。

近くに雪の魔力も感じられる。

見える．．私にはその場にいるように見えるぞ。

今頃 雪は緊張でガチガチになっているな。

「突然だけどこの2ーAに転入生がやってくる事になった」

『え？転入生？』

転入生の単語にクラスがざわつきだした。
うるさいうるさい。早く雪を出せ。

「その子は今までずっと重い病気にかかっていたね。
ようやく病気が治ったことでこの2ーAに復学する事になったんだ。
皆んなも仲良くしてあげるんだよ」

『はーいー！』

仲良くだと？

そんな事を言わなくても雪は誰とでも仲良くなれるさ。
もし雪と仲良くなれない奴は人間じゃない。

いや、私は吸血鬼だし茶々丸はロボットだから．．仲良くなれない
奴は．．うん、それはきつと壁くらいなものだろう。

「それじゃあ雪くん。入ってきてくれ」

「は、はい」

タカミチの言葉を合図に雪が教室に入ってきた。

ははは、やっぱり緊張していたか。

右手と右足が同時に動いているぞ。

「リラックスして雪くん。

それじゃあまずは自己紹介からやってみようか」

「は．．はい」

タカミチが優しく声をかけるが効果なし。

まるで壊れたブリキのオモチャみたいに、ギギギといった効果音が
聞こえそうな動作で私達に向き直る。

仕方ないな．．私が手を貸してやろう。

私は優しく微笑んで雪に手を振る。

「あ．．．．．（クス）」

それに気付いた雪も微笑み返す。

これで幾分かマシになっただろう。

どうだタカミチ。お前とは違うのだよ、お前とは。緊張がほぐれた雪は私たちに自己紹介を――

「えっと．．柏木 雪です。よろしく願いしましゅ」

して噛んだ．．。

惜しい．．あと少しだったのだが惜しかったな。

恥ずかしさで顔を真っ赤にさせている。

よし、あとで雪を慰めてやろう．．．

『カ．．カワイイ〜〜〜!!』

それにナニかを刺激されたのか、大多数の小娘どもが雪に詰め寄った。

全く騒がしい．．．

「うわあ、小顔。お人形さんみたいでカワイイ!!」

「あ、ありがとう．．．」

「真っ白でサラサラな髪の毛だね」

「そ、それは病気の症状らしくて・・・」

「どこに住んでるの？寮？自宅通学？」

「エヴァちゃんと茶々丸さんと一緒に住んでるの」

「肌も真っ白。それにスベスベ～」！

「ひゃ・・・あう・・・く、くすぐりたいよお・・・」

き、貴ッ様ら・・・雪の柔肌になに軽々しく触れている・・・ッ
氷像にされたいのか・・・？

私から抑揚のない魔力が暴風雨のように吹き荒れる。
だが一般人である小娘どもには分かる筈もない。
その代わりに“関係者”の奴等がもの凄く慌てだした。

「っ・・・さあさあ、質問タイムはもう終わりだ。

皆んなも好い加減 席に着きなさい」

『は～～い』

ふっ、どうやら私の魔力に焦ったタカミチがなんとか収めたようだ
な。

今回だけは許してやろう。

「それじゃあ雪くんはエヴァンジェリンの隣の席でいいかな？」

「はい」

ほお、雪は私の隣か．．．
そうかそうか、喜ばしいことだ。

「久し振りだな雪」

「エヴァちゃん．．うう．．自己紹介の時に噛んじゃった．．．
恥ずかしかったよお．．．」

「大丈夫だ。雪は上手くやっていたぞ。
そんなに落ち込むことはない」

私は雪を慰めるために頭を撫でる。
ああ．．なんか随分と久し振りに感じるぞ．．．

「わふ．．ん~~~~♪．．．」

今までの表情から180°。コロリと変わって愛らしい笑顔の花を咲かせる。
ふふふはははは！どうだ小娘ども！

これが私とお前たちを隔てる天と地程の差だ！
羨ましそうに見ているがいい！！

刹那 side

高畑先生が教室に入ってきた時に転入生の話が出た。
この一ヶ月間、私達を騒がし続けた例の侵入者だろう。
魔法に疎い私でもアノ異常な魔力量が分かった。
そして、その異常な魔力がドアの向かう側にいる。

一体どんなヤツなんだ・・・？

話を聞けば【闇の福音】で有名なエヴァンジェリンさんと一緒に
住んでいるという。

そういえばエヴァンジェリンさんの封印も解けているのだった・・・

もしこの2人が学園に敵対したら私は勝てるか？お嬢様をお守りする
事はできるのか？

いや、例えばどんなに強大な相手でも私はお嬢様をお守りせねばなら
ぬ使命がある。

その結果・・・自分自身の命を捨てる事になっても・・・

「それじゃあ雪くん。入ってきてくれ」

高畑先生が入ってくるように促がした。
来たっ！！

一体どんなヤツがやってくるん——

「は．．はい」

入ってきた人物は私の想像を遥かに裏切る容姿だった。

周りを全く警戒しない足運び、一般人となんら変わらない身のこなし、裏にいる者特有の匂いが全くしない。

言葉で表すなら“一般人”という単語以外に見つからない。

それに、彼女から感じる雰囲気．．

まるで一切の穢れを知らないような．．そう、真っ白な雪を思わせるような澄んだ雰囲気だった。

もしかお嬢様以上に清いかもしれない。

そして自己紹介を始めた時に彼女．．柏木 雪さんは噛んでしまった。

恥ずかしさで顔を真っ赤にさせて．．不意にも可愛いと思ってしまった自分がいる．．

そのあとにクラスのみんなから質問責めにあっていた。

最後の方に誰かが柏木さんの肌を触って――

「――ッッ!？」

突如 教室に暴風雨が生まれた。

暴風雨を生んだ主はすぐに分かった。

この暴風雨を生んだのはエヴァンジェリンさんだ。

抑えようとしてもしない暴力的な魔力が首筋をチリチリと灼き、心臓を驚掴みにされたみたいだ．．．
正直 生きた心地がしない．．．

「っ．．さあさあ、質問タイムはもう終わりだ。
皆さんも好い加減 席に着きなさい」

これに気付いた高畑先生もクラスの皆んなを収める。
それと同時にエヴァンジェリンさんの魔力も鎮まった．．．
焦った．．まさかいきなり仕掛けてくるのではないかと思った．．．

そして柏木さんエヴァンジェリンさんの隣の席へと座った。
2人は少し話しをしていると、エヴァンジェリンさんが柏木さんの頭を撫でだした。

柏木さんは笑顔の花を咲かせて、エヴァンジェリンさんはとても幸せそうな表情をしている。

それは【闇の福音】として恐れられた人とは別人を思わせる程だった。

そして何故か．．それを見て羨ましいと思っている自分がいた．．．

龍宮 side

このクラスに転入生がやってきた。
おそらく相手は例の侵入者だろうね。
最初に教室に入った時に闇の福音の封印が解けていたし、いやはや、

メンドくさい事になったね。

ま、私はお金さえ払ってくればどちらにでもつくけどね。

そして転入生が入ってきた。

これはこれは．．全くの素人じゃないか．．

ただ魔力が異常に多いだけのね。

魔眼で見ても何も——いや、彼女の着けている2つの指輪はなんだ．．？

私の魔眼を以ってしても見破れない。

いや、ただの上質な魔法媒体なのは分かるんだが、左手に着けてある紅玉をあしらった指輪はそんな程度の存在じゃない．．．

なんというか．．私の本能が叫んでいるんだ。

『アレは私達の頂点が造ったモノだ』とね。

だったらもう1つの指輪も同じ存在だろう。

おそらくだが、かなり強力な認識阻害魔法がかけられているね。

私の魔眼でも見破れない程の。

そして転入生．．柏木 雪は自己紹介をしたんだが噛んでしまった。
何故か慰めてあげたい衝動に駆られる．．．
ん？私の魔眼に仔犬の尻尾と耳が見えるぞ．．
これは一体どういう事だ？

そして、クラスのみんなが雪に詰め寄った。

だが、最後の方になると雪の真っ白な肌を触りだし——

「——っ！！」

いやはや困ったね．．．

闇の福音が魔力を開放してきた。

一般の子達は気付かないだろうけど、私達からしたら たまったもんじゃない。

手や足がまるで凍ったみたいな感覚だ．．

「っ．．さあさあ、質問タイムはもう終わりだ。

皆さんも好い加減 席に着きなさい」

高畑先生の言葉に闇の福音の魔力も鎮まる。

ふう．．いきなり魔力を開放されたら私も焦るよ。
一瞬だけど“死”をイメージしてしまった。

これが全盛期の【闇の福音】か．．

よし、学園から討伐の依頼がきたら絶対に断ろう。

そして雪はエヴァンジェリンの隣に座り、お互いに仲良く話をして
いた。

それから、さつきまで魔力を開放したとは思えないほどの優しい表
情で闇の福音は雪の頭を撫でた。

雪もとても嬉しそうにして闇の福音の手を受け入れる。

それを見て、私の胸はトゲに刺さったみたいにチクチクしてきた．．

雪side

二度目の人生で初めての学校．．

授業はマラクスさんのお勉強のお陰で問題なかった。
クラスの皆さんとも楽しくお喋りできた。
楽しかった．．．本当に楽しかった．．．

「雪ちゃん　じゃあね〜」

「ほな　また明日な〜雪ちゃん」

そして今は放課後。

私に手を振るのは神楽坂　明日菜ちゃんと近衛　木乃香ちゃん。
この2人とはすぐに仲良くなった。

明日菜ちゃんはマンガと同じでスゴく活発的。すこし羨ましい。

木乃香ちゃんはとても優しく人懐こい性格だった。

うん、木乃香ちゃんは将来　絶対に良いお嫁さんになる。私が断言する。

「うん、明日菜ちゃんも木乃香ちゃんもまたね〜」

私も2人に手を振って別れた。

“またね”か．．．そういえばそんな言葉を言った事もなかったんだ、
私は．．．

「おい、どうしたんだ雪？」

はっ！またネガティブ思考になっちゃってた・・・
ポジティブ・・・ポジティブになるんだ私！

「うっん、大丈夫だよエヴァちゃん。
初めての学校で色々と思った事があっただけ」

「初めて・・・か・・・
どうだ？初めての学校は？楽しかったか？」

「うん！とっても楽しかったよ！」

私はエヴァちゃんの言葉に正直に答える。
あれが私の願った学校・・・
それがこれからも続くと思うと胸が高鳴る。

「そうか、楽しかったか・・・私も楽しかったぞ。
15年間通い続けたこの学校が初めて楽しく感じられた。
雪と一緒にいてくれるだけで楽しく感じられた」

「エヴァちゃん・・・うん、ありがとう」

私はエヴァちゃんの手を握った。
エヴァちゃんも私の手を握り返してくれた。
お互いにお互いの手を握りしめて、私たちは家に向かって歩きだした・・・

~~~~~

「——雪お嬢様。お話しがあります」

学校から帰ってきて、皆んなで晩御飯を食べたあとにマラクスさんが話を切り出した。

「どうしたのマラクスさん？」

「覚えておられますか？」

私が初めて雪お嬢様にお会いした時の事を．．．」

初めて．．．確かマラクスさんは私が学校の授業に着いてくれるように家庭教師をしてくれてたんだっただけ。  
それで私はマラクスさんに一ヶ月間勉強を——

「あ．．．．．」

思い出した．．．  
サタンおじいちゃんが言っていた．．．  
マラクスさんは一ヶ月経つと帰るんだった．．．  
学校が始まったっていう事は．．．

「マラクスさん．．もしかして帰っちゃうの？」

「はい．．そろそろ私は戻らねばなりません．．」

そんな．．

今まで一緒にいたのに．．

帰っちゃうなんて．．

「帰らないで．．マラクスさん．．っ」

気付いたら私は涙を流してマラクスさんに抱きついていた。  
マラクスさんはもう私にとって大事な家族だよ．．  
いなくなっちゃ寂しいよ．．

「申し訳ありません．．

こればかりはどうする事もできません．．  
わたくし私の身勝手なお願いをどうか．．」

「ううん．．身勝手なのは私だよ．．

会ったときからマラクスさんは帰る事が決まっていたんだもん．．  
でも．．私はマラクスさんに帰ってほしくないよ．．  
マラクスさんは私にとって大事な家族なんだから．．」

「家族．．ですか．．悪魔である私が家族．．  
ふふ、本当に雪お嬢様はお優しい方で御座います。」

貴女様にお仕えできて私は大変幸せでした」  
わたくし

そう言つてマラクスさんは優しく私を引き離す。  
本当に．．留まるつもりはないんだね．．．

「だからこそ、私の最初にして最後のお願ひです。  
わたくし

どうか、私を笑顔で見送ってください。  
わたくし

泣いている顔は雪お嬢様に似合いません。

貴女様は笑顔こそ一番素晴らしい。

ですから．．どうか．．．」

笑顔．．．

うん、そう．．だもんね．．．

泣いている顔でマラクスさんを見送る訳にはいかないもんね．．．

「うん．．分かったよ．．マラクスさん」

私は涙を拭つて笑顔を向ける。

今までの“ありがとう”を込めて．．．

「感謝いたします．．．」

私の笑顔を見て安心したのか、マラクスさんも笑顔をみせた。

「帰ッチマウノカ マラクス。

残念ダナ。一緒ニ酒ヲ飲ム奴ガ減ッチマウジャーネーカ」

「申し訳ありませんチャチャゼロ様。  
わたくし

私もチャチャゼロ様と一緒に酒を飲めて楽しかったです」

「ソツカ・・ンジャア殺シ合イデモスツカ」

「何故その会話に辿り着くのか分かりませんが辞退させていただきます」

チャチャゼロちゃんはそんな事を言っているけど、結構 寂しがつているのが分かる。

「マラクスさん。これは私が持っている和食のレシピです。  
是非 持っていて下さい」

「これは・・大変ありがとうございます。  
わたくし  
では私も。洋食のレシピで御座います。  
よろしければお使い下さい」

「ありがとうございます」

茶々丸さんとマラクスさんはお互いにレシピを渡す。

結局2人は最後まで相手の料理に辿り着く事が出来なかったって言

つていたな．．

エヴァちゃんは何も言わず、私達に背中を向けている。ただエヴァちゃんも寂しがっているのが分かる。

「．．雪お嬢様」

そしてマラクスさんは私に向き直った。

「私は帰わたくしつてしまいますが、これで二度と会えないという訳ではありません。

必ず．．必ず　またお会いしましょう」

「本当．．．？」

絶対．．絶対だよ？」

「はい。誓います」

気が付けばマラクスさんの体は淡く光りだして、存在が希薄になっていた。

もう．．あまり時間は無いんだね．．．

「じゃあね。なんて言わないよ。  
また会えるんでしょ？」

マラクスさん．．またね」

「ふふ．．はい。またお会いしましょう。雪お嬢様」

そして、一瞬強く光ったと思ったらマラクスさんはもういなかった。  
本当に．．帰っちゃったんだね．．．

（ありがとうマラクスさん．．そして、またね．．．）

私は心の中でもう一度言った。

今までの感謝を込めて．．また出会える事を祈って．．．

今日の夜空はいつも以上に星が輝いていた．．．

転入。そして・・・（後書き）

はい。アンケートの結果は帰るになりました。

ご協力ありがとうございました。

それでもちよくちよくマラクスを出すのでマラクスが好きな人は安心してください。

それと新田先生の名前が分からなかったので勝手に名前をつけました。

そして龍宮のフラグを建築。刹那のフラグはまだ少し。

雪の耳と尻尾が見えたキャラには漏れなくフラグが立つ事になります。

よしよし、ここから百合のお花畑を創るぞ・・・

もしかしたらまた軽いアンケートを出すかもしれませんが、その時  
もご協力お願いします（＾Ｏ＾）ノ

それでは私は眠いので寝ます。

皆様おやすみなさい・・・ZZZZZZZZ

お友達に・・・なりませんか？（前書き）

更新、遅くなりました・・・

オリキャラが仲間になります。

そしてフラグ少しずつ建築・・・

そして大事なことを忘れていました・・・

第二話の主人公説明に、雪の使う魔法を加筆しました。

本当は出てきた時に加筆するつもりだったんですが・・・  
気が向いたら見てみてください。

新しい魔法が増え次第、随時 加筆していきます。

お友達に・・・なりませんか？

雪side

「おはよう雪ちゃん」

「みんな おはよう」

21Aに転入してから一週間。

今では殆んどの人達と仲良くなりました。

ネギ先生を好きになる のどかちゃん。

そして、のどかちゃんの友達の夕映ちゃんとパル（そう呼んでと言われました）。

それに、まきちゃんや、委員長こと あやかさん。

本当に沢山のお友達ができました！

「ふう・・・朝から元気な奴らだな・・・」

隣を歩いているエヴァちゃんが呆れた声を出す。

学校が始まって一週間が経ったけど、エヴァちゃんはまだ一回もサボっていない。

それを見て、高畑先生がスゴく驚いていた。

エヴァちゃんは、やれば出来るんだから！

「あ、雪ちゃんや」。おはよう」

「おはよう。木乃香ちゃん」

すると、ほんわかした笑顔の木乃香ちゃんが手を振って こっちにやってきた。

あれ？今日は1人なんだ？

「木乃香ちゃん。明日菜ちゃんはどうしたの？」

「明日菜は新聞配達があつたから少し遅れてくるんよ。ウチは待つって言ったんやけど、明日菜が先に行つていいって」

そっか．．．そういえば明日菜ちゃんは新聞配達のアルバイトをしていたんだよね．．．  
立派だなあ．．．明日菜ちゃん．．．

「大変だけどスゴイね。明日菜ちゃんは」

「雪ちゃんやつてエライやんか。  
病気で今まで学校に行けなかったんやろ？  
それでもみんなに着いてこうと、勉強を頑張ってるやん。  
ほら、良いこ良いこ」

「えへへ．．．ありがと 木乃香ちゃん．．．」

木乃香ちゃんは私の頭をポンポンと撫でてくれた。  
んにゅ．．やっぱり誰かに頭を撫でられるのは気持ちいい．．．」

「おい、近衛 木乃香。

少し雪に近すぎるんじゃないか？」

突然、エヴァちゃんが、目尻を少し上げて私たちを見る。  
私と木乃香ちゃんは そこまで近くないよ？

「ごめんなあエヴァちゃん。

雪ちゃんが可愛えかったから つい独り占めしてもうた。  
堪忍なあ？」

「ひ、独り占めなどっ．．べ、別に私はそんなんじゃない——」

「それやったら もう少しこうしてても ええよね？」

「ぐっ．．お前は．．．っ」

木乃香ちゃんの言葉を聞いて、エヴァちゃんは悔しそうに、それでいて少し恥ずかしそうな表情をした。

そして木乃香ちゃんは、勝った表情をエヴァちゃんに向けていた。  
2人とも、どしたのかな？

「雪ちゃんは ほんと撫で心地がええなあ」

髪の毛サラサラやし、ポカポカしとる。  
ナデナデ〜」

「わふっ．．んへへ、気持ちいい．．．」

えへへ．．そう言ってもらえると嬉しいな。  
あ、もうちょっと上の方を撫でて。

「お、おい！私も雪の頭を撫でるぞ！」

エヴァちゃんが焦った表情をしながら、両手を上に上げてピョンピョンとジャンプする。  
ふふ、まるで子供みたい。

「うん、いいよ」

身長の関係もあって、私は少し屈んでエヴァちゃんに頭を向ける。  
その間も、木乃香ちゃんは優しく頭を撫でてくれた。

「うむ．．．（なでなで」

エヴァちゃんは、とても満足した表情をして、私の髪を梳かすようにして撫でる。

木乃香ちゃんの手デナデも気持ちいいけど、エヴァちゃんの手デナデも気持ちいい・・・

「エヴァちゃんも撫でるの上手やな」  
雪ちゃん、とっても嬉しそうやん」

「当然だ。

私と雪は一緒に暮らしているのだからな。  
毎日毎日 雪の頭を撫でているぞ」

「毎日かゝ、羨ましいな」

「ふふふ、そうだろう羨ましいだろ。  
私と雪はそれだけの仲なのだ。  
お前達では辿り着けんよ」

「あははゝ。面白いこと言いよるね」。  
でも、そんな油断しとると足元掬われるえ？」

「あれ・・・？  
一瞬だけど2人から火花が散っていたような・・・  
気のせいだよな？」

「ふっふっふっふっふ・・・」。

「あははははは・・・」。

2人とも仲良く笑っているから、どうやら私の勘違いだったみたい。  
でも なんだろ．．

2人とも目が笑っていないような気が．．

(．．．．．ん?)

いま誰かの視線を感じたような．．  
後ろを振り返ってみたけど、誰もいなかった。  
今日はなんか勘違いが多い日だな．．

エヴァ side

アノ睨み合いから数分。

木乃香はクラスのみんなに呼ばれて、渋々といった様子で私達から別れた。

おそらくだが、木乃香も見えているのだろう。  
犬耳・尻尾  
雪のアレが．．

まさか、こうも早くにライバルが現れるとは．．  
これも雪の人徳の為せる技か．．  
喜ばしい反面、些かよろしくないな．．

俯瞰的に見ても、木乃香は良い人間の部類に入る。  
皆んなとも仲良く接し、物事もよく捉えている。

話を聞けば、料理も上手いらしいじゃないか。それに、雪も木乃香の事を気に入っている。

1人目にしては随分と強敵じゃないか……

先の舌戦も、危うく掬われる所だった……

したたか……かつ、攻め時は一気に飛び込んでくる。

侮れん相手だな。近衛 木乃香。

「……だが……そう簡単にいかんぞ……?」

私の絶対なるアドバンテージ。それは、私と雪と一緒に住んでいるという事だ。

これで私は他の奴等より二歩、三歩抜きん出ている。それを安々と越える事などできんさ。

フツハツハツハツハ!

私の勝利は必然! 勝ち戦ほどもつらんものはないな!

天と海底に等しき差。それがどこまで縮まるか見てるとしよう。

せめて山頂くらいまでは縮めてくれよ?

でないと私がつまらん。

茶々丸 side

どうも皆さん。雪さんをこよなく愛している茶々丸です。

『え？いたの？』ですか？

勿論いましたよ。最初っから。

木乃香さんとマスターが雪さんの頭を撫でて、火花を散らしている所も見てました。

『一言も発してないじゃん』とか、『全然気付かなかった』とか言う人はキライです。

マスターは、既に木乃香さんに勝利していると思いますが、雪さんと一緒に住んでいるのは、なにもマスター1人だけではありません。

そして、勝利するのもマスターではありません。

私が最高に美味しい所を持っていきますから。

『卑怯だ』ですか？

愛に正道も邪道もあります。

そんなこと言う人は大キライです。

そんな人には、先ほど頭を撫でられていた雪さんの映像や、私が毎朝録画している雪さんの寝顔を見せてあげません。

さて、それではそろそろ話を進めましょう。

授業風景や学校生活は特筆する事もなく平和平凡。

今は授業も終わって放課後です。

「ふんふふん、ねえ茶々丸さん。

あの子たち、今日もいるかな？」

軽快な鼻歌と一緒にステップを踏み、両手に持ったビニール袋をガ

サガサと揺らしながら、雪さんはウキウキとした表情をしながら振り向く。

ああ・・・とても愛らしいです・・・

「ええ、今日もいますよ」

その笑みをみて、私も微笑み返す。

“あの子たち”というのは、仔猫たちの事です。

以前 散策していた時に、仔猫たちが集まっている場所を見つけまして、エサをあげたところ、懐かれてしまいました。

最初は私1人だったんですけど、雪さんも一緒にするようになり、以来こうして2人でエサをあげに来ているのです。

ちなみにマスターは、「ガラじゃない」と言って既に帰宅しています。

この時間は私と雪さんが2人きりになれる唯一の時間です。

雪さんと2人きり・・・ああ、なんと甘美な響きでしょう・・・

鼻から愛が・・・

「あ、着いたよ茶々丸さん」

いけません。少し物思いに耽っていたようです。

私たちは人通りの少ない広場に出ました。

最初はシーンと静まり返っていましたが、少し待っていると・・・

「——ニャア」

一匹の仔猫が現れました。

仔猫は、私たちが来たのだと気付くと、安心して近付いてきます。それに続いて、他の仔猫たちも集まってきました。

「あはは、今日も皆んないるね。  
よしよし、良い子〜」

「にゃむ．．」

雪さんは近くにいた仔猫の喉を撫でました。

仔猫は気持ち良さそうにして、雪さんの手を受け入れる。すると、他の仔猫たちも撫でてアピールをしながら雪さんにすり寄ってきました。

雪さん、大人気です。やはり雪さんの人徳は種を超えるようです。これは一種の才能ではないでしょうか？

「皆んな落ち着いて。くすぐつたいよ〜」

あとで皆んな撫でてあげるから、まずはご飯を食べよ?。」

『ニャアー!』

雪さんは、殺到する仔猫たちを落ち着かせて、エサを食べるように

促す。

仔猫たちも分かったらしく、素直に鳴いて雪さんの言葉にしたがう。そして取り出す本日のエサ。セール中で大特価だった、銀のスプ。ンです。

「よし、皆んなたくさん食べてね？」

持ってきたお皿に移し終わると、仔猫たちは一斉にエサを食べ始める。

すると、小鳥たちも集まってきました。

ここには仔猫以外にも、仔犬や小鳥たちもくるので、常にエサは持っているので大丈夫です。

「皆んな美味しいかニヤ？」

はうっ！！

雪さん．．語尾に『ニヤ』を付けるなんて反則です．．．

いくら語尾に『ニヤ』を付けても、皆んなは分かるはずありません。ですが一応 録画を．．．

あとで無限リピートをかけて、家でゆつくりと楽しむとしましょう。

ふふふ．．．想像しただけで鼻血が．．．

「にゃう」

「にゃ！」

「にゃん」

「んにゃ！」

「ガウツ！」

どうやら通じたのか、それとも反応しただけなのか、仔猫たちは頷いて・・・って、ガウツ？・・・

「ゆ、雪さん！それ狼です！」

何故か仔猫たちに混ざって狼が混ざっていました。

最初は犬かと思ったのですが、私の量子コンピューターだ即座に狼と答えを導き出す。

しかも微量ですが魔力もあります。

私でも流石に焦ります。もし雪さんに危害が及べば・・・っ！

「狼？へえ、狼なんだ？」

普通の犬より大きいなあ、とは思っていたけど、スゴイね？」

「ガフツ！・・・（バクバク）」

雪さんは、なんとも場違いな発言をしつつ、狼の頭や喉を撫でる。

狼も気持ち良さそうにして鳴きながら、ペディグリー。ヤムをバクバクと食べる。

．．．狼が犬用のエサを食べていいのでしょうか？  
やはり同じイヌ科だから大丈夫なのでしょう？

あまりに常識はずれな反応をする雪さんに、私はただ啞然とするしかありませんでした．．．

s i d e   o u t

狼が現れた小さな騒動から十数分。

茶々丸はクラスメイトの葉加瀬に呼ばれて渋谷と場を後にした。  
仔猫たちも帰ってしまい、残ったのは、雪と狼だけになった。

「えへへへ。もふもふだあゝ」

「ガウガウ」

雪は狼に抱きつくような形で顔をうずめる。

どうやら狼の体毛は　もふもふしているらしく、雪はお気に召したようだ。

狼の方も気持ち良さそうに鳴いている。

「そつえばキミは狼なんだよね？  
どうしてこんな所にいるの？」

もしかして1人・・じゃなかった。1匹？」

「ガウ（こくこく）」

どうやら狼は雪の言葉が完全に分かっているらしく、こくこくと頷く。

茶々丸が魔力を観測していたので、やはり普通の狼ではないらしい。

「そつか・・でもそれだと危ないよね。

狼がこんな所にいるなんて、他の人達が大騒ぎしちゃうもん。

うーん・・そうだ！良かったらウチに来る？」

エヴァちゃんや皆んな次第だけど、私がなんとかしてあげる！」

「ガウガウ！」

どうやら雪はこの狼を飼うつもりのようだ。

確かにエヴァ達を説得できれば、飼うこともできるだろう。

狼は大きい体でジャンプしながら喜んでいる。

そういえば読者の皆さんには説明していなかったが、この狼の大きさは、ラブラドルよりも一回り大きいサイズだ。

そして毛色は雪と同じ純白。

うん、やはりデカイ・・

「そうだと決まれば名前を決めなくちゃいけないよね。いつまでもキミじゃ変だし、今の内に決めておこう。」

なにがいいのかな．．うん．．」

もう既に雪の中では飼うことが決まっているらしい。  
額に指をあてて、名前を懸命に考える。

しばらく考えていると、名前が決まったみたいだ。  
この狼の名前は．．．

「——ポチ！」

．．．どうやら雪のネーミングセンスは壊滅的のようだ．．．．  
ものすごい自信満々な表情で、ものすごいベタな名前を言う。

「ガウガウ！！（ブルブル）」

流石にその名前は嫌だったらしく、激しく首を振る狼。  
よほど嫌だったのか、若干 涙目である。

「もしかてダメだった？  
それじゃあ別の名前を考えないと．．  
うーんと——」

——ジャリ

あのネーミングセンスで、一体どんな名前が飛び出してくるのか非常に怖いところだが。

突如 砂利を踏む音が聞こえた。

当然、ここは公共の場所なので普通に人も来る。だが、現れた人物は“普通”の人ではなかった。

「あ、あなたは・・・」

雪とは真逆の黒い髪。

それをサイドテールにして、大和撫子が似合うような容姿。

中に入っているのは竹刀だろうか・・・

長い竹刀袋を肩にかけるその人は・・・

「こうして話すのは初めてですね。

私の名前は桜咲 刹那です」

雪のクラスメイト。

出席番号16番、桜咲 刹那だった。

「こうして2人で話すのを待っていました。

いつもはエヴァンジェリンさんや絡繰さんが一緒にいましたからね」

「え？それって一体・・・」

雪は事態に着いていけず、首をキョトンとして傾ける。  
この会話から察するに、どうやら雪が朝に感じた視線は刹那のもの  
だったらしい。

「実は貴女に二、三質問したい事があるんです。  
エヴァンジェリンさん達がいない今しか聞けません。  
悪いですが、少々お付き合い願いますか？」

「べ、別に大丈夫です。」

刹那の言葉にすんなりと頷く雪。  
だが刹那の出す雰囲気の原因なのか、敬語になってしまった。

「ありがとうございます。それと、話す時は普通に話してください  
ね。」

まず最初に一つ目。柏木さん、貴女は魔法の存在をご存知ですね？」

「え？それって・・・」

刹那の言葉に雪は驚いた。  
普通だったら一笑に付すような質問だが、雪が嘘をつけるはずもな  
く、肯定と受け取れるような反応をした。

「私も魔法の関係者と言うことですよ。  
次の質問です。貴女は約一ヶ月程前に、この麻帆良学園にやってきましたね？」

「う、うん。そうだよ」

刹那は補足もそこそこに、すぐさま次の質問に移る。  
雪は刹那が魔法関係者だと知って少し驚いたが、刹那の質問に答える。

「そうですか．．．それでは最後の質問です」

今までの雰囲気から一変。

刹那は目つきを険しくして雪を見据える。

彼女がここまでするのは訳があった。

彼女には守りたい人がいた。

自分を友達だと言ってくれた大事な大事な人。

その人が、学園を騒がした侵入者と仲良くしている。

侵入者．．．つまり雪は、悪い人間ではないと分かっているのだが、  
彼女は直に聞きたかったのだ。

雪の目的を．．．

「貴女はなにが目的で学園に――」

だが、それを遮る者がいた・・・

「ガルルルルル・・・ッ！」

刹那の険しい雰囲気を感じ取ったのか、刹那と雪の間に、白い牙を剥き出しにして狼が割って入る。

「貴様ツ・・・化生の類か!？」

刹那も狼から感じる力を感じ取り、すぐさま臨戦態勢に移って刀を抜く。

「ふ、2人とも落ち着いて！  
ケンカはダメだよ！」

2人の険悪な雰囲気が漂うなか、雪は必死に2人を止めようとする。  
だが・・・

「ガルルルルルル・・・ッ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

両者はお互いに止める素振りを全くみせない。  
寧ろ険悪な雰囲気は増すばかり。

まさに この場は一触即発の空気だった。

「ぐすん．．．2人ともお．．．ひつく．．  
ケンカは．．ぐすっ．．ダメだよお．．．」

争い事をなにより嫌う雪は、一向に止めようとしなない2人を見て、  
ついに泣き出してしまった。

——— その時。 鬼が現れた

「——— うおおおおおおおおお！！  
ゆううううううきiiiiiiiiiiii！！！！」

自動車もかくやという猛スピードでエヴァンジェリンが爆走してき  
た。

そのまま雪の目の前で、『キキイイ！！』と急ブレーキをかけて

止まる。

「雪い！大丈夫か！？おお．．．なんということだ．．．  
私が来たからもう大丈夫だぞ！」

「ぐすん．．．え？あちゃああん．．．」

エヴァはすぐさま雪の頭を胸に寄せて抱きしめる。  
一体どうして雪が泣いていることに気付いたのか．．  
恐るべき『雪LOVEぱうあ〜』である．．．

「誰かにイジメられたのか？  
一体だれが——」

刹那の存在に気付いたのか、まるで首がねじ切れるような勢いで、  
『グリユン！』とオカシナ効果音を出して刹那を睨みつける。

「さああくううらああざああきいいい．．．！」

「ひっ．．．」

「お前だな お前だろ お前なんだろ お前しかいない お前に決  
まっている よし殺す——！」

反論を全く許さない怒涛の問い詰めで、見事ワンブレスで言い切った。

全力で開放された魔力に刹那も怯えきっている。

「ふふふふふ．．大丈夫だ、痛くしない。  
少しヒヤツとするだけで　すぐに終わる。

せめてもの慈悲だ。辞世の句くらいは選ばせてやろう。  
よし、それじゃあお別れだ」

どうやら辞世の句を選ばせるつもりはないようだ．．  
エヴァは静かに魔法の詠唱を始めた。

——クイ

その途中、エヴァの服の袖を引っ張る者がいた。  
まあ誰だか既に分かっているのだが．．

「けんか．．だめ．．」

片手でエヴァの袖を引っ張り、片手で目を『グシグシ』とこすりながら、雪はエヴァを止める。

「ゆ、雪．．だがな．．」

「けんか．．．だめ．．．!」

「ぐっ．．．．．」

雪の涙目にエヴァは止まるしかなかった。

顔を赤面して、鼻を摘まみ、エヴァは詠唱を止める。

雪を泣かす選択肢など、エヴァの中にはミクロン単位もありはしないのだ。

「．．分かった、取りあえず皆んな家に来い。  
話しはそこで聞いてやる。

そこに隠れている狼もだ。いいな」

「グル．．．」

エヴァは広場の影に隠れている狼も呼ぶ。

実はエヴァが現れた瞬間、狼はエヴァの力を見抜いて即座に隠れたのだ。

だが逃げた訳ではなく、隙を見つけて喉仏を噛み千切ろうと虎視眈々と潜んでいたのだ。

やはり普通の狼ではないらしい。

「フン、私の喉元を狙っているのか。

雪がいる手前、その無礼は許してやる。

早くお前も来い。でないと置いていくぞ」

エヴァは狼を一瞥すると、すぐに踵を返して歩き出す。  
狼もこれ以上は無駄だと悟ると、エヴァ達に着いて行った。

~~~~~

エヴァの乱入から少し落ち着き、今はエヴァの家で一同が会していた。

「さてと、まずは最初に桜咲 刹那。
お前から説明しろ」

エヴァはイスに座って頬杖を付きながら刹那に説明を要求する。
その姿は『ふてぶてしい』の一言に尽きる。

「わ、私はその・柏木さんの目的を――」

「違う。そんな事ではない」

「え？」

だが刹那の答えはエヴァの望む答えではなかったらしい。
途中で刹那の言葉は遮られた。

「お前の事など興味ないし、知りたくもない。
私が知りたいのは、お前が雪を泣かせたのかどうかだ。
他の事など細事に過ぎんわ」

．．．どうやらエヴァは雪を溺愛しているようだ。
本当にどうでもいいような表情をする。

「で、どうなのだ？お前が雪を泣かせたのか？」

「わ、私は．．．」

エヴァの言葉に刹那は言い淀んだ。
泣かしたと言えは泣かしたし、泣かしてないと言えは泣かしてない。
否定できないのは刹那の生真面目さ故だ。

「桜咲さんは悪くないよ」

とそこに、雪が手を差し伸べた。

「桜咲さんは悪くないよ。」

2人がケンカしちゃいそうだったから私がつい・・・だから桜咲さんを責めないで・・・ね？」

「・・・うむ・・・雪がそう言うのなら許してやろっ」

「あ、ありがとうございます」

エヴァは渋々といった様子だが、刹那を許した。

刹那は安堵の表情を浮かべて力を抜く。

全盛期のエヴァと戦っても、万が一にも勝ち目はない。今ここで倒れる訳にはいかないのだ。

「よし、それじゃあ次だ。その狼は一体なんだ？

微量だが魔力が感じられる。

それにさっきの身のこなし、私達の言語を理解するその賢さ。明らかに普通の狼ではないな」

「あ、この子は広場で出会ったの」

エヴァは次に狼の事を聞くが、それには雪が答える。

「広場？・・・ああ、雪と茶々丸がエサをあげている場所か」

「そう。えつとね、それでね。

この子をウチで飼えないかなあゝって」

「なに？飼うだと？」

雪の提案にエヴァは眉を寄せた。
確かに飼うのは無理ではないが、些か得体が知れない。

「うん。こんな所にいたら他の人達が大騒ぎしちゃうし、なによりこの子は家族がいないの。
お願い！なんとか飼えない？」

「だがな．．こいつの素性が．．．」

「ダメなの．．？（うる」

エヴァが渋った瞬間に出ました、伝家の宝刀 涙目。
エヴァの心にテラ級のダイレクトダメージ。

「グハツ．．．！」

い、いいだろう．．．

ちゃんと世話をするのだぞ？」

「ほんと！？」

わぁーい！良かったね！！」

「ガウガウ！」

雪と狼は両手を握りながらジャンプして大喜びした。

エヴァもその光景を見て、「やれやれ」と言いながら微笑む。

「あの．．エヴァンジェリンさん」

すると、突然　刹那がエヴァに語りかけた。

「ん？なんだ？」

「その、柏木さんは何者なのですか？」

やはりこれだけは誰かに聞かなければ気が済まないのだろう。
刹那はエヴァに雪の事を聞いてみた。

「何者．．か．．」

雪はただの普通の女の子だよ。

超が付くほどのお人好しで、誰にでも優しい．．な。

吸血鬼である私を受け入れてくれた、大切な家族だ」

その顔は、【闇の福音】と怖れられた者とは別人だと思っほどの明るい笑みだった。

それはさながら、新芽が芽吹くような春を思わせるようだ。

「もしかして話されたのですか？ご自分の正体を？」

「ああ、話したぞ。

それでも雪は私を受け入れてくれた。

お前の体に眠る『禁忌』も受け入れてくれるかもしれんぞ？」

「っ．．．！！」

刹那はその単語を聞いて、体を強張らせた。

彼女の体には、ある禁忌が眠っている。

そのせいで彼女は幼少期から酷い扱いを受けた。

彼女が守りたいと思っている人と一緒にいられないのも、この禁忌による所が強い。

「ま、そんな早くに決断できんさ。

精々 悩んでおけ小娘。

人は悩みを乗り越えた時にこそ強くなる」

エヴァは刹那に先輩として少しアドバイスをする。

同じ悩みを持っていた人として、共感した部分があったのだろう。

「——ねえねえ2人とも！

この子の名前を決めようよ！」

とそこへ、狼とじゃれあっていた雪が戻ってきた。

さつき決め損ねた名前を付けたいらしい。

「最初はオーソドックスにポチって名前だったんだけど、この子が気に入らなかったみたいで。
次にガウ君って名前を付けんだけど、それも気に入らなかったらしくて．．」

（（いや、流石にその名前はない））

2人の心が重なった瞬間であった。
やはり雪のネーミングセンスは少し問題があるらしい。

「名前か．．よし、刹那、お前が決めてやれ」

「わ、私ですか!？」

エヴァは、刹那が仲良くなるチャンスだと思って話を振った。
加えて言えば、変な名前を言えばからかってやるつもりで．．

「そうですね．．．体毛が白いですし、安直ですが、白菊しろぎくと言つのはどうでしょう」

どうやら ちゃんとした名前だったようだ。

エヴァは心の中で小さく舌打ちした。

「白菊か．．．

キミはそれでいい？」

「ガウ！ガウガウ！」

どうやら狼の方も気に入ったようだ。
嬉しそうに吠える。

「よし、それじゃあキミの名前は白菊で決定！
ありがとう！桜咲さん！」

「い、いえ、私は．．．」

雪は大喜びして刹那の手を握る。
だが刹那の方は少し戸惑っていた。
どうやらこう言うのはあまり慣れていないみたいだ。

「そうだ、桜咲さん．．ちょっとお願いがあるんだけど．．いい？」

「お願い．．ですか？
どんな事でしょう？」

何かを思いついたのか、雪は刹那にお願いをした。
刹那も、間接的にだが雪を泣かせた責任もあるので、話を聞いてみる。

「その．．ね。」

お友達に．．なりませんか？」

雪は改めて刹那の前に手を出した。

刹那は言葉の意味が理解できず、説明を求めるように雪を見た。

「桜咲さんと こうして仲良く話しているし、白菊の名前まで決めてくれたんだもん。
できれば名前で呼び合いたいな。
だから、お友達になりませんか？」

雪は再度、刹那の前に手を出す。

刹那も雪の言葉を理解したらしく、微笑んで．．．

「ええ、よろしくお願いします。雪さん」

静かに、そして強く、雪の手を握った。

「うん、よろしくね！刹那さん！」

雪も嬉しそうにして刹那の手を握り返す。

「ふふふ．．やはり雪の人徳は素晴らしいな。
見ているこっちも心が安らぐ．．．」

エヴァはそれを見て小さく微笑む。
その声は誰にも聞こえることはなかった。

柏木 雪。刹那と友達になり、白菊を飼う。

お友達に．．なりませんか？（後書き）

白菊が雪達の新しい家族になりました。

ちなみに白菊の元の名前は「白妙菊」

花言葉は「あなたを支える」だそうです。

雪の従者にはピッタリな花言葉ですね。

最初はオーディーン繋がりでフェンリルにしようかと思ったんですが、それだとパワーバランスが崩壊してしまつて．．．
取りあえずは神格のある狼です。

そして、本編では刹那の出席番号は15番なんですが、雪がいるので一つ繰り上がります。

そしてここにきて重大な問題が浮上．．

雪のアーティファクトが思いつきません．．．

パクティオーしたいよー！キスさせたいよー！

でもアーティファクトが浮かばない！！

一体どうすれば．．．

読者の皆様にアンケートでもとってみますかね？

きつと皆様は素晴らしいアーティファクトを考えてくれるはず！！

もし浮かばなかったら本気でアンケートします。

素晴らしいアーティファクトを考えているのなら、今でもいいです

けどねー（ーー）

それでは皆様、またお会いしましょう（＾ー＾）／

うん！大好き！（前書き）

すみません皆さん遅くなりました！！

ちよつとばかりネタ切れになってしまいました。

そして雪のアーティファクトが思い浮かばなくて夜も眠れない・

皆んなのアイデアをオラに分けてくれえ！！

それに字数も少ないです。

本当に申し訳ありませんでしたああ！！

うん！大好き！

雪side

——ツンツン・ツンツン・・・

朝。

私の今日始めての感触は、誰かに背中を突っつかれる感触だった。

「うにゅーっ・・・だあれ・・・？
もしかしてエヴァちゃん・・・？」

私は背中越しに聞いてみるけど、相手は何も答えない。

それに、エヴァちゃんは私の目の前で寝ているから背中を突つつく事なんかできない。

それよりも突つつく力はどんどんと強くなる。

私は、まだ体にある眠気を堪えながら後ろを振り向くと・・・

「クウウン・・・」

私の髪の色と全く同じ、白い毛色を持つ狼。

少し前に私たちの新しい家族になった白菊だった。

「おはよゝ．．白菊うう．．むにゃむにゃ．．」

一体どうしたのかな白菊は．．

起きる時間にしては随分と早いよ．．

ふわああ．．まだ眠い．．

「んふふ．．ふかふかだあ．．」

でも二度寝するには時間が足りない。

私は朝の挨拶に白菊の毛をなでなでする。

えへへ．．やっぱり白菊の毛は気持ちいい．．

ふかふかしてるし、サラサラしてる．．

エヴァちゃんが言うには、「シルクと羽毛を足したような感触だらしい。」

「ハッ、ハッ．．」(ペロペロ)

「やあもう．．くすぐりたいよお．．」

どうやら白菊も気持ち良かったのか、私の顔をペロペロと舐めてくれた。

んんゝ．．

なんか目が覚めちゃった。

「おおお．．ゆうきいいいい．．．
どこだあああゝ．．．？」

いけない、エヴァちゃんが目を覚ましちゃった。
でもまだ寝ぼけているのか、「うゝゝ」とうめき声をあげながら、
手で辺りをペタペタと触る。

「エヴァちゃん、私はこっちだよ」

「あ．．いたあ．．．ぐう」

あらら、寝ちゃった．．．

エヴァちゃんは私の膝に頭をおいて、腰に手を回して寝息をたてた。

「ふふ．．エヴァちゃん、かわいい．．．」

「んうゝ．．．」

私は優しくエヴァちゃんの髪を梳く。

エヴァちゃんも気持ち良さそうにして、私の膝に頭をあずける。

子供。て言ったら怒るくせに、これじゃあ本当の子供と変わらない
よ。

「さあ、白菊もおいで」

「ガウ」

白菊が少し羨ましそうにしてたから、私のすぐ隣に呼んで頭や喉を撫でる。

白菊も嬉しそう鳴きながら、私の手を受け入れてくれた。

私はエヴァちゃんが目を覚めるまで、エヴァちゃんと白菊を撫で続けていた。

その後、目を覚ましたエヴァちゃんや、起こしにきた茶々丸さんが顔を真っ赤にさせていたけど、どうかしたのかな？

刹那 side

「——刹那さんだ。おはよう」

クラスのみんなが少しずつ登校してくる時間。

柏木さん．．．じゃない、雪さんが登校してきた。

雪さんと友達になってから、今ではエヴァンジェリンさんや、私が名前を付けた白菊とも仲良くなりました。

「はい。おはようございます雪さん」

今ではこうして挨拶を交わしたり、たまにお喋りをするくらいの仲

にはなっている。

雪さんはそのまま自分の席に座り、他の人たちと、お喋りを始めた。
・ どうでもいいですが、なぜエヴァンジェリンさんは顔を少し赤く染めているんですか？

「おや、随分と雪に親しそうじゃないか刹那」

「む、龍宮か」

すると、私と雪さんのやり取りを不思議そうに思ったのか、龍宮が声をかけてきた。

龍宮は、私と同じ“裏”の世界・つまり魔法の関係者だ。
よく一緒に仕事をしたりしている。

少し金にうるさいところはあるがな・

「一体どうしたというんだい？
敵視してない事は分かっていたが、警戒はしていたんじゃないのか？」

「少し前に色々とおつてな。
雪さんとは友達になっただんだ」

「なに？それは本当か！？」

いきなり龍宮が私の肩を掴みかかってきた。
普段の龍宮からしたら信じられない慌てぶりだ。

「雪はどうだ？ やっぱりカワイイか？
どうやって友達になっただ？」

「お、落ち着け龍宮！
一体どうしたんだ？」

「あ、ああ．．済まなかった。少し取り乱していたようだ」

私は何とか龍宮に落ち着くように指示する。
龍宮も私の声を聞いて多少は落ち着きを取り戻した。

「取り乱すなんて、お前にしては随分と珍しいな。
雪さんがどうかしたのか？」

「い、いや、少しだけ雪が気になっただけだ。
ほら、前の件もある事だしな」

．．なんか言い訳みたく感じるのだが．．
これは何か別の理由が――

「刹那．．疑り深いのも考えものだよ」

「わ、分かった。分かったから その懷に伸ばした手を引っ込めて
くれ」

全く、物騒な奴だ．．．

こんな所で発砲沙汰などゴメンこうむる。

「ふう．．それで？」

雪さんがどうしたんだ？」

私は若干ため息混じりに龍宮に問いかける。
まあ、ある程度は想像できるがな。

「いや、その．．雪はどうだ？
やっぱりアレか？カワイイか？」

「カワイイか．．．そうだな．．上手くは言えないが．．まるで小動物のような感じだ。
仔犬と言えいいのか？」

私にはよく分からないが、時折なんかこう．．
雪さんを『ギュッ』としたい衝動に駆られる事がある。
ああいうのが『カワイイ』という感覚なのか？

「そうか．．やはり刹那もそう思うのか．．
刹那はどうやって雪と友達になったんだ？」

「どうやって．．か．．．
普通に友達になれたぞ。
始めの部分は詳しく言えないがな」

まさか雪さんの正体を問い詰めるために向かったなど、口が裂けても言えない．．．

あの時、白菊と一触即発の空気になって雪さんが泣き出してしまい。一体どうやって気付いたのか、エヴァンジェリンさんが物凄い速さで私たちの目の前に現れて私を睨みつけ．．

うん、あれは本当に恐ろしかった．．

どう足掻いても絶対に抵抗できないと、本能で思い知らされた．．．

「そうかそうか．．成る程．．．
なあ刹那、雪の好きな食べ物分かるか？」

「たしか甘いものが好きだったはずだ。
以前、たい焼きを美味しそうに食べていた」

あの時はまるで『はむはむ』と擬音が聞こえるくらい美味しそうに食べていた。

小さい口で精一杯たい焼きを頬張って．．
おっといけない．．
少し思考がズレてしまった。

「甘いものか．．
成る程、情報提供 感謝するよ刹那。」

今度 格安で仕事を引き受けよう。

きつと雪なら『はむはむ』と可愛らしく食べて．．
ふふふ．．これで私もようやく．．．」

「あ、おい龍宮．．．」

それを聞いた龍宮は満足した表情で、私の声も聞かずに自分の席へと戻っていった。

「全く．．一体どうしたんだ龍宮は．．．」

本当に変な奴だ．．

雪さんが転入した日から少しずつ目立ってはいたが．．
ため息をはきながらも、私も自分の席に戻った。

雪 side

「んしょ．．．んしょ．．．」

今日の授業が終わって放課後。

私は皆んなのノートを職員室に持って行くこととしていた。

実は私、新田先生が受け持っている現代国語の教科連絡だったりしています。

新田先生からは、「雪くん、重たいのなら無理して運ばなくてもい

いんだよ？」って言われたけど、これくらい頑張るんだから！
皆んなは新田先生のこと、「鬼の新田」って言って恐がっているけど、
新田先生は優しくて良い先生です。

「ふう．．けど　少しだけ重いや．．」

やっぱり１人だけで運ぶのは無理があつたかな？

ノートも３０人分あると、さすがに重い．．

エヴァちゃん達は学園長に呼ばれたとかで今はいないし．．

うーん．．よし！

ここは私１人で頑張らないと！

「——どれ、手伝ってあげるよ」

あれ．．？

そう思ったそばから、誰かがノートを半分持ってくれた。

「ありがとう。」

あ、あなたは同じクラスの．．」

「龍宮　真名だ。よろしくたのむよ」

ノートを持ってくれた人は、褐色の肌と高い身長。

『カッコイイ女性』オーラが感じられる、龍宮　真名さんだった。

「さて、早くこれを職員室に運ぼう。
少しだけ君とお喋りしてみたいからね。
この後は時間に余裕あるかい？」

エヴァちゃん達は、終わり次第 先に帰っててもいい。て言っていたし。

白菊も今はチャチャゼロちゃんと遊んでるから、時間は結構あるね。

「うん、大丈夫だよ」

「そうか、それはよかった。

近くにいいお店があるから、そこでお茶しながらお喋りをしよう。
ちなみに、そのお店は餡蜜が美味しくてね。

甘いものは好きかな？」

「うん！大好き！」

私、甘いものには目がなかったりするんだあ。

甘いものを食べたりすると、なんだか幸せな気持ちになれる。

これぞ、女の子の特権だよな。

「ふふふ．．．そんなに嬉しそうな顔をして．．．
なら早く運ばないといけないね。

あそこの餡蜜は売り切れる事もあるから」

「ホントに？それじゃあ早く職員室に——わっ」

少し急ごうとした矢先に、私の足がもつれて、私は前のめりに倒れ
だした。

私は、今から来る衝撃に目をつむって——

——ぼにゅ

．．．．あれ？

予想していたより全然 軽い。というか柔らかい。

それに、倒れた感覚も殆んどない。

何が起こったのか確かめるため、私は目を開けてみると．．．

「ふう．．間一髪だったね。大丈夫かい？」

「ふにゅ？．．龍宮．．さん？」

目の前には龍宮さん。

私は龍宮さんの胸に挟まれている。

顔に感じた柔らかい感触の正体は、龍宮さんの胸だった。

「い、ごめんね龍宮さん。

今すぐ どけるから——わぶっ」

すぐに どれようとした瞬間、私は龍宮さんに抱き寄せられて、また胸に挟まれた。
ふえ？どうしたのかな？龍宮さん．．

「た、龍宮しゃん．．．？」

「ああ済まない。抱き心地が良くて つい。
悪いがもう少しこのままにさせてくれないか？」

ううう．．少し恥ずかしいよお．．
こんな所を他の人たち見られると．．
でも柔らかくて気持ちいいし．．
私自身もこの感触は嫌いじゃないし．．

「．．うん、少しだけなら．．いいよ？」

結局 流されちゃう私でした。

私はしばらくの間、龍宮さんの胸に挟まれて、柔らかい感触を感じていた。

龍宮 side

ふふふ．．今 思い返しても素敵な場面だった。

雪がすっかりと躓いてしまい、そして私の胸に．．

必然的に雪の視線は真近で私を見上げる事になり、あの つぶらな瞳での上目遣い．．

ごほん．．いけない、少し落ち着くんだ．．

雪と一緒にノートを運んだあと、私たちは【喫茶・しずかせ静風】に着いた。まずはこっちが大事だ。

「うわあ．．いいお店だね。

それに、すごい静か．．」

どうやら雪もこの静風の雰囲気が入ったみたいだ。

静風は全体的に“和”をイメージとして、その名の通りとても静かだ。

だからと言って、お客がいらないという事ではない。

純粹に、静かな雰囲気が好きなお客しかいないからだ。

そして席も、まるで個室のように区切られている。

当然の事、メニューも殆んどが和風だ。

「すまない、注文を頼む。

お茶を2つ、それと飴蜜も2つお願いする」

私は早速注文を頼んだ。

準和風な着物をきたウェイトレスは注文を聞くと、すぐに厨房に伝える。

すると、頼んでから2分もしない内に品物はテーブルに並んだ。
これが静風のもう一つの特徴だ。

ここのお店は、注文を受けてから3分以内にお客に届ける事を自らに課している。

それでいて味は絶品。値段も安いときた。

私としては これ以上のお店はないと思っている。

「さあ、はやく召し上げれ。

きつと君の口にも合うよ」

「うん、それじゃあ いただきます（はむ）」

雪はそう言つて餡蜜を一口食べる。

最初は、口に合わなかったらどうしようかと不安だったが、それも杞憂だった。

目の前で ほくほくの笑顔を浮かべている雪を見れば。

「んううゝ．．おいしいいゝ．．．

龍宮さん、これすつごく美味しいよ。

えへへ．．しあわせえゝ．．．」

雪は とろんとした笑顔を浮かべながら餡蜜を食べる。

そしてまた とろんとした笑顔を浮かべてまた餡蜜を．．の繰り返しで。

ふふふ、私には見えるぞ。

雪の頭から生えている仔犬の耳が。
時折ピコピコと動きながらも、嬉しさで耳がたれている。
こんなに喜んでもらえるなら、お茶代あわせて380円など無いに
等しい。

「そうかそうか、喜んでもらえて何よりだよ。
あ、口元に餡がついてるよ」

「ふえ？ありがとう龍宮さん」

私は雪の口元についた餡を取り、パクツと食べる。
ふふ、まるで恋人がやるワンシーンみたいだね。
でも悪くない。いや、むしろ良い。

「そんなに慌てて食べなくてもいいんだよ。
なんなら私の分を食べても良いんだしさ」

「わふっ．．で、でも龍宮さんに悪いし．．」

私は雪の頭に手をおいて優しく撫でる。
成る程．．たしかにこれは やみつきになる感触だ。
エヴァンジェリンが雪の頭を撫でる気持ちも分かる。

「私のことは気にしなくてもいいよ。
またお店に来れるんだしさ。」

それよりも、できれば苗字で呼ぶのはやめてほしいな。
これからは名前で呼んでほしい。お友達としてね」

「う、うん。分かったよ、真名さん」

「それでは改めて、これからよろしく頼むよ雪」

「ん〜♪．うん、私もよろしくね、真名さん」

よし、これで私も雪の友達だ。

雪との距離感がグツと縮まった感じがする。

私はもう一度 雪の頭を撫でて、その感触を満喫する。
どうやら雪も気持ちいいみたいだね。

「そうだ、もし何か困っている事が起きたら私に相談してくれ。

刹那から聞いているかもしれないが、私も一応“そっち”側の関係者だからね。

雪の頼みとあれば無料で引き受けるよ」

「ん？もしかして真名さんって、刹那さんとお友達なの？」

「ああ、刹那とは同じ部屋だからね。

仕事もよく一緒にやっていたりするんだ」

と、今は“そっち”の会話をする必要はないね。

その後は、とくに取りとめのない話をしながら、私たちは楽しくお茶を楽しんでいた。

side out

雪と真名がお互いの距離を縮めていた頃、静風の外に1人の人物がいた。

真名とは全然違う肌の黒さ・いわゆる黒人という部類に入る人間だろう。

そう、学園長と一悶着したガンドルフィーニ先生だ。

ガンドルフィーニの目つきは険しく、静風の奥をジッと睨みつけ、手帳に何かを書き込んでいる。

その手帳には――

『―― 柏木 雪。』

桜咲 刹那に加え、龍宮 真名も自らの陣営に加えてる模様。学園に敵対する姿勢あり。

―― 危険度：A 』

と記されていた。

うん！大好き！（後書き）

今回は真名とイチヤイチヤです。

そういえば真名の好きなものって、餡蜜と仔犬なんですよね。犬っ娘属性の雪と相性がいいですよね。

そして、雪に漂う不穏な空気・・・

ってかガンドル・・・あいつは一体何を考えているのか・・・

次回。ついに重大な事件が起こります。

そしてようやく出てくるアンチ。

果たして一体どうなるのか・・・

次回をお楽しみに（、――）ゞ （ビシッ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5576w/>

魔法先生ネギま! ~ 白雪の軌跡 ~

2011年12月7日00時55分発行